

fig. 406 調査区平面図 (1:600)

S D 02 4～6区で検出した溝で、幅0.6～0.8m、深さ0.4～0.6mである。長さは12.5mまでを確認したが、南北両側ともに傾斜変換部で削れてなくなっている。断面の形状は上部が開いた「U」字形で、埋土は灰色砂礫である。遺物は弥生土器片が出土したが、磨滅した破片であるため溝の時期を示すものであるとは言いがたい。この溝は、南西から北東へと傾斜する緩斜面の端部に位置し、溝の北東隣に平行して傾斜変換部が続いていることから、緩斜面地と急斜面地とを区画する溝であると思われる。

傾斜変換部 総ての調査区・トレンチで緩斜面から急斜面へと移行する傾斜変換部を確認した。傾斜変換部より下では遺構は検出できず、遺物も表土中から少量が出土するのみであった。

出土遺物 遺物は、中世の土師器片・須恵器片・丹波焼片・瓦片と、弥生土器片が出土した。しかし、これらの遺物を含む層は、純粹な堆積状況を示すものではなく、二次的に堆積した状況と思われる。中世の瓦片は段丘面上の日輪寺との関係を、弥生土器片は近隣に同時代の遺構が存在する可能性を示唆するが、今回の調査では遺構は検出できなかった。

3.まとめ 平安時代末頃の建物群等を確認した第1次調査は、櫛谷川右岸の沖積地で実施されたもので、背後の段丘斜面上での調査は昨年度末に実施された第3次調査に続き、二回目となつた。この部分では遺構は存在するものの遺構密度は希薄で、沖積地で確認された遺構とは、立地条件も考慮して、性格が異なるものと思われる。

時期は不明であるが、溝 S D02は段丘面が緩斜面に移行し、さらに急斜面に変化する部分に掘られた区画溝と考えられる。削平されたためか今回緩斜面上では別の遺構は検出できなかつたが、区画溝がある以上何らかの遺構が存在したと思われる。

段丘面上の日輪寺と今回の調査地点とは、約150m離れている。中世の瓦片が出土したことだけでは、日輪寺に関係する施設が存在した根拠にはなりえない。ただ時期不明の溝 S D02が日輪寺と同時期のものと仮定すれば、その可能性も考えられる。

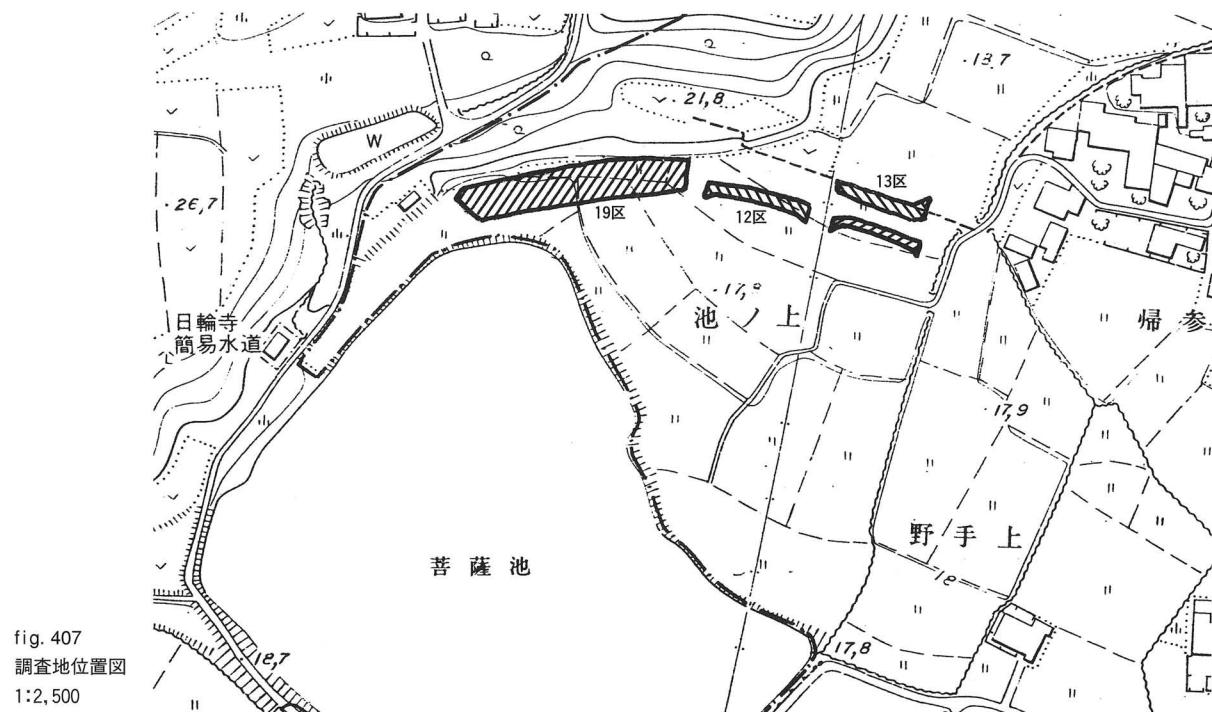
弥生土器片は磨滅しており、同時期の遺構も検出できなかつたが、近隣には遺構が存在すると考えられる。今後周辺で発掘調査を実施する場合、留意する必要があろう。

51. ふたつや 二ツ屋遺跡 第5次調査

1. はじめに

二ツ屋遺跡は、土地区画整理事業に伴い平成3年度から調査を実施している。これまでの調査で、弥生時代中期後半から近世に至る遺構・遺物が多数検出されている。主な調査成果として、有力者の邸宅跡と考えられる平安時代末の建物群、弥生時代終末から古墳時代前期の井堰の検出等が挙げられる。

今回は、区画街路予定部分の調査で、12・13・19区について調査を実施した。12・13区については、平成4・5年度調査部分の拡幅部分について調査を実施した。



- 第1遺構面** 平安時代後半の溝が3条、用途不明遺構が1基検出された。
- S D 101** 幅2.5m、深さ40cmの溝で、36mに渡って検出された。平成4年度の調査でも検出されている遺構で、掘立柱建物群の南側を区画する溝であると考えられる。埋土から瓦も検出されており、前回の調査結果と一致する。
- 出土した瓦は (fig. 409) は、複弁六葉蓮華文軒丸瓦で、その複弁は丸みを持つ。外縁に沿って圈線を1条巡らせる。中房の蓮子は中央に縦に3個を配し、その両脇に縦に4個+1個と対照的に配する。復元径16cm、須恵質。
- S D 102** 幅30cm、深さ3cmの溝の痕跡が検出された。S D 101に平行して検出され、S D 101と同時期に存在したと考えられる。
- S D 103** 幅5m、深さ1mの溝で、S D 101に直交して検出された。時期は不明だが、S D 101より新しい時期の遺構である。
- S X 101** 直径が約7m、深さ約1.2mの不正円形の遺構である。用途は不明である。

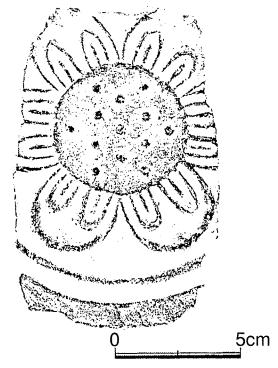


fig. 409 SD101 出土瓦

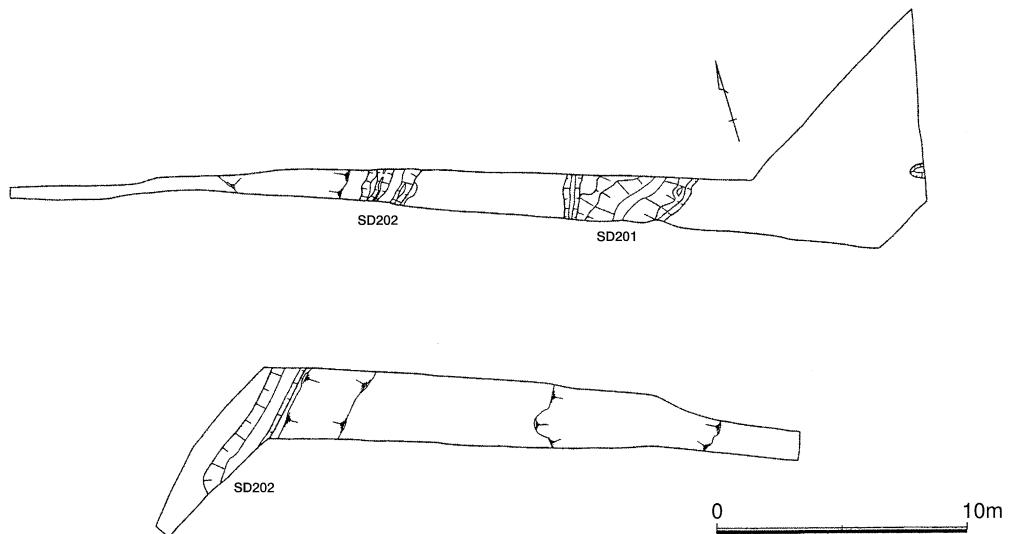


fig. 410 13区 第2遺構面平面図

- 第2遺構面** 古墳時代後期の溝が2条検出された。
- S D 201** 幅約3m、深さ80cmの溝で、古墳時代後期の遺物が少量出土した。
- S D 202** 幅約2m、深さ30cm程度の溝で、13区-②から13区-③にかけて検出された。古墳時代後期の遺物が少量出土した。
- 19区** 弥生時代後期と平安時代の遺物が少量出土したのみで、遺構は検出されなかった。
- 3.まとめ** 今回の調査では、12区を除き、顕著な遺構は検出されなかった。12区においても溝を数条検出したのみであるが、12世紀後半の区画溝の検出は、第1次調査時の成果を補足するもので、掘立柱建物群を囲む様に作られた溝である可能性が高い。
- 弥生時代後期の遺物が散見されたが、遺構の存在は確認されなかった。調査区北側の丘陵部からの流出土から検出されており、丘陵上に弥生時代後期の遺構が存在すると考えられる。

52. 頭高山遺跡 第7次調査

1. はじめに

今回の調査は、港湾整備局により震災復興事業の一環として行われる、住宅供給を目的とした宅地造成工事にともなう発掘調査であり、平成7年度からの継続調査である。

今年度の調査の対象面積は約16,000m²である。調査範囲のうち14,000m²にわたる範囲に中世の山岳寺院が存在する事が、平成5年の試掘調査によって確認されていた。この中世寺院は、後世の文書によって天台宗・「大谷寺（たいこくじ）」と伝えられている。文書によると、大谷寺は戦国時代の戦乱で焼き討ちにあい消失するまで、麓の伊川流域に莊園をかまえる勢力であったとされている。現在伊川谷の集落内に天台宗の頭高山太谷寺と言う寺院が存在するが、この寺院の所有する縁起にも同様の記述が見られる。一方、今回の調査区の大半の部分には、従来より周知の弥生時代の集落址が中世の遺構面の下層で確認されており、この弥生時代遺構面に関してはほとんどを今年度の調査対象外とした。今年度調査対象範囲約16,000m²のうち約1/2にあたる約7,800m²の弥生時代遺構面は次年度に調査を実施する予定である。



fig. 411
調査地位置図
1:4,000

2. 調査の概要

1) 調査結果

室町時代

調査に際して、便宜上調査区を丘陵の尾根ごとに設定し、順に7～10区とした。そのうち中世山岳寺院の中心伽藍と推定される遺構の所在する尾根付近を7～8区とし、以下の遺構を確認した。本堂と見られるものを含む5基の「基壇」、基壇と同じく何らかの建築物の跡地と考えられる「区画」と、その可能性のあるもの計6か所および寺院に付随する参道の可能性のあるもの、通路の可能性のある盛土2か所、五輪塔1基である。

「基壇」および「区画」の呼称については、盛土あるいはまわりの地面を削りだして、台状の隆起をつくり、建物の土台としたものを「基壇」と呼び、地面を掘りくぼめて建物を建てるために必要な平坦面を造っている場合を「区画」として両者の遺構の構造上の性格の違いを区別した。「基壇」、「区画」の概要是表にまとめたとおりである。

基 壇 基壇上の礎石やピットの検出により、建物の規模や構造を推定できるものは、後述する1号基壇のみである。ただ、3号基壇上面の堆積土内から細片ではあるが比較的多量の瓦が出土しており、瓦葺きの建物が存在した可能性がある。6号基壇においても基壇上面から近世と思われる瓦がまとまって出土しており、近世の建物が存在していた可能性ある。

2号基壇については、南隣の1号基壇を構成する盛土で構築されており、二つの基壇が同時に造られたことがわかる。基壇正面および背面に溝を確認している。

区 画 区画3の平面上には、3間×2間の掘立柱建物が確認されたが出土遺物が皆無で、建物の時期を決定することが出来ない。下層の弥生時代の遺構である可能性もある。区画5は1・2号基壇を築成した後にさらに土を積んでこの平坦面を造ったと考えられる。2号基壇及び区画5の上面には3号基壇からの流土が堆積しており、3号基壇出土と同じ様な瓦片が多量に出土しており、1・2号基壇との時期差はあまりないように思われる。

遺構名	平面規模・高さ	基壇の築造	基壇上の建物
1号基壇	17m×15m・約50cm	北半を地山削り出し、南半を盛土により構築	5間×5間礎石建物
2号基壇	12m×10m・約50cm	1号基壇と同一の盛土により構築	建物の構造・規模不明
3号基壇	15m×7m	丘陵の尾根を削平し、平坦な台状に構築	瓦葺き建物の可能性がある
4号基壇	20m×12m	丘陵の尾根を削平し、平坦な台状に構築	建物の構造・規模不明
5号基壇	40m×12m	丘陵の尾根を削平し、平坦地を造成	建物の構造・規模不明
6号基壇	12m×15m	丘陵の尾根を削平し、平坦地を造成	瓦葺き建物の可能性がある

表1 基壇の概要

遺構名	平面規模	平坦面の築造	平坦面の建物
区画1	12m×7m	斜面を削って平坦面を造成	建物の構造・規模不明
区画2	8m×5m	斜面を削って平坦面を造成	建物の構造・規模不明
区画3	10m×10m	4号基壇より一段低く造成	3間×2間掘立柱建物を検出
区画4	20m×7m	平坦面の北側半部が盛土による構築	建物の構造・規模不明
区画5	18m×5m	単一層による厚い盛土による構築	建物の構造・規模不明

表2 区画の概要



fig. 412 第4号・5号基壇



fig. 413 区画1

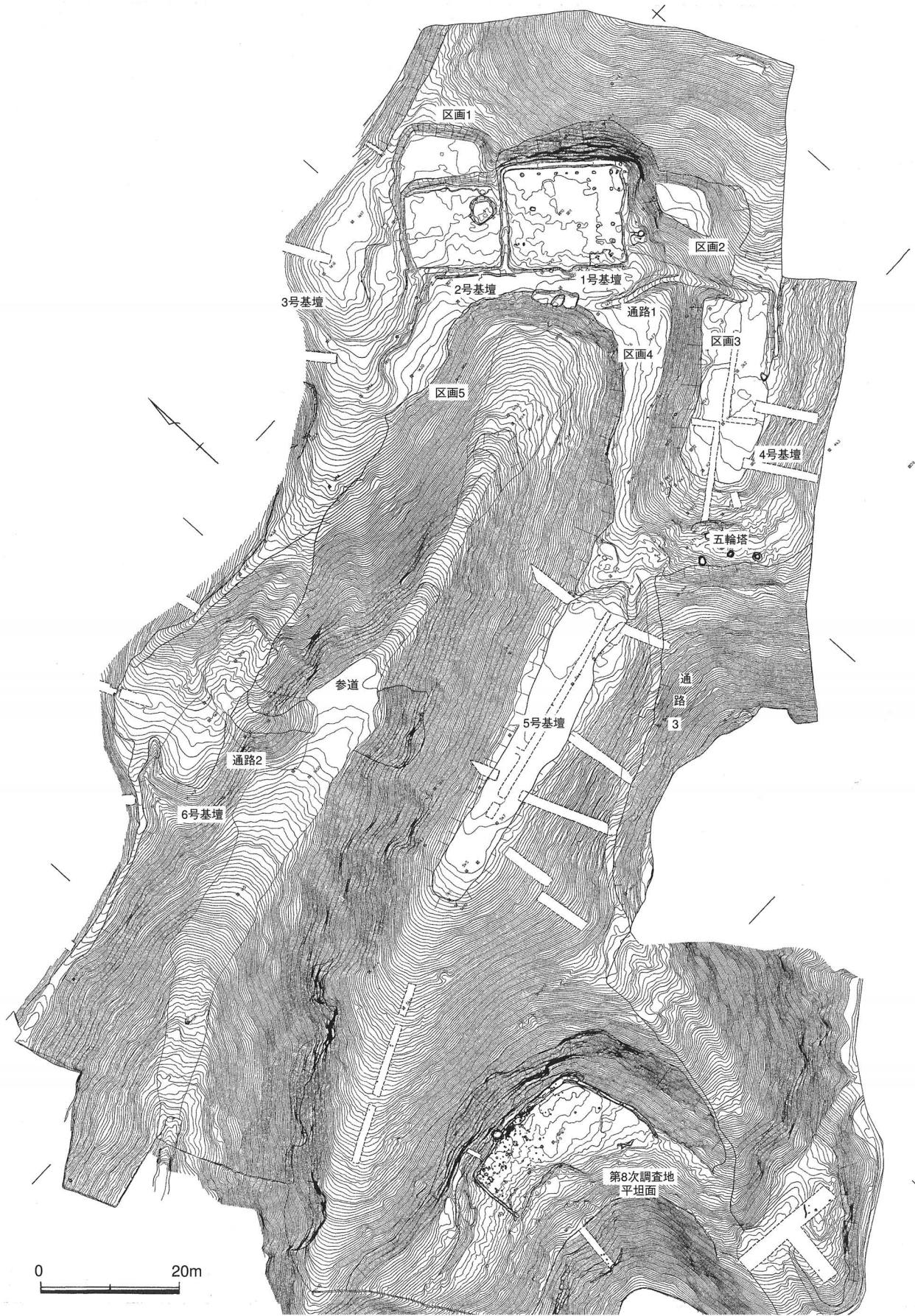


fig. 414 第1遺構面 遺構配置図 (1:800)

1号基壇 1号基壇は、当寺院遺構の伽藍配置の、中央に位置すると考えられる遺構である。基壇は、二本の西に向かって下って行く尾根の間の谷を利用して築かれている。基壇中心部を東西方向に断ち割って断面観察した結果、以下のような基壇の構築方法を確認した。

まず、二本の尾根の分岐点、谷のいちばん浅い突き当たりの部分を削り、西向きの段状の平坦地を造りだす。その段の西側に、削った際にでた土を充填して平坦地を拡張し、基壇状に造りだしている。つまり後半分を地山削り出し、前半分を盛土によって造っていることになる。この盛土は地山の混礫砂と、茶褐色の粘質土を交互に積み、最下層周辺には砂礫層を選択している。

基壇の構造上特徴的な点は、盛土が谷の傾斜と同一方向の傾斜をもたせて積まれていることと、基壇は一旦、谷を埋めて平坦地を造ったのち、さらにその上に台状に土を盛るではなく、一旦谷を埋めて平坦地を造ったのち、その盛土の前面を削り台状の隆起に形を整えている点である。

基壇の平面には、壇上に構築されていた建物の柱を支える礎石あるいは、礎石を抜き取った痕跡である「抜き取り穴」が、数か所で確認された。

確認された礎石および抜き取り穴の配置から、この基壇上の建物は、5間×5間の柱間をもつと考えられる。

基壇の規模は、南北17m×東西15m、0高さは約50cmで、間口正面を除く周囲3方に幅約50cm～1mの溝を有する。

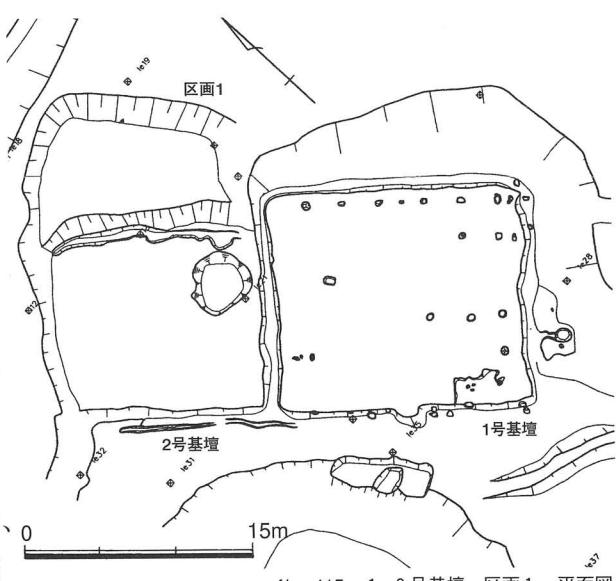


fig. 415 1・2号基壇 区画1 平面図



fig. 416
1号基壇全景
(後方は2号基壇)

また、間口正面中央には1m程度の突出部があり、その両脇には特に四角く面取りした石材を配置している。基壇上のその他の石材が自然石を用いているのに対し、この位置だけに加工した石材を用いることによって、正面入口を区別する意味を持たせていると考えられる。突出部は、おそらく建物内に上がるための階段と推測されるが、表面は風化、流失しており階段の構造を確かめることはできなかった。なお、この突出部脇の2つの石材のうち南側のものは、五輪塔の地輪であったものを何処からかもちより、転用したものである。

さらに、この基壇の正面の11か所に石材が据えられており、石材は失われているが、おそらく石が据えられていたと考えられる穴も2か所確認できた。このことから基壇の正面に化粧石が施されていたか、あるいは庇を支える柱の礎石である可能性が考えられるが、基壇正面の風化、流失が著しく、残った石材の配置からその性格を断定することは、難しい。

溝および基壇の東半部には厚く焼土が堆積しており、焼土内に多量の、壁材と思われる植物の纖維を含んだ焼けた粘土塊が含まれていることや、焼土を除去して確認された面が強く赤化あるいは炭化していることなどから、基壇上の建物は、火災により倒壊したと推測される。これは当寺院が戦国時代の戦乱で焼き討ちにあったとする後世の文献資料とも合致する。この焼土からは多くの遺物が出土しているが、特に青磁片、および仏具（密教系寺院に特有の六器）の可能性のある土師器に注目すべきである。一方で、寺院施設によく見られる瓦は、ごく微量出土しているにすぎない。このことは、建物の屋根が、瓦葺きではない、あるいは一部にしか瓦を用いない種類の形式であった可能性を示唆している。

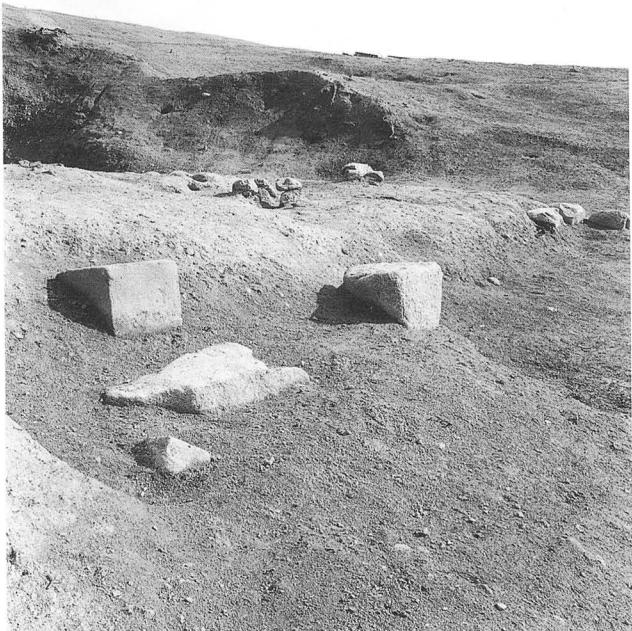


fig. 417 1号基壇 間口正面中央の突出部

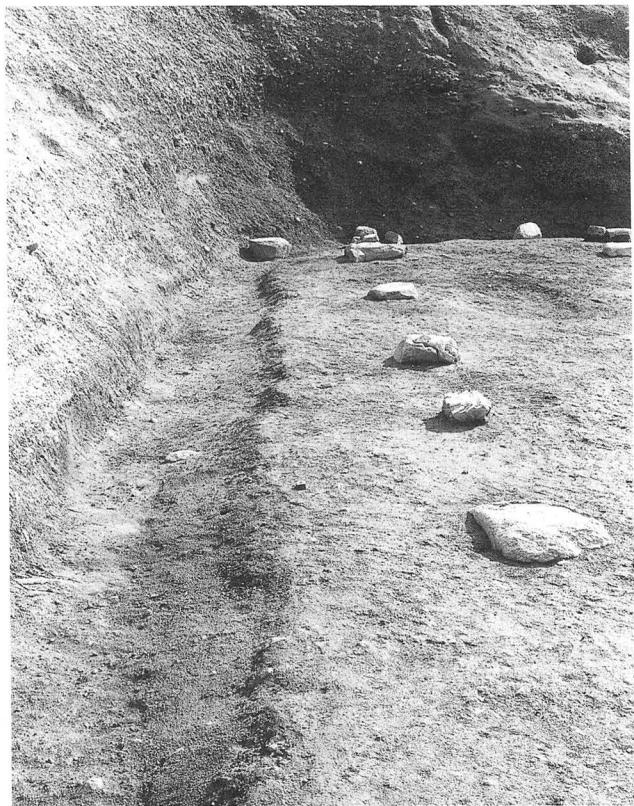


fig. 418 1号基壇 積石と溝

通路 1 一見土壘状に隆起した箇所で、幅約 1 m、高さ 40cm 程度で 1 号基壇の正面から 4 号基壇の尾根上まで続いている。2 層からなる盛土によって造られているが、1・2 号基壇と異なり、盛土の上に、後からさらに盛土して構築したものである。

通路 2 6 号基壇の南側から南の谷に下っていく隆起で、淡黄灰色の砂質土とその礫まじりの土層を繰り返し盛土している。谷と尾根とを行き来する「通路」の可能性がある。

通路 3 5 号基壇の南側の、東西方向にのびる段状の平坦地である。幅約 2 m 程度で、丘陵の麓まで続いている。丘陵南麓と寺院のある谷とを行き来するための通路の可能性がある。

参道 この寺院施設は二本の西向きの尾根と、その間の谷という自然地形を利用して造られている。本堂と推測される 1 号基壇を中心に、伽藍配置はすべて東西に軸を持つ向きに造られているが、これも地形上の制約からきた選択の結果と考えられる。この地を寺域に選んだ理由は明らかではないが、本堂が西の谷に対して正面を向く事を選んだことは、ある程度西の方向を意識していた可能性もある。この谷を真っすぐに突っ切って山を下ると、伊川流域の集落に出るがこのことは伊川周辺に莊園を所有する寺院の、「参道」としての谷の機能を連想させる。ただし推測を裏付けるような遺構、遺物等は検出されていない。

1 号基壇付近の谷埋土からは、多くの瓦、土師器、建物の礎石と考えられる石材、五輪塔の火輪部分など、多くの遺物が出土したが、いずれも斜面上方、1 号基壇周辺からの流土に混じって谷底に堆積したものである。谷底の平坦面の幅は、狭くなったり、広がったりしながら麓まで続いており、ほぼ自然地形のままの状態を保っていると考えてよい。雨が降れば周辺の水がすべてこの谷に集まり、小川の様相を呈している。このような状態をして、「参道」としての機能を維持できたのかどうか、疑問であるが、他に「参道」が確認できないこと、最も立地的に自然であること、そして 1 号基壇正面の盛土が 3 m × 8 m の幅で一段凹むように造られているが、これを参道におりる階段の取りつき部分であると解釈して、この谷を伊川周辺からの「参道」である可能性を否定せずに残しておく。



fig. 419
参道全景

一石五輪塔 3号基壇の西側のふもとに、やや斜めに傾いているものの、一石五輪塔がたっておりその下層から胴径約70cm、現存高約70cmの備前焼と思われる大甕がほぼ完形で出土した。大甕内部には、最下層に暗灰色粘質土、その上に人頭大の礫多数、そして細砂が順に堆積していた。この、上層の細砂については、後世に大甕周辺の土が流入して堆積したものと考えられるが、礫および最下層の暗灰色粘質土については、いずれの時期に堆積したものかは、断面観察のみでは決定しがたい。このような礫は付近に自然に存在する環境ではないことを考えると、人為的にこの場所に運ばれたものと考えられる。可能性としては、大甕の上に集積されていたものが、時間の経過にともない甕内部に崩落した。または、人の手によって甕の内部に投棄された。の二点がまず考えられる。この一石五輪塔および下層の大甕の性格については、通例からいって墓である可能性が高いが、大甕内の埋土からは人骨片等の直接的な資料は得られなかった。五輪塔は、土層断面観察の結果、後世に現在の位置に据えられた可能性が高く、大甕が埋納された時点での相互の関係は不明である。五輪塔そのものの型式は古く、室町時代までさかのほる可能性もある。

一方、大甕内の最下層に堆積している灰色粘質土からは、銅錢が一枚出土しているが、鋸びており種類の判読は現時点では困難である。また、上層の細砂内には、礫にまじって瓦、土師皿などが出土しているが、これは五輪塔周辺のものが後世に混入したと考えられる。また、一石五輪塔の周辺には、完形に近い瓦が多量に堆積していた。これは意図的に投棄した瓦溜めとも考えられるが、五輪塔との関係は不明である。周辺の表土からは二枚の銅錢が出土しており一枚は鋸びており種類の判読は不能、もう一枚は「聖宋元宝（1110年）」である。大甕内部で出土した一枚もあわせて、これらは埋葬時の儀礼にともなって、墓に置かれたものである可能性が高い。

前述のとおり、この大甕は墓である可能性が高いが、埋土内の堆積状況は、もう一つの可能性を示している。すなわち、この大甕が、一旦は埋納されたものの、いちど掘り返されて、ふたたび埋め戻された可能性である。多量に大甕内に残っていた人頭大の礫が人為的にこの場所に投棄されたものならば、第二の可能性が濃厚である。



fig. 420 一石五輪塔



fig. 421 一石五輪塔下の埋甕

出土遺物 中世に関連する遺物については、瓦、土師器などが28ℓコンテナに約30箱出土しているが、特に注目すべきは先述の1号基壇上から出土した、六器の可能性のある土師器、剣先連弁の文様をもつ青磁片等であろう。一石五輪塔周辺の瓦溜めからは、多くの軒瓦も出土しており、これらを詳細に検討すれば遺構の時期について正確に知る手掛かりとなろう。

現時点での所見では、これらの瓦、青磁の時期は、室町時代後期のものと考えている。そのほか前述の銅鏡3枚や、1号基壇上からは釘や鍔等の金属製品も出土している。

小 結 以上が、中世遺構の調査の概要である。今回の調査で、この遺構が寺院施設であるという直接的な遺物、遺構は確認できなかった。しかし瓦が多く出土すること、基壇とよんだ遺構の構造、および立地から、消去法的にいって寺院施設と考えて差し支えないと思われる。瓦の形式は室町時代後期を示しているが、この遺構が天台宗寺院であるとか、「太谷寺」であるといったことは、地域の伝承および後世の文献からの推測であり、今回の調査でそれを科学的に実証するに足る資料を得ることはできなかった。寺域や、各々の遺構の性格なども不明の点は多く、想像の域を出ない。しかし、これもまた消去法的にいって他に適当な可能性がないため、現時点ではこの遺構が天台宗・旧「太谷寺」跡である可能性が高いことを指摘しておきたい。

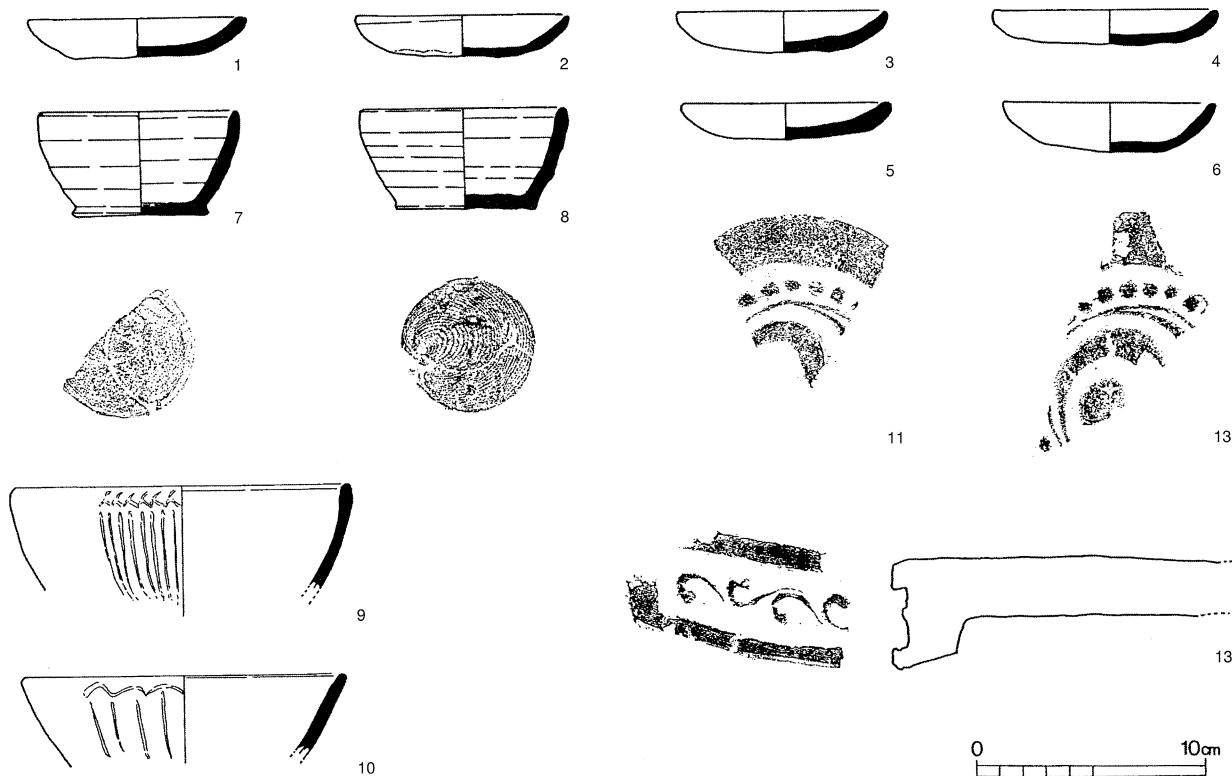


fig. 422 1号基壇出土遺物実測図

弥生時代の 今年度調査対象範囲の16,000m²の内、約4,600m²については、弥生時代遺構面までの調査遺構面が完了している。調査完了地域は、昨年度調査区に隣接する北側の約3,000m²、および丘陵の南東斜面の1600m²である。うち、北側の約3,000m²に関しては、その3/4が表土直下地山で、遺構、遺物は確認できなかった。わずかに西端尾根付近で長径2m程度の焼土坑（SK27・28）を2基確認したが、これらの時期は不明である。一方丘陵の南東側1,600m²の地区では、遺構の密度が高く、遺物量も豊富である。今回の調査で確認できたのは、住居跡2棟、段状遺構3か所、溝1条、土坑1基そしてピット数箇所である。

S B10 7区の南側の尾根上の、標高113m付近、比較的平坦な場所に位置する。平面形は小判型で、南北に長く、長径約5.5m、短径約5.5mの小型の竪穴住居である。中央土坑の南北両脇に、柱穴と思われる径40cm程度のピット2基と、その他に2基のピットを確認しているが、この住居跡の特徴的な点は、周壁溝の外側4か所にピットをもつ点である。この4基のピットは、いずれも径約40cm程度で、住居跡のまわりに比較的等間隔に配置されている。その機能は不明だが、住居の屋根を支える柱穴の可能性もある。

S B11 S B10の位置する尾根の最も高い場所、標高117m付近の平坦面で確認した。径約6.5mのほぼ円形の平面を呈する竪穴住居である。この住居跡の位置する場所は、前述の中世遺構、4号基壇と呼ぶ台状の地形の部分であり、その地表面は中世にある程度削られて整地された痕跡がある。そのためやや残存状況が悪く、遺物の出土量も極端に少なかった。主柱穴と思われるピットが南側に2基、その他にピットが4基平面上で確認されているが、北半分が大きく攪乱されており一部欠損しているため、正確な柱穴の配置は不明である。

段状遺構09 S B11の北に隣接する。北向きの斜面標高106m地点に立地し、幅約2m、長さ13m程度の東西に長い平坦面である。平面上で幅10~20cm程度の溝、径30cm程度のピットが検出された。検出状況では、溝はとぎれがちではっきりしない。遺物は少ないが、弥生中期の土器を出土している。

S K28 7区の東端、昨年度調査区に隣接する、標高108m付近で検出した。長径3m、幅1m程度の不整楕円形で、深さは約30cmである。ごく少量の弥生土器を出土している。



fig. 423 SB10



fig. 424 SB11

出土遺物 先述の調査範囲からは、あわせて28ℓコンテナ20個程度の弥生土器が出土した。これらの土器は、調査中の印象ではすべてが弥生IV様式と思われる。中でも段状遺構08から出土した土製品は注目に値する。この土製品は高さ約10cm、手づくねで、形状は一見きのこを思わせる。その用途は不明で、全国でも類例の少ないものである。そのほかごく少量のサヌカイト片や、打製石鏃が3点、大型蛤刃石斧1点が出土している。これらの大半は住居跡および段状遺構の周辺から出土したものである。

小 結 今回の調査では、調査区に存在する弥生時代遺構面のごく一部を調査したに過ぎない。したがってほとんどの遺構が未調査地に続いており、検出が完了していない。これらの遺構については、次年度の調査をまってあらためて詳述する必要がある。

3.まとめ 今年度調査の主たる対象である中世寺院に関しては、ほとんどすべての調査が完了している。このような中世山岳寺院の調査された例は少なく、兵庫県下でも7例目にあたる稀少な調査例である。その意味でも今回の調査結果は重要であり、また中世の西神戸の歴史を知る上でも貴重な資料となるであろう。

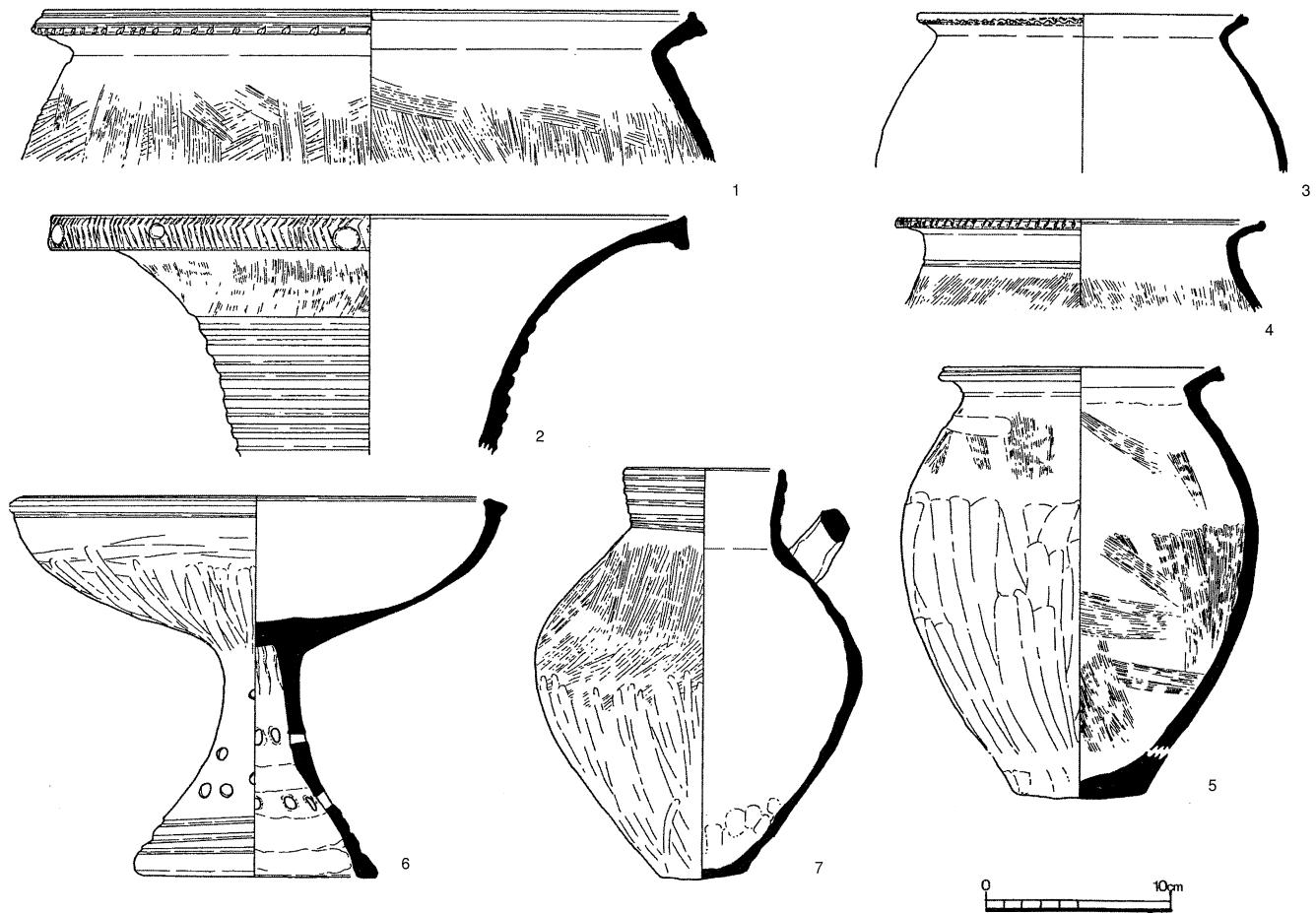


fig. 425 1～6区出土 弥生土器実測図

53. 頭高山遺跡 第8次調査

1. はじめに

平成7年度より実施されている宅地造成のための広範囲な発掘調査では、弥生時代の遺構の他に中世の基壇と礎石建物が検出され寺院跡であることが明らかになった。

今回の調査は、便宜上11区と呼んでいる遺跡の縁辺部の平坦面が対象となり、当該地における遺跡の有無を確認するためにトレンチを4ヶ所設定して精査を実施し、遺構が確認された部分については拡張して、遺構の広がりを確認する方法で調査を実施した。



2. 調査の概要

調査の結果、1・2トレンチで礎石を検出したので拡張したところ、斜面を造成した平坦面と水切溝、水溜、および礎石建物を1棟検出した。

第7次調査で検出された5号基壇の北端からこの尾根の南斜面を丘陵の麓に向かい延びる通路3が存在する。5号基壇から通路3により丘陵の麓に向かい、基壇から約50m下ると通路が南に屈曲する。この地点から細い尾根が南へ派生するが、通路はこの尾根上を通るが間もなく不明瞭となる。今回の調査で検出した平坦面は、この細い尾根と5号基壇が存在する尾根との間の鞍部を等高線に沿って半月状に削平し、造成している。

通路が南に屈曲する部分は、平坦面を削平した東面に沿って走っており、この通路を下ると西側の下方に礎石建物を見ることになるが、参道と想定した谷を行き来する者にはほとんど建物を見ることができない。

平坦面

当尾根の南側斜面の一部を切り出して作られた平坦面である。東西約30m、南北は南側が地滑りを起こしあつたが、現存で約10mである。腐葉土の下に10cm程度の流土が堆積しており、その下に所々2cmから3cmほど焼土が堆積していた。平坦面の西側には礎石建物が建てられているが、東側には建物等の遺構は検出できていない。切り出し部の下端部分には幅20cm～30cm、深さ15cm～30cmの水切溝が巡り、礎石建物の西側に接するよう南側へ流れしていく。また、礎石建物の北側には水溜状の施設があり、ここに溜まった水が建物の方向に溢れ出るのを避けるために溝へと流していたようである。



fig. 427 調査地測量図

礎石建物 南北約4m、東西約10mの建物で、礎石は南北4石、東西5石ある。柱間は1間約2m前後である。東側の2間分は間に礎石がなく、その北側に水溜状の施設および石敷き状の施設があり、柱間の広いこの部分を土間であると考えると庫裡等の施設を連想させる。また、礎石には熱を受け赤変したものとそうでないものがあり、立て替え等があった可能性も含めて検討の必要がある。

水溜め 直径約160cm深さ約40cmの円形の水溜めである。南側に人頭大の石が三段に配置されている。南東側に直径20cm程度の石で敷きつけられた施設が東西2m、南北1mにわたって展開しており、水溜めから水を汲む場所であったと考えられる。水溜めの東西から溝が延びており、溜まった水が建物の方向へ流れ出ないようにされていたようである。

出土遺物 流土より、小皿や鍋などの土師器、甕などの須恵器、平瓦、石製硯、水溜内から青磁等が出土している。時期は15世紀代のものである。



fig. 428 平坦面実測図

3・4 トレンチ 磁石建物がある平坦面の南側下部にもう一段平坦面が存在している。人工的な造成の可能性が考えられたので、幅2.5mのトレンチをT字形に設定して掘削したが、遺構・遺物等は確認できなかった。

3.まとめ

今回の調査では、尾根の斜面を平坦に造成した所で15世紀代の磁石建物を1棟検出することができた。この建物からは寺院を想定させるような遺物も出土せず、建物規模も小さいので、僧侶が日常生活を営んだ場所と推定するのが妥当であろう。

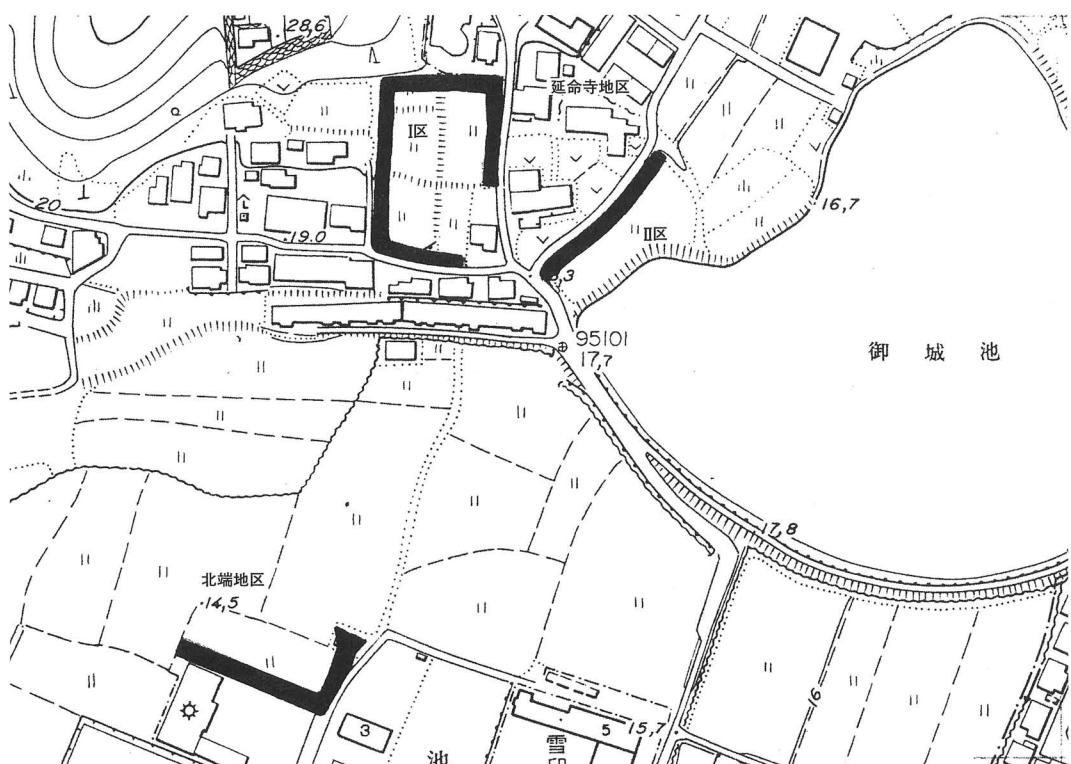


fig. 429 平坦面全景

しらみず 54. 白水遺跡 延命寺地区・北端地区

1. はじめに

延命寺地区第2次調査は区画整理事業の道路拡幅に伴う調査である。Ⅰ区は幅3m・長さ55mほどの調査地となる。Ⅱ区は幅2~6m・総延長160mのC字形の調査区である。北端地区第5次調査は区画整理事業による道路の新設部分（北端5次-1）と、現状道路の拡幅部分（北端5次-2）の調査である。



2. 調査の概要

延命寺地区

I 区

I区は後世の水田開発のため、削平を受けて包含層の残存状況が悪く、検出された遺構もI-2地区の浅い溝状遺構（S X01・02）と落ち込み状遺構（S D13）があるにすぎない。遺物包含層からは、土師器・須恵器・埴輪・瓦・錢などが出土した。ほかに特記すべきものとして二面風字硯と灰釉陶器壺の転用硯が出土した。この灰釉陶器は見込み部を硯として転用した、朱墨痕がある。朱墨痕が確認された希少例と思われる。

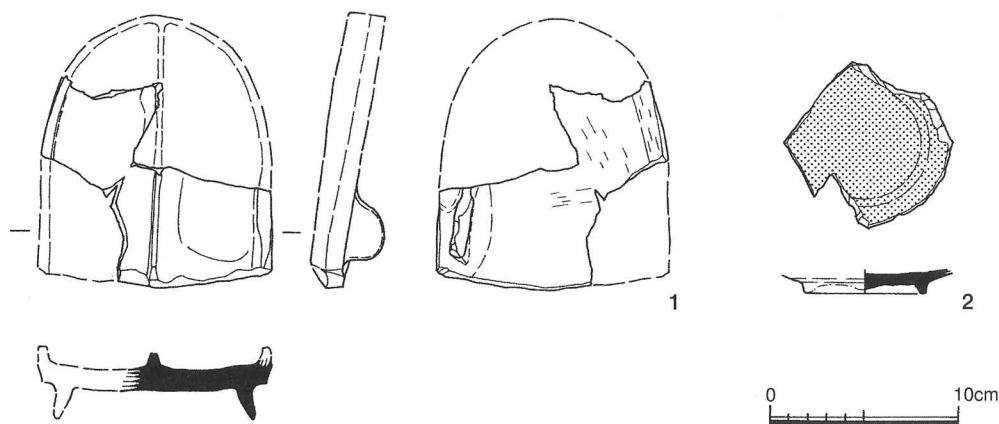


fig. 431 遺物包含層出土遺物 (1:二面風字硯 2:朱墨痕がある灰釉陶器碗転用硯)

II 区

II区の基本層序は、現水田耕土下に2～3枚の旧水田層があり、この下層に洪水によると考えられる砂礫の堆積層が観察され、地山となる。遺構は地山面で検出したが、洪水の堆積層より切り込むものもある。遺構は、溝状遺構が3条検出されたのみである。

旧水田層より近現代の陶器や土師器・須恵器が少量出土した。洪水堆積層からは、少量の中世の土師器・須恵器、微量の弥生土器が出土した。

2-1 地区

土坑1基・溝4条・ピット3ヵ所が検出された。土坑（SK01）は直径約2m・深さ0.5mの井戸状の遺構で、微量の中世の遺物が出土した。SD01は浅い溝状遺構で微量の中世の遺物が出土した。SD06はコ字状になる同様の堆積土をもつ溝状遺構である。

2-2 地区

土坑1基・溝7条・ピット約80ヵ所が検出された。SK02は径約1m・深さ0.1mの浅い土坑である。SD02は、幅約2m・深さ0.2mの溝で、奈良時代末頃の土師器・須恵器と埴輪片が出土した。SD05は、幅約1.2m・深さ0.2mの溝で、砂礫が堆積していた

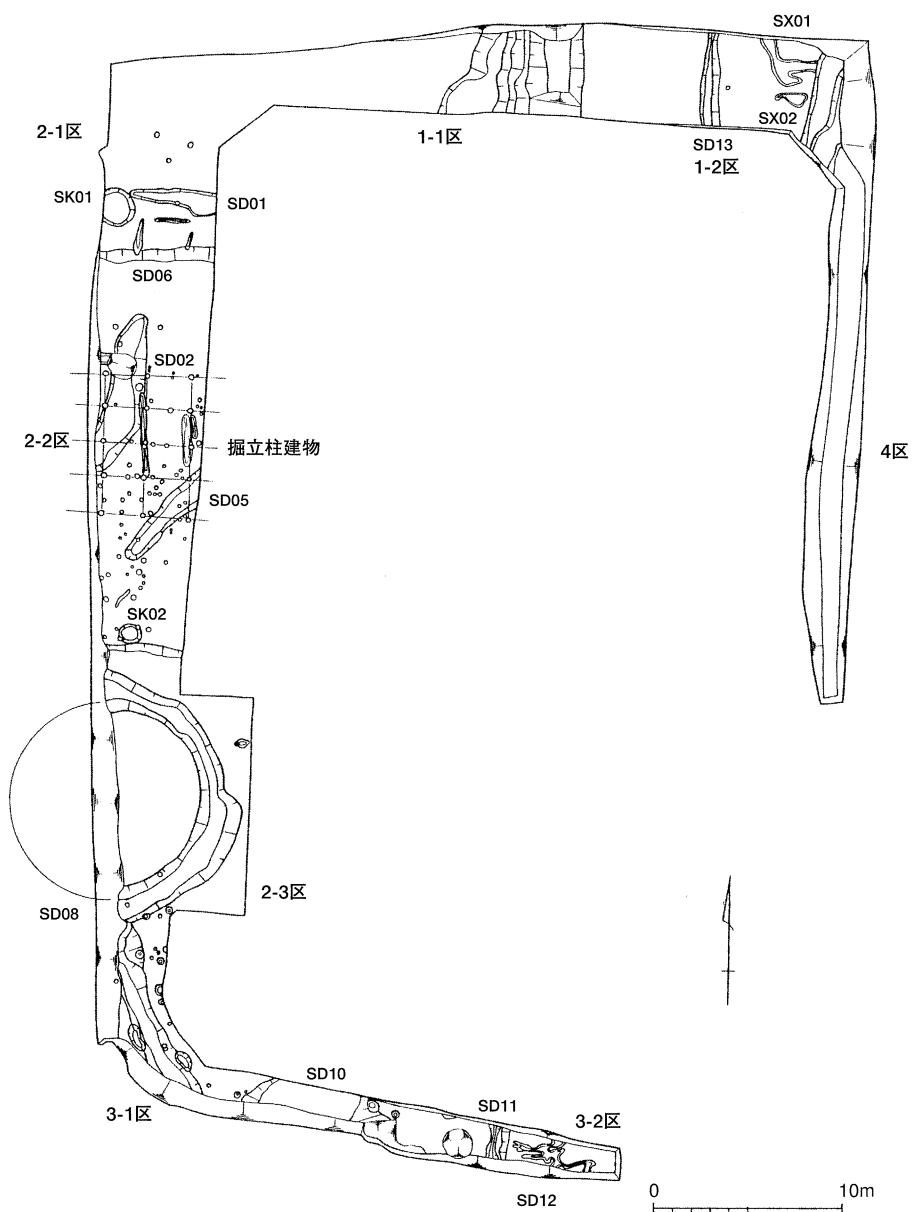


fig. 432 延命寺地区 I 区 遺構平面図

掘立柱建物 I区2-2地区で検出されたピットは、約80ヶ所以上あるが、調査区内で建物として確認できたのは、1棟だけであった。

検出された建物の規模は、南北4間（7.6m）、東西2間以上（4.7m以上）の総柱の掘立柱建物である。柱穴間距離は、南北柱列で1.8~2.1m、東西柱列で2.2m前後を測る。建物の時期は、柱穴からの微量の出土遺物より12世紀頃かと考えられる。

2-3地区 土坑2基・溝2条・ピット20基が検出された。

S K05は、長径1.5m・短径0.5m・深さ0.3mで、S K03は長径1.2m・短径0.5m・深さ0.3mの土坑で、ともにS D09に切られる。いずれも少量の土師器片が出土したのみで遺構の性格は不詳である。

S D09は、幅約1.2m・深さ0.4mの溝状遺構でSD08を切る。10世紀頃の土師器・須恵器が出土した。

S D08は、幅約1.2~2.2m・深さ0.2~0.4mの弧状をなす溝状遺構で、形状より古墳の周溝と考えられる。後世の削平により墳丘は残存していなかった。周溝の両岸には埴輪が立っていた痕跡は全く検出されなかった。周溝の内径より復元される墳丘の直径は約10mである。溝内より奈良時代末期頃と考えられる土師器壺・甕・須恵器高壺と円筒埴輪片・形象埴輪片等が出土した。円筒埴輪片はタテハケ調整を主とするものが大半を占めるが、ヨコハケ調整を主とするものもみられる。周溝の埋没時期は、奈良時代末期以降と考えられる。

3-1地区 溝1条・ピット約4ヶ所が検出された。SD10は幅約7.1m・深さ0.4mの溝である。

3-2地区 溝2条が検出された。SD11は幅約0.4m・深さ0.1mの浅い溝である。SD12は東へ下がる砂礫層の堆積で、溝底の不整形な落ち込みは、洪水によるものと考えられる。

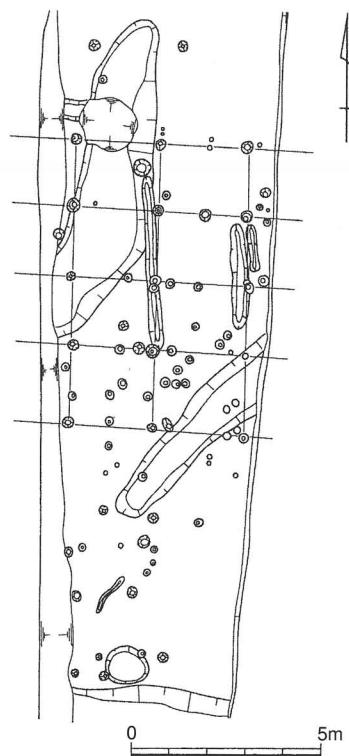


fig. 433 I-2-2地区掘立柱建物平面図



fig. 434 I区2-2地区 掘立柱建物



fig. 435 I区2-3地区 古墳周溝 SD08

- 北端地区** 北端 5 次- 1 の調査については 4 面の遺構面が存在し、古墳時代後期～中世の遺構、弥生時代中期～中世の遺物が確認された。北端 5 次- 2 の調査については 2 面の遺構面（第 1 ・ 2 遺構面）が存在し、北端 5 次- 1 の第 1 遺構面、第 4 遺構面にそれぞれ対応する。
- 基本層序** 現代耕土の下に中世の遺物を包含する旧耕土層が 2 ~ 3 層存在し、それ以下は順に淡黄灰色極細砂（第 1 遺構面ベース層）、灰茶色粘質土（第 2 遺構面水田層）、淡灰黄色極細砂（第 3 遺構面ベース層）となり、淡灰黄色極細砂の下層上面が第 4 遺構面となる。北端 5 次- 2 では第 2 遺構面の水田層がなく、第 3 遺構面も明確には確認できなかった。
- 第 1 遺構面** 平安時代前期～中世の遺構、奈良時代後期～中世の遺物が確認された。
- S B02 東西 4 間 × 南北 2 間以上の掘立柱建物で、柱穴規模は径約 20 ~ 30cm 、柱穴間隔は東西約 2.2 ~ 2.9m 、南北約 1.8 ~ 2 m を測る。柱穴より 11 世紀後半頃の遺物が出土している。
- S B03 東西 3 間 × 南北 2 間以上の掘立柱建物で、柱穴規模は径約 20 ~ 30cm 、深さ約 20 ~ 30cm 、柱穴間隔は東西約 2.2 ~ 2.4m 、南北約 1.7 ~ 2 m を測る。柱穴より 12 世紀後半頃の遺物が出土しており、特に S B03-4 より白磁を含む多くの土器類が出土している。
- S K02 長径約 55cm 、短径約 45cm 、深さ約 20cm の楕円形状の土坑で、12 世紀後半頃のものと考えられる土師器羽釜、須恵器鉢・碗などが投棄されたようななかたちで出土している。
- S D03 平成 5 年度調査地の東端で確認された溝の東側肩部が今回の調査区域の西端で検出された。10 世紀末～11 世紀初頭頃のものと考えられる土師器の脚付皿が出土している。
- その他の S D05・06 は奈良時代後期～平安時代前期の遺物が確認された溝状遺構である。 S D04 、 S D101 、 S X101 も溝状の遺構で、 S D04 は 11 世紀中頃、 S D101 、 S X101 は 14 世紀代の遺物がそれぞれ出土している。

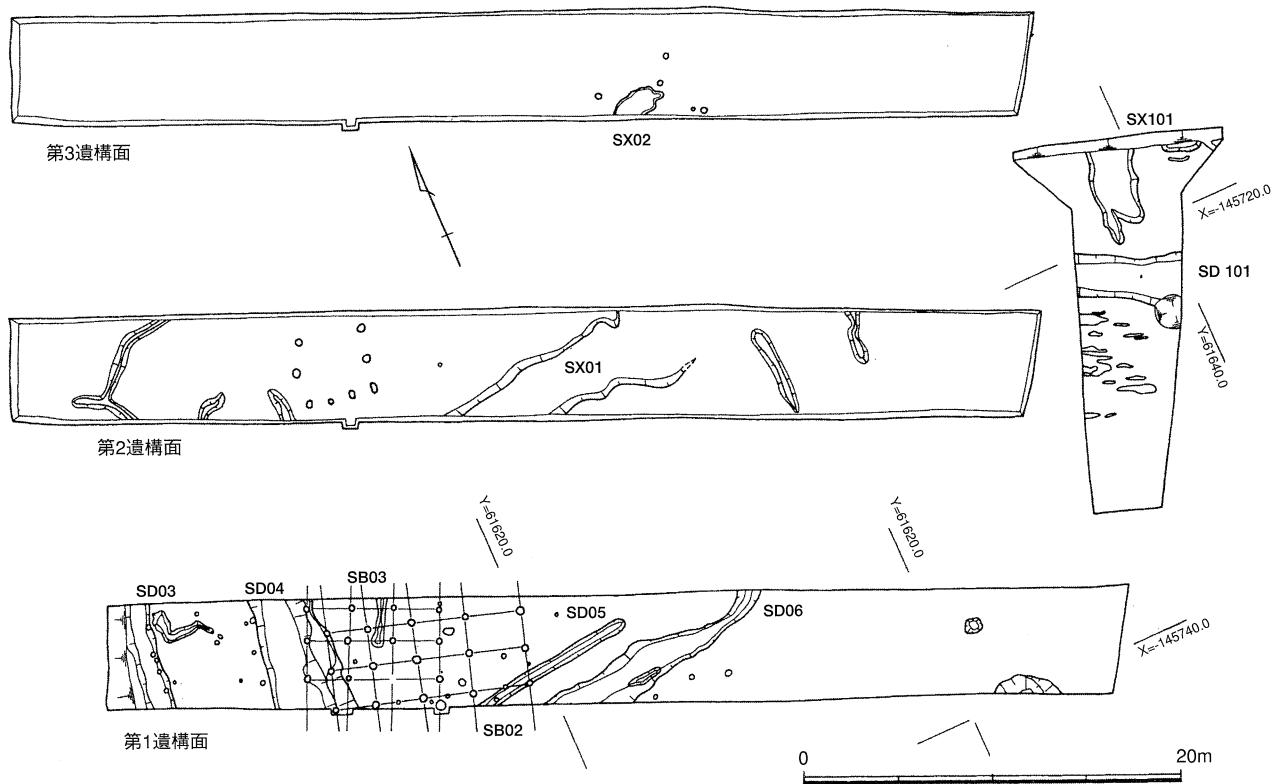


fig. 436 北端地区 第 1 ・ 2 ・ 3 遺構面 平面図

- 第2遺構面** 平成5年度調査で確認された水田面であると考えられるが、水田畦畔の遺存が悪く、一部でしか確認されなかった。また、奈良時代後期～平安時代前期の遺物が散在し、浅い落ち込み状遺構（S X01）とピットが存在する。水田の時期については、これまで古墳時代と考えられていたが、奈良時代後期～平安時代前期の可能性が高くなった。
- 第3遺構面** 小規模な落ち込み状遺構（S X02）等が検出された程度である。
- 第4遺構面** 古墳時代後期～奈良時代後期の遺構、弥生時代後期～奈良時代の遺物が確認された。
- S D09** 東～西方向にはしる溝状遺構で、上層及び下層は奈良時代後期の水路状遺構にあたる部分で、下層においては護岸施設と考えられる板材と杭が直線的に並んで出土している。上層及び下層の出土遺物は、壺・甕などの他に、上層から移動式竈片も確認されている。また、このS D09の東側に拡がりをもつ部分（S D09-2）は、上層及び下層にあたる水路状部分が設置される以前の溝で、最下層が上層及び下層による削平を免れたこの溝（S D09-2）の堆積層である。S D09最下層及びS D09-2からの出土遺物は、弥生時代後期～古墳時代後期のもので、土師器甕・小型丸底壺、須恵器壺などが確認されている。S D09の検出面での規模は幅約6m、深さ約1.8mを測る。そして、このS D09及びS D09-2からは、もともと自然流路的な溝（S D09-2）から、それが土砂の流入などによってその機能を失っていく過程で、護岸施設をもつ機能的な水路状の溝（S D09上・下層）へと作り変えられていく様子がうかがえる。
- S D10** S D09の他には、溝3条、土坑1基が検出された。溝S D10とS D202の時期は古墳時代後期で、S D202は方向性からS D09-2と同一の溝である可能性が高い。S D201の上層からは奈良時代後期、下層からは古墳時代後期の遺物がそれぞれ出土している。土坑SK201は、長径1.6m、短径1m、深さ40cm、古墳時代後期の遺物が出土している。

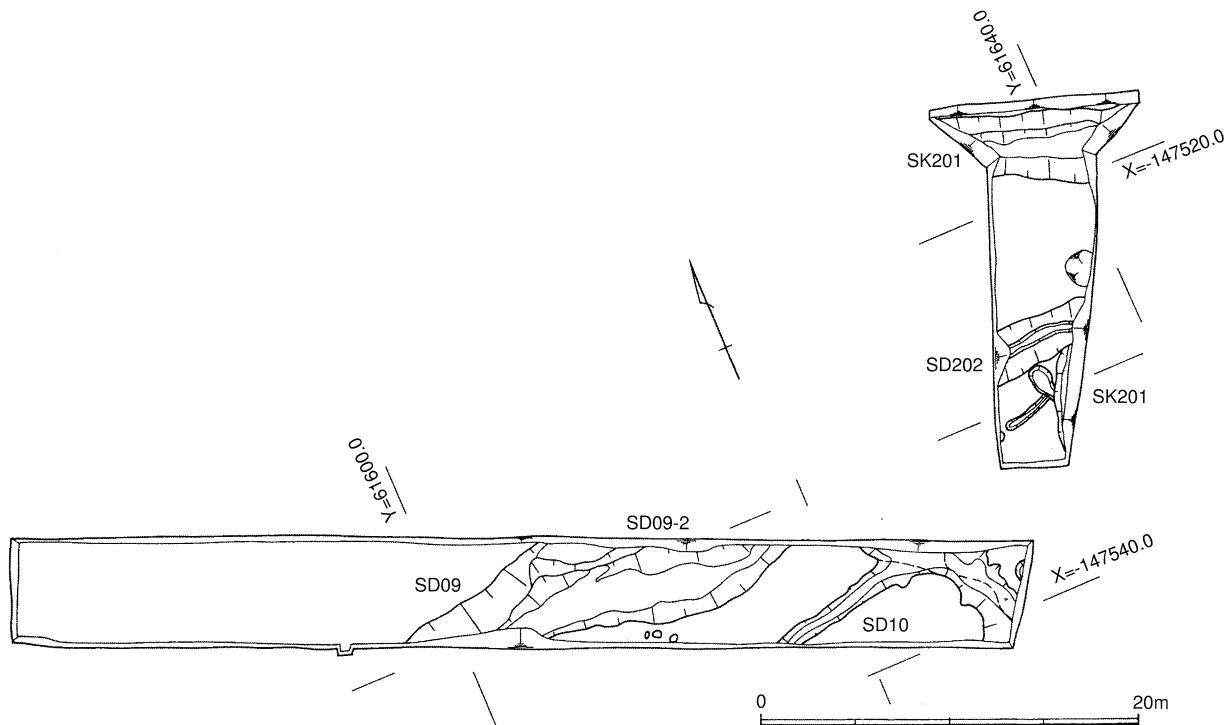


fig. 437 北端地区 第4遺構面 平面図

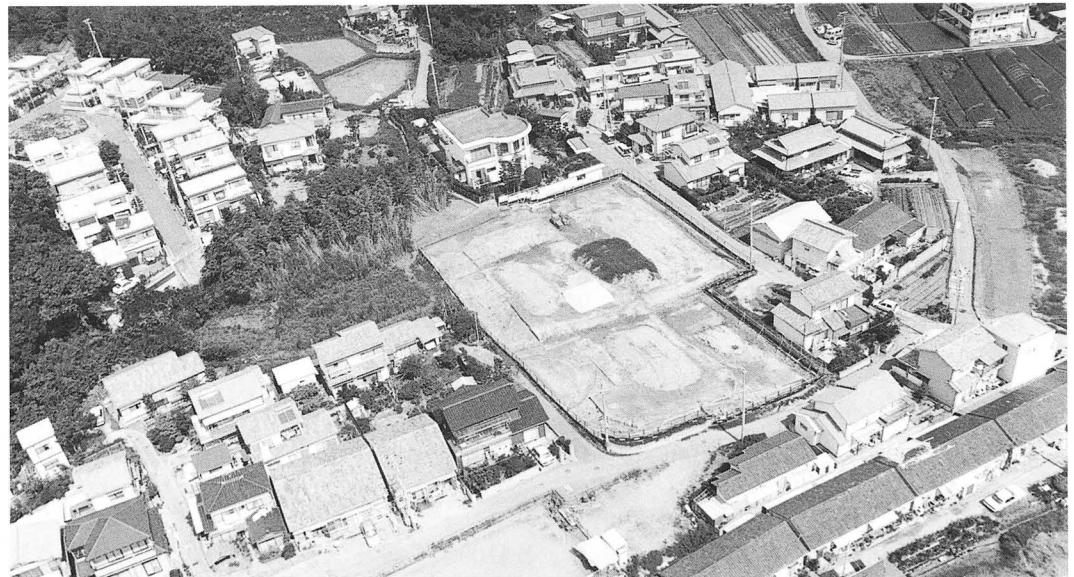


fig. 438
延命寺地区調査地
遠景（南上空）

3.まとめ

延命寺地区 調査地は西北に高く南東に低い地形で、標高は20m前後である。古墳や建物は尾根状地に築造され、遺構は古墳や建物の検出された周辺に広がるものと考えられる。

当調査区の北約120mの延命寺古墳・北西約250mの高津橋大塚古墳・北東約350mの瓢塚古墳やさらに東北約700mに天王山古墳群が存在する。いずれの古墳も標高は30m以上に立地するが、当調査地の古墳は標高20mに立地する。時期の下る古墳がより標高の低い場所に築造されることを示唆するのであろうか。前述した古墳との関係を踏まえ今後十分な検討が加えられることが期待される。

北端地区

今回の調査では4面の遺構面が確認されたが、比較的短い時間経過の中で存在した4面であることが判明した。これは洪水多発地域である伊川右岸の同地域における土地環境を反映しているものであり、調査においても流路→埋没→水路→洪水による埋没→水田利用→洪水による埋没→集落形成といったように、洪水によって発生する土地利用形態の変遷が如実に表れていると言えよう。また、近隣調査において古墳時代後期や奈良～平安時代の集落の一部が確認されており、今回の調査成果は、今後、集落の拡がりや様相を検討する上で重要である。



fig. 439 北端地区 第4遺構面 SD09



fig. 440 北端地区 SD09 護岸施設

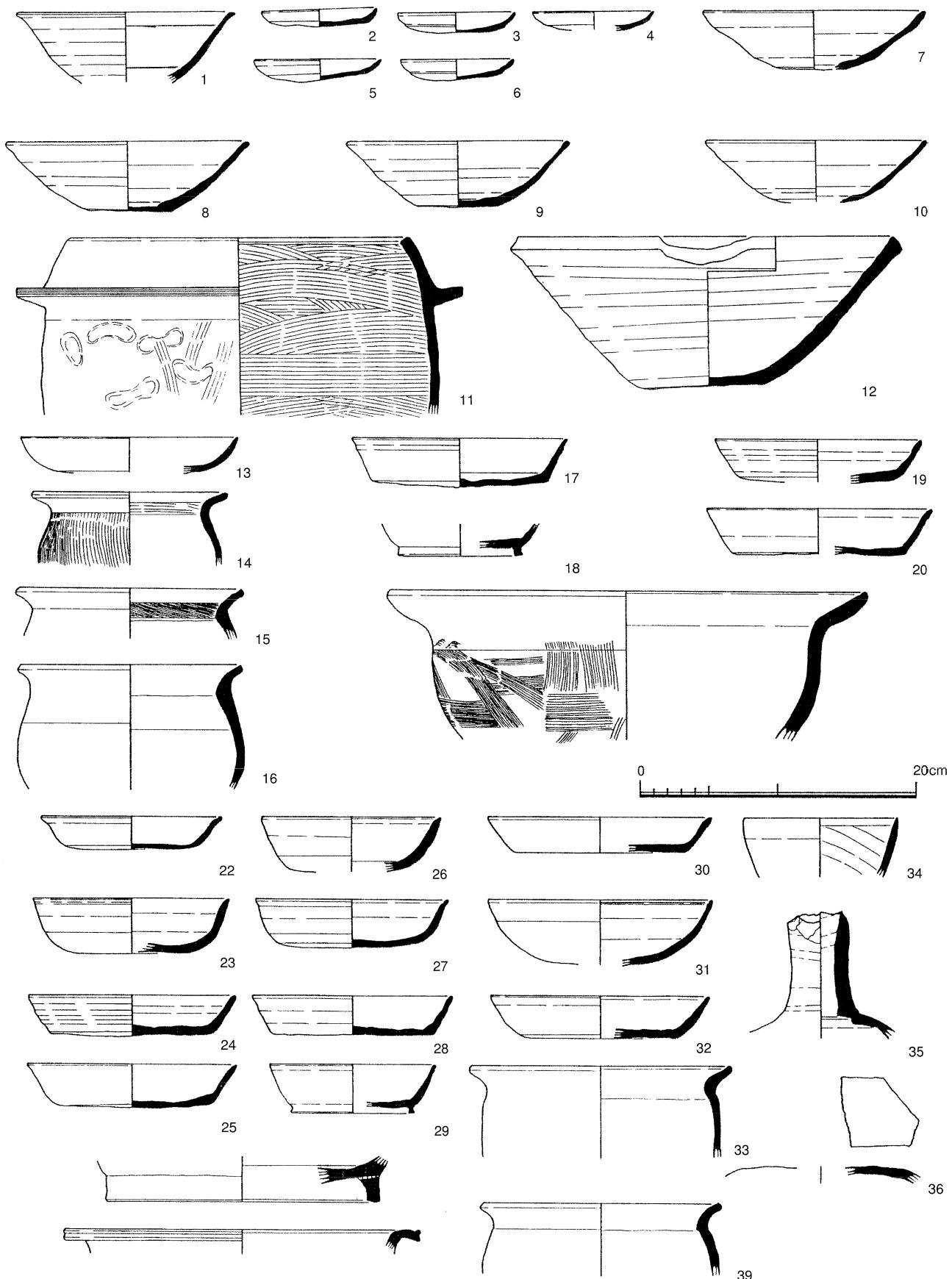


fig. 441 北端地区 5 次調査 出土遺物実測図

(1~6: SB03 7: SB02 8~12: SK02 13~21: SD06 22~39: SX01・SD09)

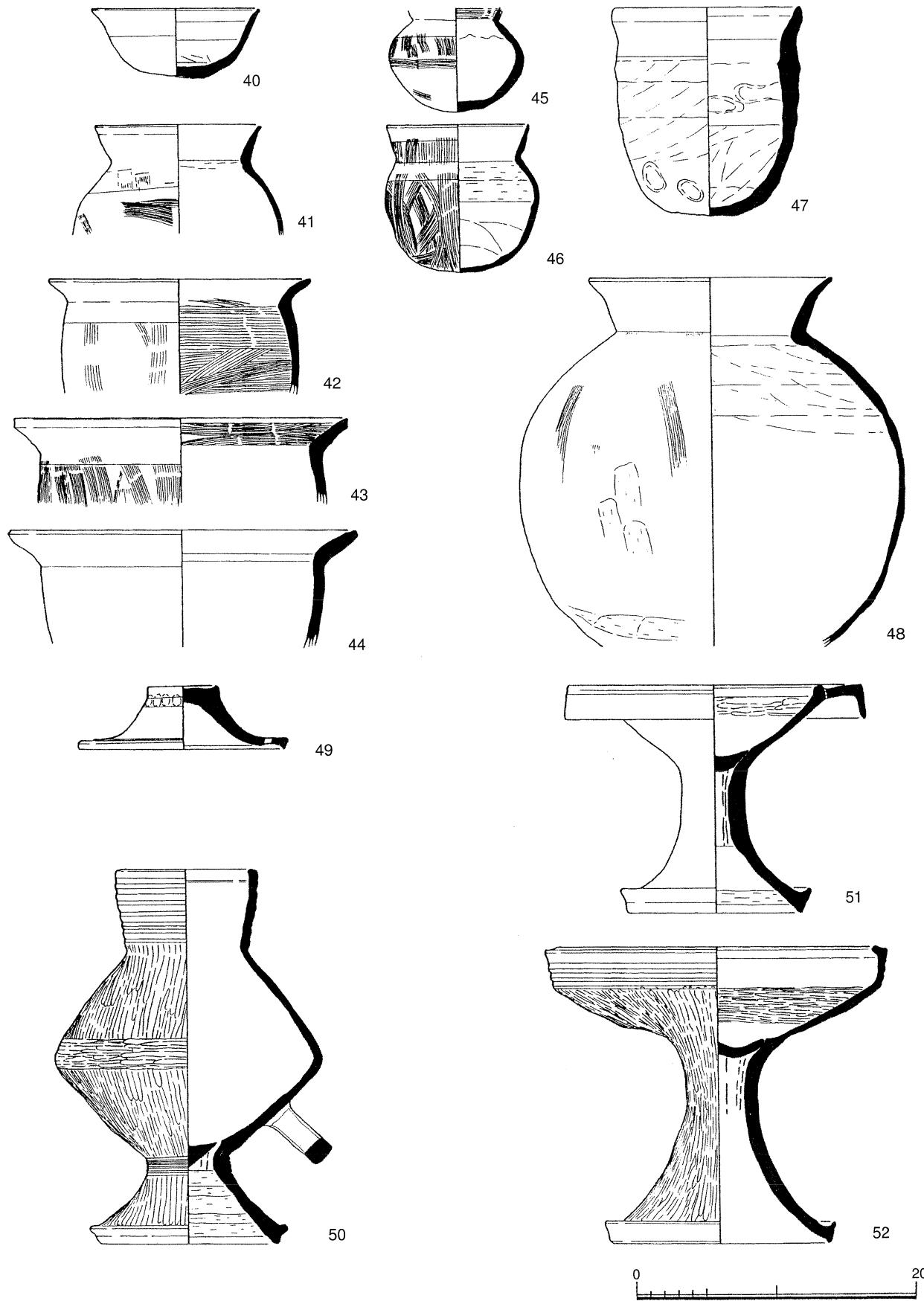


fig. 442 北端地区 5 次調査 SD09・SX01 出土遺物実測図 (41: SD09 最下層 47: SX01 下層及び SD09)

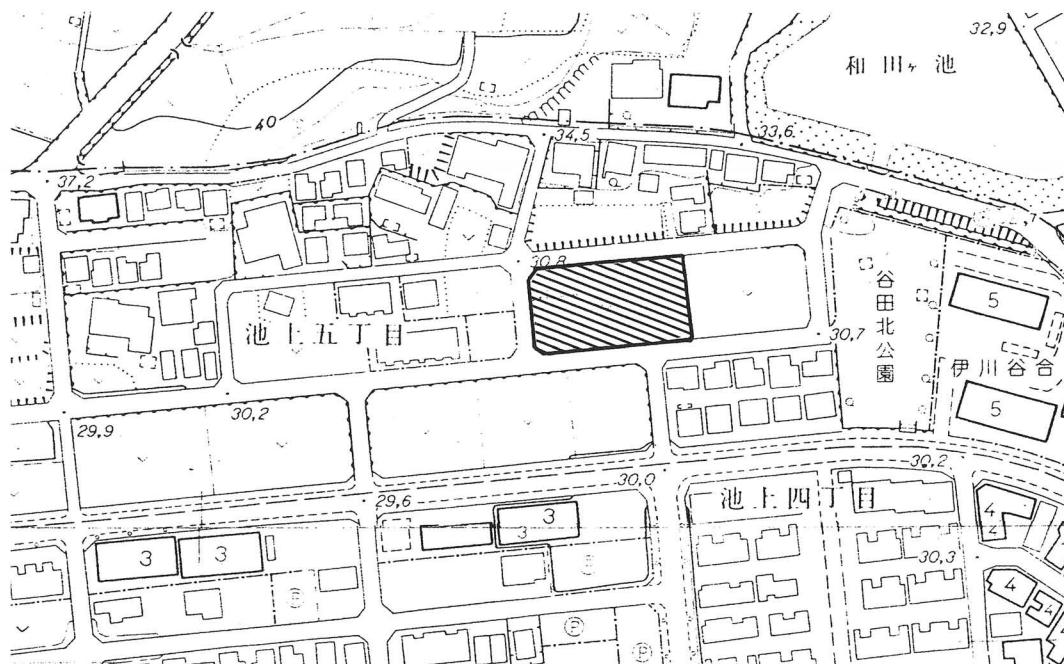
いけがみきた 55. 池上北遺跡

1. はじめに

池上北遺跡は、明石川の支流伊川の中流域北岸の低位段丘上に立地する弥生時代を中心とする遺跡である。遺跡の範囲は東西700m、南北300mに及ぶ。背後には伊川と永井谷川に挟まれた丘陵が北東から南西に延びている。伊川の形成する低位段丘面の幅は本遺跡周辺で600~700m程度で、対岸の丘陵上には弥生時代中期から古墳時代中期の集落である池上口ノ池遺跡がある。

本遺跡の調査は、昭和54年度より土地区画整理事業に伴って神戸市教育委員会により実施され、弥生時代中期・後期の竪穴住居跡・溝跡・土坑・壺棺墓・木棺墓、古墳時代の溝跡、鎌倉時代のピット・溝跡・土坑などが検出されている。

今回の調査地点は遺跡地図に示された範囲の北東隅にあたり、低位段丘面が丘陵末端に接する場所にあたる。



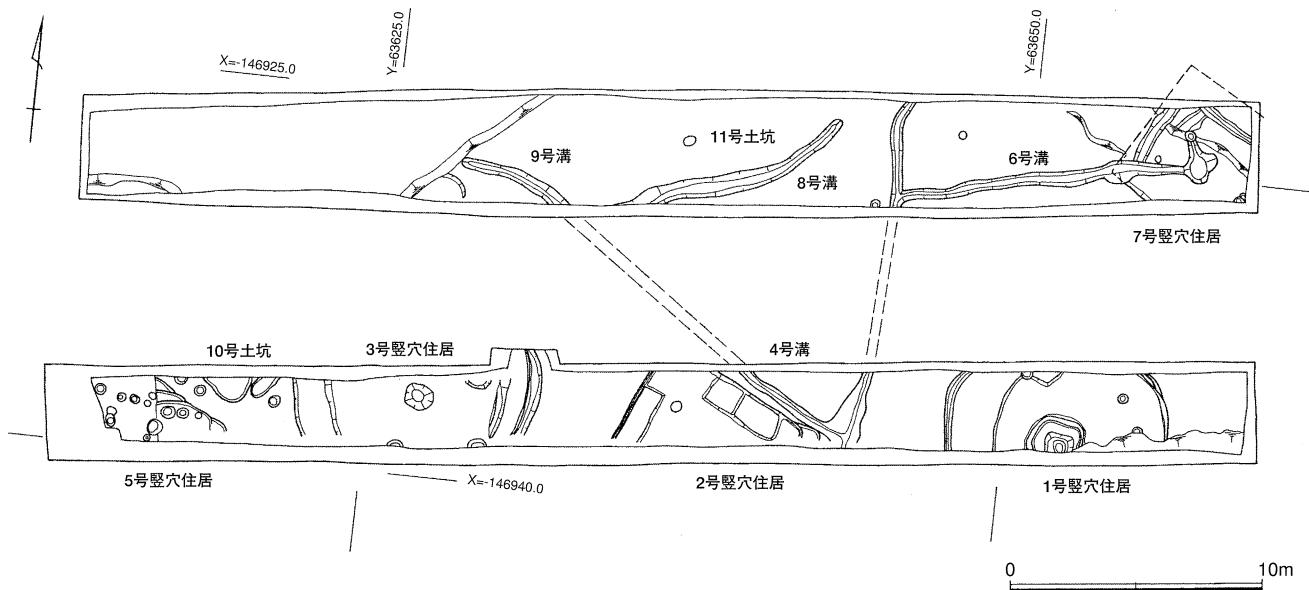


fig. 444 遺構平面図

検出遺構 検出された遺構は、竪穴住居 5 棟、溝 4 条、土坑 4 基、柱穴数基がある。大半が弥生時代に属するものである。なお、遺構番号は性格にかかわらず通し番号をつけている。

1号竪穴住居 1区の東端部で確認された。中央部の約半分を調査したのみであるが、平面形は円形もしくは隅丸方形になると見られる。建て替えによるわずかな縮小が行われ、新しい住居の床がより深く掘り込まれている。(新 = 1号 a、古 = 1号 b)。古い住居のプランはごくわずか残っているだけである。直径は a が 8.5 m 強、b が 9 m 弱である。

1号 a 住居 埋土は 4 層に細分できたが全て自然流入土である。壁は、残りの良い所で 18cm 程度で、比較的急角度に立ち上がっている。ベット状遺構は西壁に沿って確認された。幅は 1.7~1.8 m とかなり広い。床面からの高さは 5~8 cm ある。北側には、中央部に向かってベット状遺構からさらに張り出す部分が認められるが、性格は不明である。

床面は地山上に粘土を薄く貼っている。西側の貼床は痕跡的であった。中央穴の北西部には厚さ 5~8 cm の木炭層が貼り付くように広がる。これは住居の機能中あるいは廃絶直前に残されたものと考えられる。

柱穴は東側に 2 基・北側に 1 基確認された。北側の P 3 はベッド状遺構にくい込む位置にある。3 個とも掘形の直径は約 50cm である。P 1・2 には柱痕跡が確認され、それぞれは径 15cm、25cm の円形である。

中央土坑は住居中央部とみられる部分で検出された。一辺 2.2m の隅丸方形の範囲を上面幅 20cm の土手状の高まりで囲み、その内部にタライ状の穴を穿っている。土手状の高まりは、粘土で盛り上げたものではなく、地山を高く残す方法で作り出している。中央の土手状の高まりとの間には、20~40cm の平坦な部分があり、この上面にも木炭層が貼り付いていた。ただしその面は焼けてはいない。中央の穴は平面で十分に確認できなかったが、断面観察から 1 回ないし 2 回の作り替えがあると判断された。古い段階のものは 1 号 b 住居に伴う可能性もある。穴の壁の一部には濃密な木炭・灰層が貼り付いていた。壁と底面は焼けていない。

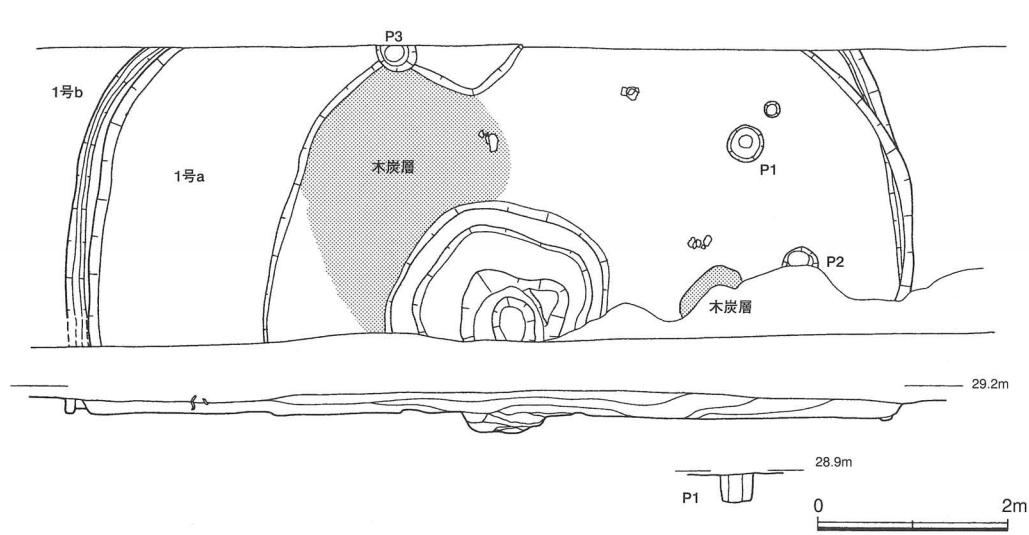


fig. 445 1号竪穴住居 平面図・断面図

1号b 住居 埋土は壁際にわずかに残されていたが、自然流入か人為的埋め戻しによるかは判断できなかった。壁は10cm程度確認した。検出面から壁材痕が確認され、これが床面下5~6cmまでくい込んでいた。壁材の大きさ等は確認できなかった。地山を床面としている。

出土遺物 床面上から弥生時代後期前葉の土器が出土している。石器は、埋土中で凝灰岩製石包丁の未製品・サヌカイト製剥片石器、貼床内で砥石が出土した。



fig. 446 2区 全景



fig. 447 1号竪穴住居

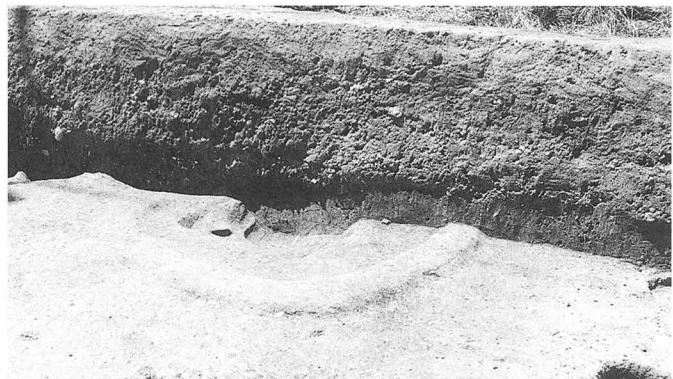


fig. 448 1号竪穴住居 中央土坑

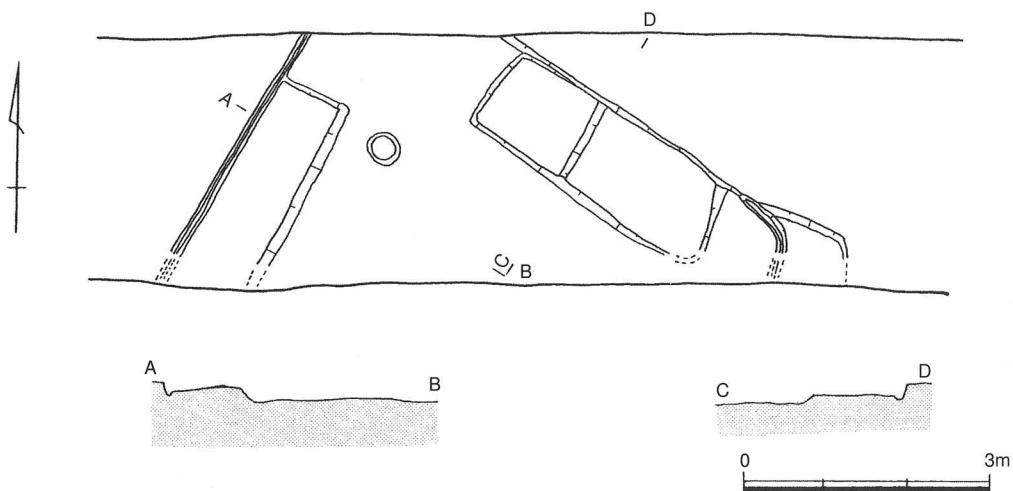


fig. 449 2号竖穴住居 平面図・断面図

2号竖穴住居 平面形は方形で、東西が6m強になる。南東部で浅い掘り込みを持つ遺構を切る。

壁は、最も残りの良い北壁で29cmある。ほぼ直角に立ち上がっている。西辺では検出面から壁材痕が確認され、これは床面下5cm程度までくい込んでいた。北辺では床面上に至って深さ5cm程度の周溝が確認されたが、ベッド状遺構のある部分で途切れている。この周溝は壁材の抜取り痕と考えられる。

ベッド状遺構は北、西辺で確認されたが、いずれも住居の隅には作られていない。北辺のものはやや東に寄った位置にある。形状は長方形ないしは壁側が若干狭まる台形である。大きさは北側が長さ3.1m、幅1m、西側が2.4m以上、幅0.8mである。床面からの高さは西側で7~10cm、北側で5~15cmである。北側の中央部には段差が見られる。床面はほぼ水平で地山上にかすかに貼床をしている。柱穴は北西部に1基確認した。

出土遺物 床面上に、ほぼ完形の弥生時代後期前葉の甕が、口縁を下にしてやや斜めになって残されていた。埋土からは後期前葉の土器に混じって中期の土器も出土している。石器には凝灰岩製の石庖丁未製品・サヌカイト剥片がある。

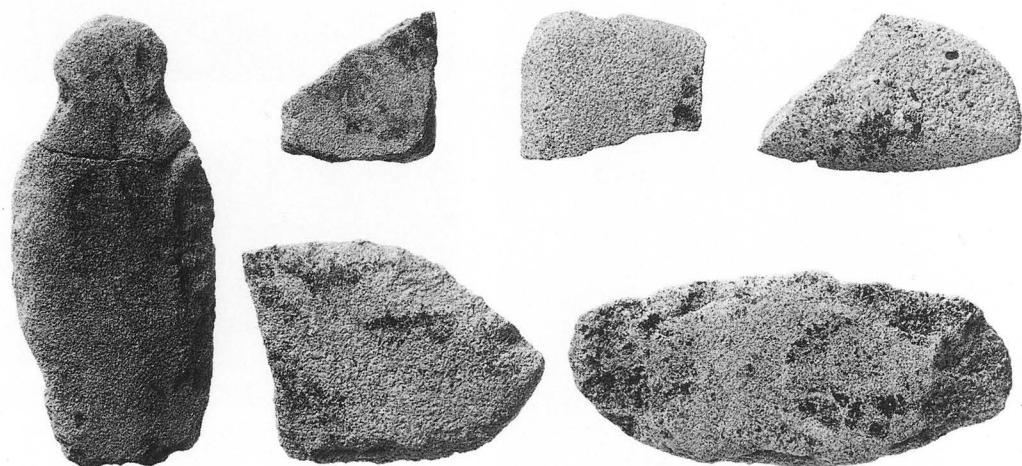


fig. 450 竖穴住居 出土石器

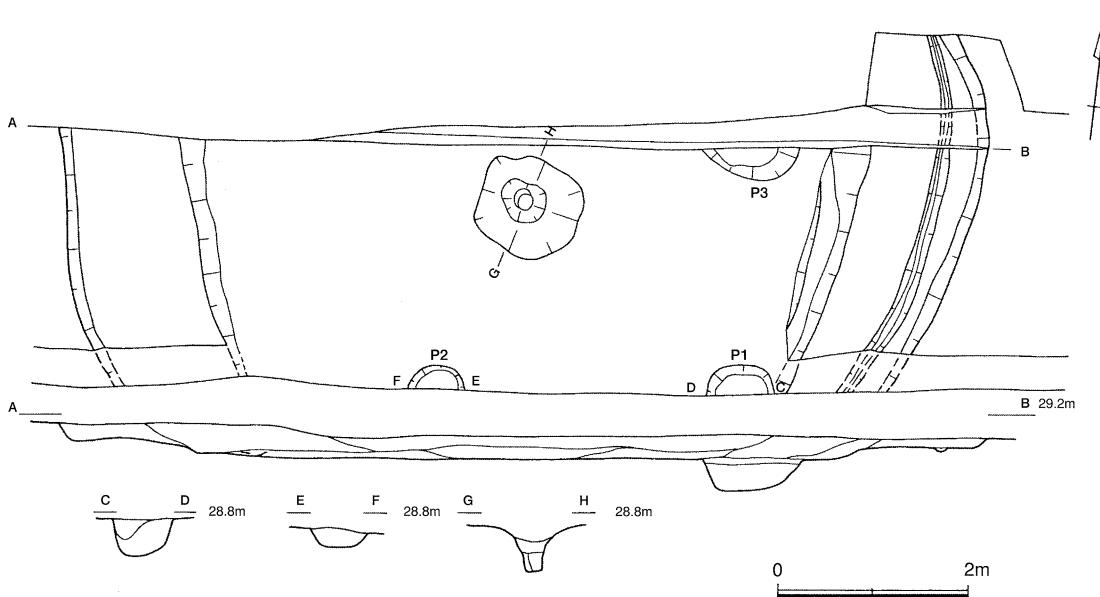


fig. 451 3号竖穴住居 平面図・断面図

3号竖穴住居 1区西側で確認された。中央部を調査したのみであるが、直径10mの円形住居である。埋土は10層に細分されたがほとんどが自然流入土と考えられる。2層は有機質に富み、多量の土器破片を含むため、廃絶層の可能性がある。確認面からの壁の高さは、東側で8cm程度、西側で5cm程度である。立ち上がりはなだらかである。東側でのみ周溝が確認されたが、場所によっては壁から離れている。

東西の壁に沿って、円弧状に幅1~1.2mのベッド状遺構を設けている。床面からの高さは10~15cmある。床面は東側では最大で5cm程貼っているが、西では礫層（基本層6層）をそのまま床としている。

柱穴は南側に2基確認された。双方とも調査区の壁にかかり、全体は捉えられなかったが、P1は直径70cm、P2は直径60cmの円形を呈するものと見られる。P1の断面では、掘形埋土と柱抜取り穴が確認された。P2は全体が抜取り穴である可能性がある。

中央穴は、直径1mの不整円形の範囲がなだらかに掘りくぼめられ、さらにその中心部が急激に深く掘り込まれていた。中央穴の直上は、多量の土器の含まれる住居埋土2層に覆われていた。埋土2層の土器取り上げのために中心部の観察が遅れてしまったが、10cm程掘り下げた段階で掘形埋土と柱痕跡を確認した。柱穴P1・2の柱が抜き取られていると判断されることと、埋土2層堆積以前に住居全体がかなり埋まる程の時間が経過していることから、この中央穴の柱も抜き取られ、埋土2層の下位には抜取り穴の埋土などが堆積していたものと予測される。

住居北東側の貼床の下から土坑P3が検出された。大きさは確認された範囲で1mをはかる。埋土は1層で特に上部にまとまって土器が廃棄されていた。凝灰岩製の石包丁未製品も含まれている。

出土遺物 床面上からの土器の出土は少ないが、弥生時代後期前葉の甕などがある。埋土中（特に埋土2層）からは後期前葉の土器がまとまって出土した。中期の土器も混入している。石器には砥石、サヌカイト製の剥片石器がある。

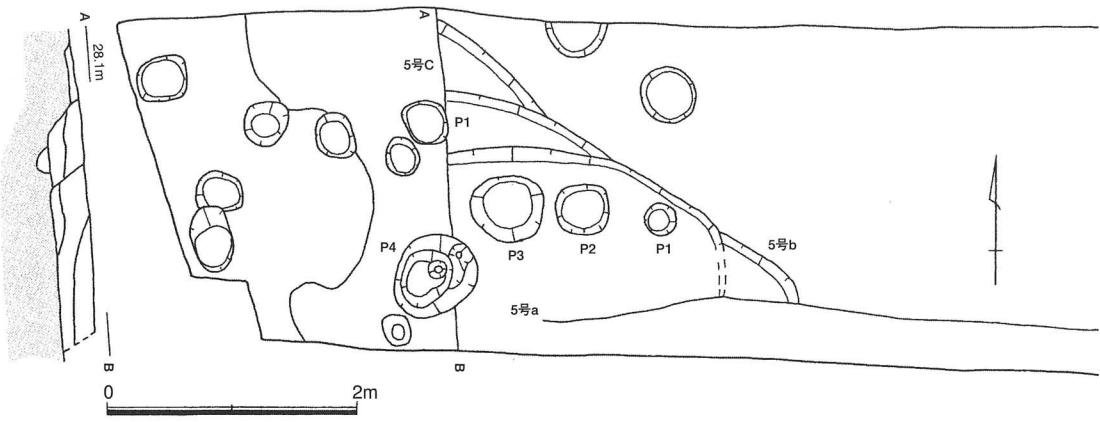


fig. 452 5号竪穴住居 平面図・断面図

5号竪穴住居 1区の西端で確認された。調査当初の重機掘削の際に深掘りをした場所に当たってしまい、十分な調査が行えなかった。少なくとも3棟が重複していると判断されたが、いずれも狭い範囲の検出のためプラン、規模は確定できない。新しい方からa・b・c住居と呼ぶ。また、調査区北壁にはさらに別な住居がかかっていると見られる。

5号a住居 北東部のみ検出した。プランは円形もしくは隅丸方形と考えられる。埋土は3層確認したがいずれも自然流入土である。周壁は北側の残りが最も良く、高さは30cmある。立ち上がりは比較的急である。床面は地山をそのまま床としている。

柱穴は床面でP1～P4を検出したが、柱痕跡が認められるP4が柱穴になると見られる。長径70cm、短径60cmで断面形はやや不整形である。柱痕跡は直径18cmの円形で、西側にやや傾いている。

出土遺物 埋土中から弥生時代後期の土器が出土した。粘板岩製の石包丁・石錐ほかのサヌカイト製剥片石器もある。

5号b住居 5号a住居に中央部を切られているため、北側と東側の一部を検出したのみである。埋土は2層の自然流入土を確認した。壁は北側の残りが最も良く、高さは30cmある。

床面は地山面をそのまま床としている。5号a住居よりもやすかに床面のレベルが高い。

柱穴は、床面上で検出できたものはP1だけである。直径45cmの円形で、径13cmの円形の柱痕跡を持つ。埋土より弥生時代の土器が少量出土している。

5号c住居 5号a・b住居跡に切られごくわずかを検出したのみであるが、調査区の北壁にその続きが見られたため住居跡と判断した。埋土は、自然流入土を1層確認した。わずかに8cmの壁を確認したのみである。

床面は地山をそのまま床としている。柱穴は確認できなかった。また、出土遺物はなかった。

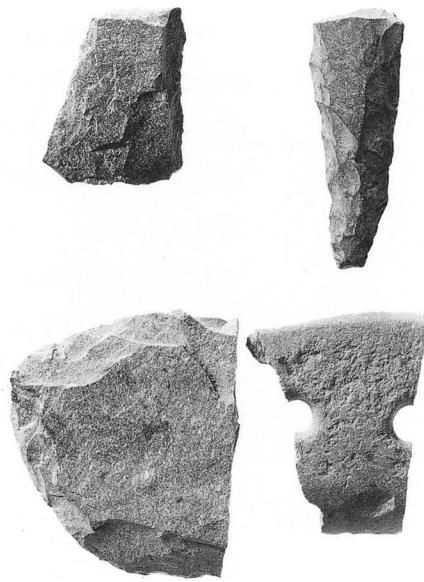


fig. 453 5号竪穴住居出土石器

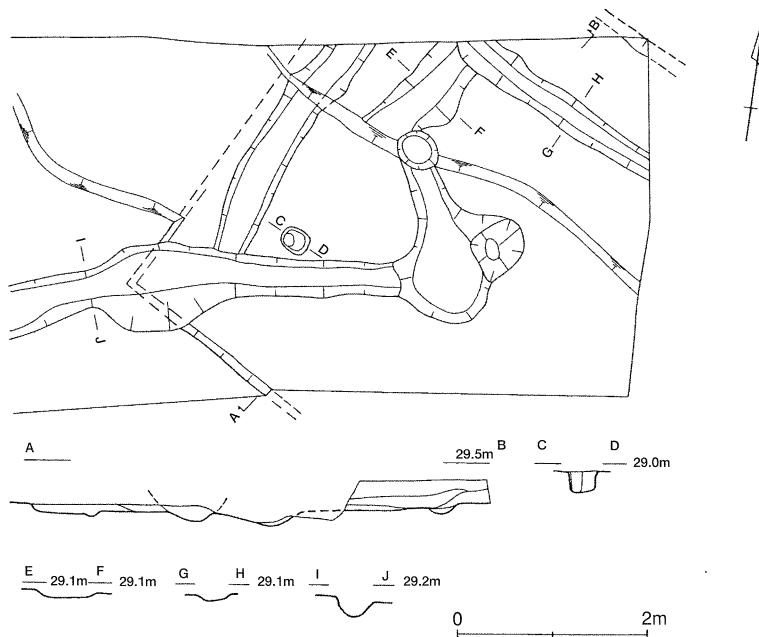


fig. 454 7号竖穴住居 平面図・断面図

7号竖穴住居 2区の東隅で検出した。土地区画整理以前に流れていた用水によって中央部を壊され、しかも用水に接する部分の土壤は変質していた。北東・東から延び、三叉状に交差してさらに西方につながる6号溝に切られている。プランは方形で、調査区北東隅で北辺下端を確認できたことから、南北は約5.5mあることがわかる。住居の方向は2号住居とほぼ平行する。

埋土は5層に細分できたが、すべて自然流入土である。壁が確認できたのは南辺と西辺のごくわずかな部分である。高さは最大で13cmであった。立ち上がりは比較的急である。ベッド状遺構は西辺と北辺に沿って確認された。西辺では用水、6号溝に切られた部分が多いながらも、南西隅付近に高まりはないと判断された。したがって西辺のベッド状遺構は南側で途切れていると考えられる。北辺は調査範囲内では途切れる所はない。西・北辺ともベッド状遺構の内辺に沿って浅い溝が掘られている。

床面は地山上に粘土が薄く貼られていた。柱穴は南西部に1基確認した。掘形は長径30cm、短径25cmで、柱痕跡は直径15cmの円形である。なお、この柱穴は床面上では柱痕跡のみが確認され、床を掘り下げた後に掘形が検出された。柱を建てた後に掘形の上にも粘土を貼っていたことがわかる。

中央穴は上部が用水によって切られていた。長径1.4m、短径1mの不整円形の深い穴である。断面形は擂鉢状である。北西部にある小穴と連結している。床面と埋土より弥生時代後期の土器、サヌカイト製の石器が出土している。

6号溝跡 2区の東側で検出された。7号住居跡を切る。南北方向のもの、南西方向のものが2カ所で三叉状に交差している。南北・南西方向の溝は調査区外に延びるが、東西方向の伸びは、用水による攪乱のため不明である。溝の形状、堆積状況は4号溝と同様である。西側の交差部分には、埋土上部に完形に近い甕、製塩土器が自然石とともに一括廃棄されていた。

4号溝跡 1区中央部で確認された。ほぼ南北に走る溝と南東方向に走る溝が、2号住居の北東で三叉状に交差している。溝の形状は、肩が崩れている部分もあるものの、幅が狭く（約40cm）壁が急で深い（30~40cm）ものとなっている。埋土は自然流入土であるが、水が流れた痕跡は認められない。南北、南東方向それぞれに、埋土の上部で弥生時代後期の土器と自然石がまとめて廃棄された箇所があった。溝の位置と形状から、南北方向のものは2区の6号溝に、南東方向のものは9号溝につながると考えられる。4・6・9号溝出土の土器は弥生時代後葉に属し、住居跡出土土器より新しい様相を示している。

8号溝跡 2区の中央部で検出された、南西方向に走る溝である。水が流れた痕跡はない。

9号溝跡 2区の西側で検出された南東方向の溝で、北西側で途切れている。溝の形状、堆積状況は4号溝と同様である。弥生時代後期の土器が少量出土した。

10号土坑 長径2m程度、短径60cm以上で橢円形を呈すると見られる。深さは約15cmある。埋土は自然流入土で、弥生土器が少量出土した。

11号土坑 底部近くを精査したに留まった。確認した大きさは長径50cm、短径35cm、深さ10cmである。底面から5cm程上に弥生時代後期の甕が横倒しの状態で出土した。

3.まとめ 今回の調査区は低位段丘面が丘陵に接する地点にあり、遺跡範囲の北東隅にあたる。約320m²の調査区で、竪穴住居跡5棟以上、溝跡4条、土坑4基などの遺構が検出された。全体的に分布密度は高くななく重複も少ないが、調査区の南西部には重複がかなり認められ、密度も高くなっている。

時期の決定できる遺構は全て弥生時代後期に属するが、溝跡は竪穴住居跡よりも新しいと考えられる。

竪穴住居跡には円形のもの3棟以上、方形のもの2棟があるが、ベッド状遺構を持つ例が多い。円形住居跡には直径8.5~10mと大型のものがある。2棟で中央穴を確認したが、1棟は周囲に土手状の高まりを持つ炉と考えられるもので、他の1棟は柱穴と考えられた。方形住居2棟は方向を揃えている。溝跡3条は三叉状に交差しながら調査区内外に延びると見られる。水が流れた痕跡は認められず、幅が狭く深い形状から堀であった可能性も考えられる。

遺物は弥生時代の土器、石器を主体にコンテナ16箱分が出土した。古代以降の遺物もわずかに含まれていた。弥生土器には中期中葉～後期後葉にかけてのものがある。住居跡の床面もしくは床面近くからは後期前葉の土器が、溝跡からは後期後葉の土器が出土した。中期の土器は住居跡の埋土からの出土である。石器には、石包丁、砥石、サヌカイト製の石器がある。石包丁には、粘板岩製の完成品（破損）1点と凝灰岩製の完成品1点とその未製品5点がある。凝灰岩製石包丁は本遺跡で製作されていた可能性がある。サヌカイトの石器には、石錐・楔形石器・尖頭器・石剣破損品？・大型の両面加工石器・剥片がある。

古代の遺物には土師器・須恵器、中世の遺物には土師器・東播系須恵器、近世の遺物には磁器・陶器があるが、これらは包含層・攪乱層からの出土である。

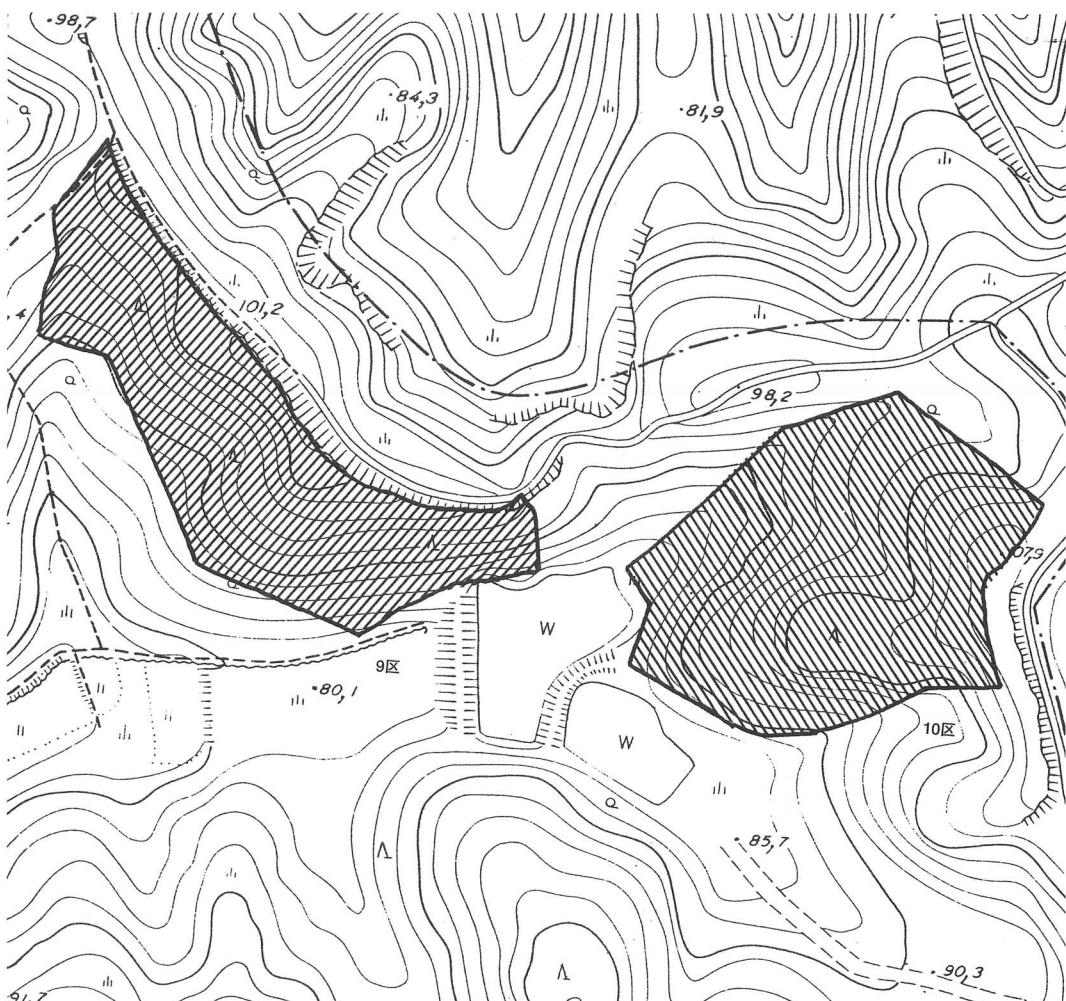
池上北遺跡は過去の調査により、広い範囲で弥生時代中期・後期の住居跡などが検出されていた。今回の調査により集落が河川近くの低地から丘陵の裾にまで広がっていることが明らかとなった。

じょう が たに 56. 城ヶ谷遺跡 第2次調査

1. はじめに

城ヶ谷遺跡は、櫛谷川中流域の左岸の丘陵上に立地する遺跡である。標高約100mの尾根上から標高約70mの丘陵斜面にかけて遺跡は広がっており、遺跡の総面積は約50,000m²にもおよぶものと想定される。遺跡最高所と、谷口川が櫛谷川と合流する付近の沖積地との比高差は約60mである。

昨年度発掘調査を実施した1～3区では、2区で堅穴住居5棟、段状遺構6基、壕2条などの遺構が確認されている。今年度も、西神住宅第2団地（西神南ニュータウン）の造成に先立って、埋蔵文化財の発掘調査を実施した。



2. 調査の概要

今年度の発掘調査の対象地区は9区と10区である。試掘調査の成果では、両地区で弥生時代中期後半～後期初め、飛鳥～奈良時代の遺構・遺物が確認されている。

9区の調査概要

9区は、地形からみて南西方向に延びる3本の尾根筋とこれに挟まれた2つの比較的大きな谷と小さな谷を形成する丘陵斜面で構成される。ここでは、便宜的に最も北に位置する谷から順に9-1・2区、中の谷を9-3・4区、最も南にあたる谷を9-5・6区と呼称することとする。

検出遺構 3本の尾根筋にあたる丘陵斜面では、28棟におよぶ竪穴住居、段状遺構あるいは溝状遺構を含む落ち込み27基、土坑17基、ピット6基、壕状遺構1条などの弥生時代中期末～後期初めにかけての遺構と奈良時代前半の蔵骨器2基などが確認できた。

これらの主要な遺構が立地するのは、丘陵頂部～斜面上位部までの標高約95～100mの範囲に限定されるのが特徴的で、調査中も標高95m付近から湧水があったことにも因るのであろう。検出された竪穴住居の規模等は表1にまとめたとおりである。

遺構番号	平面形態	床面標高(m)	規模(m)	床面規模(m)	最大壁高(cm)	主柱穴数	土坑	壁溝	磨石台石	時期	備考
S B01	隅円方形	98.6	5.5×5.5	5.0×4.6	25	4	○	○		V	
S B02	隅円方形	96.8	7.1×3.8	6.5×3.2	76	2	○	○		V	ベッド状態？
S B03	隅円方形	95.0	5.4×2.9	4.2×2.3	55	1		○		V	
S B04	隅円方形	96.6	4.8×2.2	7.1×3.8	40			○		V	
S B05	隅円方形	96.4	4.8×1.8	4.4×1.3	25	?		○		V	
S B06	隅円方形	96.2	3.5×1.3	3.3×1.0	36	?		○		V	
S B07	隅円方形	95.0	6.8×4.3	6.0×3.3	56	?		○		V	焼失住居
S B08	隅円方形	98.3	6.7×2.7	4.5×1.5	37	?		○		V	
S B09	隅円方形	96.1	6.3×2.2	5.7×1.3	38	?		○		V	
S B10	隅円方形	94.8	10.1×4.3	7.0×2.0	36	2		○		V	
S B11	隅円方形	98.6	6.9×2.7	6.6×2.4	25	?		○		V	
S B12	円形	99.2	復元径6.6	3.0×2.5	40	1	●	○			
S B13	隅円方形	96.7	5.5×3.6	4.3×2.4	106	2	●	○		V	
S B14	楕円形？	99.8	4.1×3.1	3.5×2.3	59	?		○		V	
S B15	隅円方形	97.0	6.7×3.6	6.5×1.7	101	2	○	○		V	S X07に切られる
S B16	楕円形？	96.6	4.0×2.6	2.8×1.5	70	?		○		V	
S B17	隅円方形	97.2	4.5×2.2	4.0×1.7	31	2		○		V	
S B18	円形？	97.9	5.4×2.2	4.5×1.6	117	1		○		V	
S B19	隅円方形	99.8	5.9×2.8	4.9×1.5	60	2		○		V	
S B20	楕円形	99.5	6.6×5.6	6.3×4.6	45	4		○	○	V	床面中央にピット
S B21	隅円方形	99.6	5.0×3.1	4.7×2.9	36	2		×	○	V	
S B22	隅円方形	99.5	5.6×1.9	5.3×1.8	45	2	○	×	○	V	
S B23	隅円方形	98.6	7.9×2.2	7.6×1.7	50	?		△		V	
S B24	隅円方形	97.6	6.8×1.5	6.3×1.1	34	?		○		V	
S B25	隅円方形	98.8	4.9×1.8	4.8×1.7	40	3		×		V	
S B26	円形	98.0	6.4×3.5	6.4×3.5	41	?		×		IV	
S B27	隅円方形	94.6	6.3×1.8	5.0×0.9	40	?		○		V	
S B28	円形	98.1	4.6×3.3	4.6×3.1	22	2		×			

表1 9区検出竪穴住居一覧



fig. 456 9区 遺構平面図

竪穴住居 竪穴住居は、丘陵頂上部と丘陵の斜面で検出された。斜面で検出された竪穴住居は、いずれも等高線に平行して、地山を掘り込んで営まれている。

丘陵頂上部の竪穴住居 丘陵頂上部で検出されたSB01は、隅円方形の竪穴住居で4本の主柱穴を確認した。床面の中央部が熱を受けたためか赤変している。幅15cmの周壁溝が部分的に確認された。SB19は、平面形が円形で主柱穴が2基確認された。幅30cm前後の壁溝をもつ。SB20は、平面形が楕円形で、4基の主柱穴とピット1基を確認している。南周壁に沿ってのみ、幅40cmの周壁溝が巡る。南東隅に磨石が据えられ、隣接してほぼ完形の甕が出土している。

丘陵斜面部の竪穴住居 丘陵の斜面上位部上半で検出された主な竪穴住居は、SB02・13・18・26などがある。

斜面上位部上半 SB02は、床面の拡張が行われたためか、幅20~40cmの壁溝が2周に巡っており、幅30~165cmで周壁沿いがベッド状遺構のように掘り残されている。SB13は、斜面部で検出した内では遺存状態が最も良好であり、最大壁高1.6mを測る。床面には、主柱穴2基と中央土坑1基、幅20cm前後の周壁溝を検出した。主柱穴はいずれも直径15cm、深さ40cmの柱痕をもつ。中央土坑は直径約50cm、深さ20cmで、埋土に炭粒を多く含む。

SB18は、復元径約6.5mの円形の竪穴住居で、床面には、幅20cm前後の壁溝と直径40cm、深さ25cmの主柱穴1基を確認している。SB26は、円形と推定できる竪穴住居であるが、主柱穴は確認できていない。北壁沿いでは壺片がまとまって出土している。

斜面上位部下半 丘陵斜面上位部下半で検出された主な竪穴住居には、SB03・06・07などがあり、いずれも斜面下位部は流失している。SB03は、床面において柱穴1基と直径90cm、深さ30cmの土坑1基が検出された。幅50cmの壁溝が巡っており、西側では甕などがまとまって出土している。SB06の床面では、幅20cmの溝が確認されたのみである。幅30~40cmの壁溝が巡っており、完形の小型壺・台付壺がまとまって出土している。SB07は、唯一焼失住居と考えられるもので、床面で炭化材・焦土が確認されている。主柱穴1基が確認されている。床面に密着した遺物は少なく、大型の土器片が多数流れ込んだ状態で出土している。



fig. 457
調査地遠景
(南上空から)

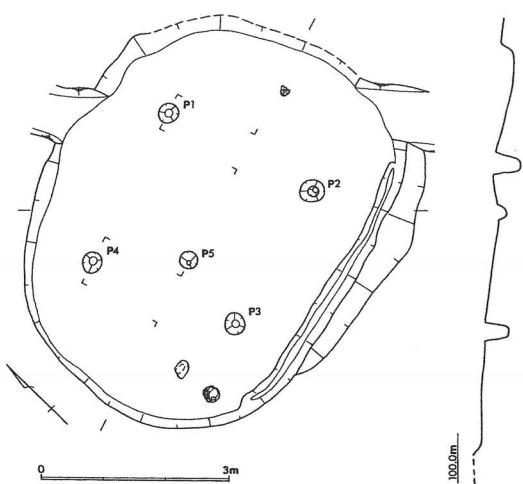


fig. 458 丘陵頂上部検出 SB20 平・断面図



fig. 459 丘陵頂上部検出の竪穴住居 SB01

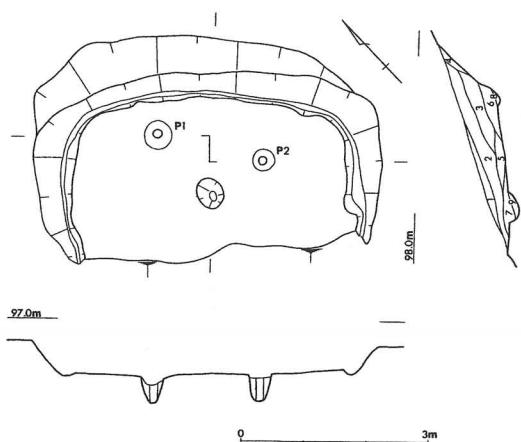


fig. 460 丘陵斜面部検出 SB13 平・断面図



fig. 461 丘陵斜面部の竪穴住居 SB13



fig. 462 9-4区 丘陵斜面の竪穴住居群



fig. 463 9-4区 頂上部及び斜面の竪穴住居群



fig. 464 墓状遺構 SD01



fig. 465 同左の上位部

SD01 9-5区の丘陵頂部を横断するように開削された墓状遺構である。最大幅約3m、最大の深さ約2mで、断面はU字形である。最下層からは弥生土器の小片が、下層は地山の粘土塊を多く含む墓壁の崩落層、炭を多く含む中層からは須恵器片が出土している。標高94m付近まで直線的に約18m延びた後、大きく屈曲し、急斜面の小谷部を斜距離で約30m程延び、調査区の端近くにまで到る。屈曲した後は断面が鈍いV字形で、埋土も上半部と異なることから、墓状遺構掘削後にできた水みちではないかと考えている。

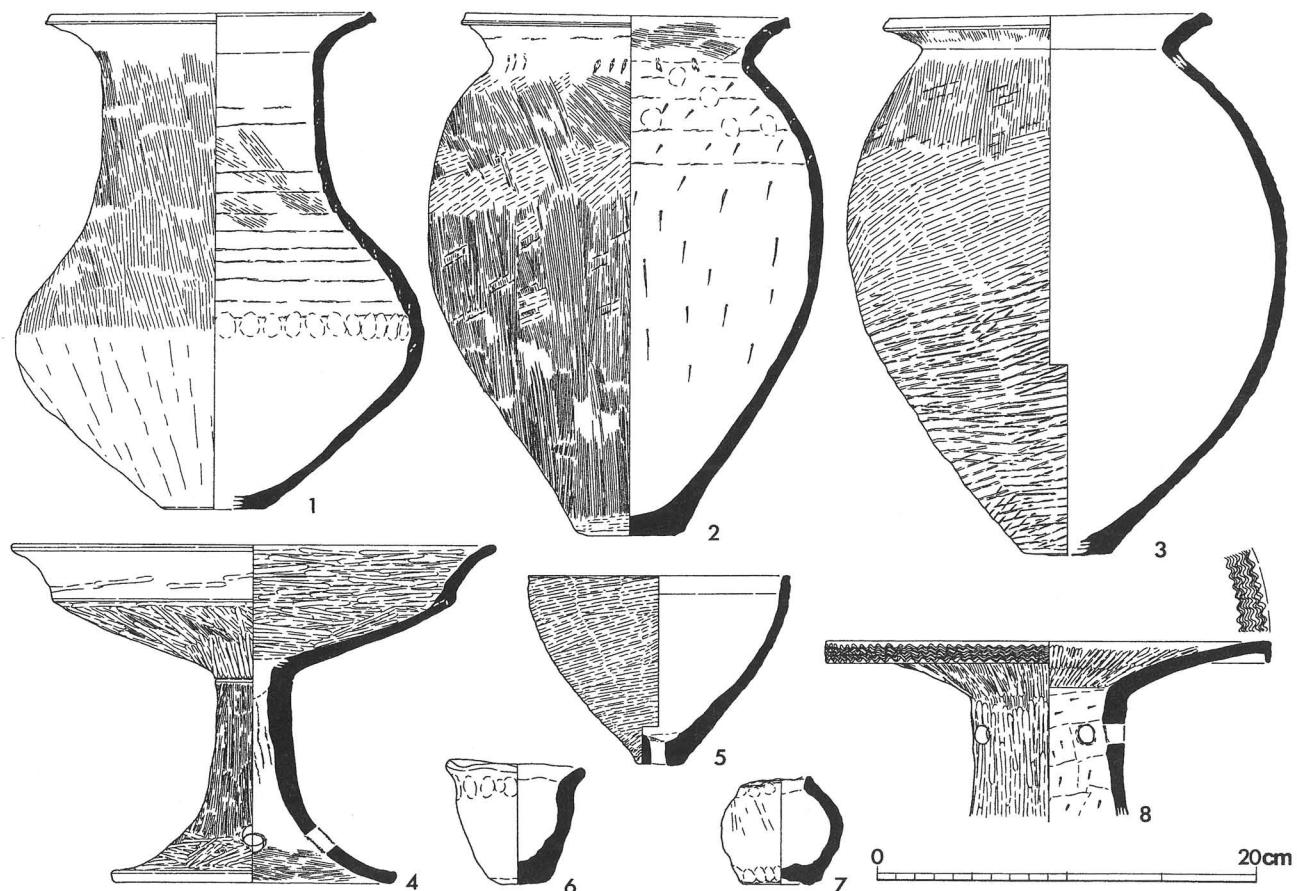


fig. 466 出土遺物実測図

- (1. SB23 2. SB22 3. SB20 4. SB09
 5. SB04 6・7. SB27 8. SB24)

蔵骨器

S T01

S T01は9-3区の緩やかな斜面の上位部（標高100.5 m）で確認された蔵骨器で、直径40cm、深さ約10cmのピット内に火葬骨を充填した土師器甕を正位に据えたものである。表土直下で土師器の口縁部を確認したため、蓋の存在については不明である。

S T02

S T02は9-4区の緩やかな斜面の上位部（標高98.0 m）で確認された蔵骨器で、直径45cm、深さ20cmのピット内に火葬骨を充填した須恵器の甕の底部のみを据えたものである。蓋は同一個体の体部片を被せる程度のものである。なお、容器として使われた甕の底部の破碎面の一部には自然釉が被っており、製品として流通しにくい製品を利用していることが判る。

出土遺物

出土遺物には、28ℓ入りのコンテナで約60箱を数える多量の弥生土器（弥生時代中期末～後期初め）と石鏸（磨製1点・打製2点）、環状石斧1点がある。また、流土からは古墳時代後期末～奈良時代の須恵器が散在的に出土している。

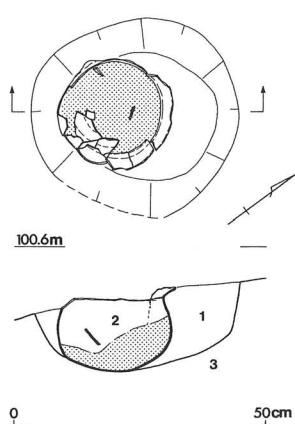


fig. 467 蔵骨器 ST01 平面図・断面図

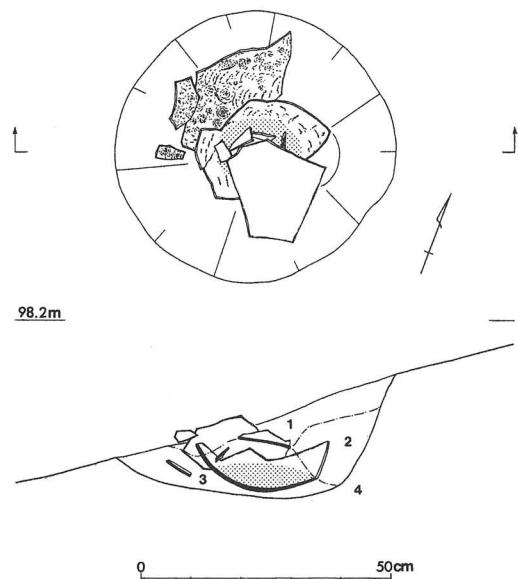


fig. 468 蔵骨器 ST02 平面図・断面図



fig. 469 蔵骨器 ST01

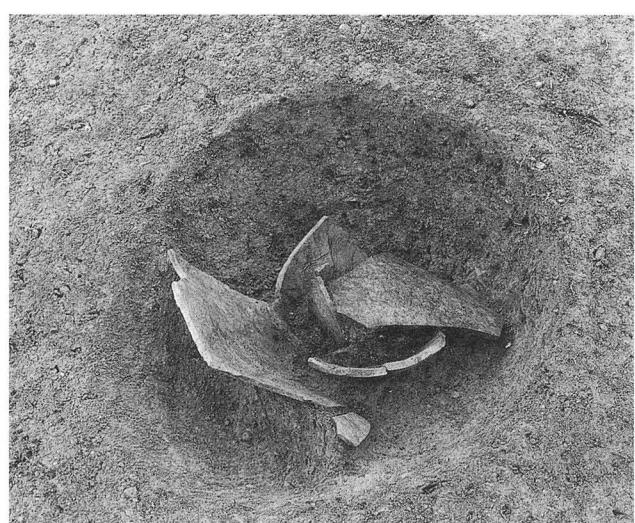


fig. 470 蔵骨器 ST02

10区の調査概要 10区は、地形からみて青谷池がある大きな谷筋の最も奥部にあたる地区で、9区とは谷を挟んで別の丘陵のように見える。試掘調査の成果からみても、明らかに弥生時代と判断できる遺構は確認されていなかった。調査区の最高所の標高は約105mで、ここから北西方向と西方向に延びる丘陵とこれらに挟まれた谷筋から構成される。

確認できた遺構には、奈良時代の土坑2基、奈良時代の蔵骨器1基、土坑墓1基、時期不詳の壕1条、時期不明で埋土に焼土・炭を多く含む土坑・落ち込み17基、ピット26基がある。

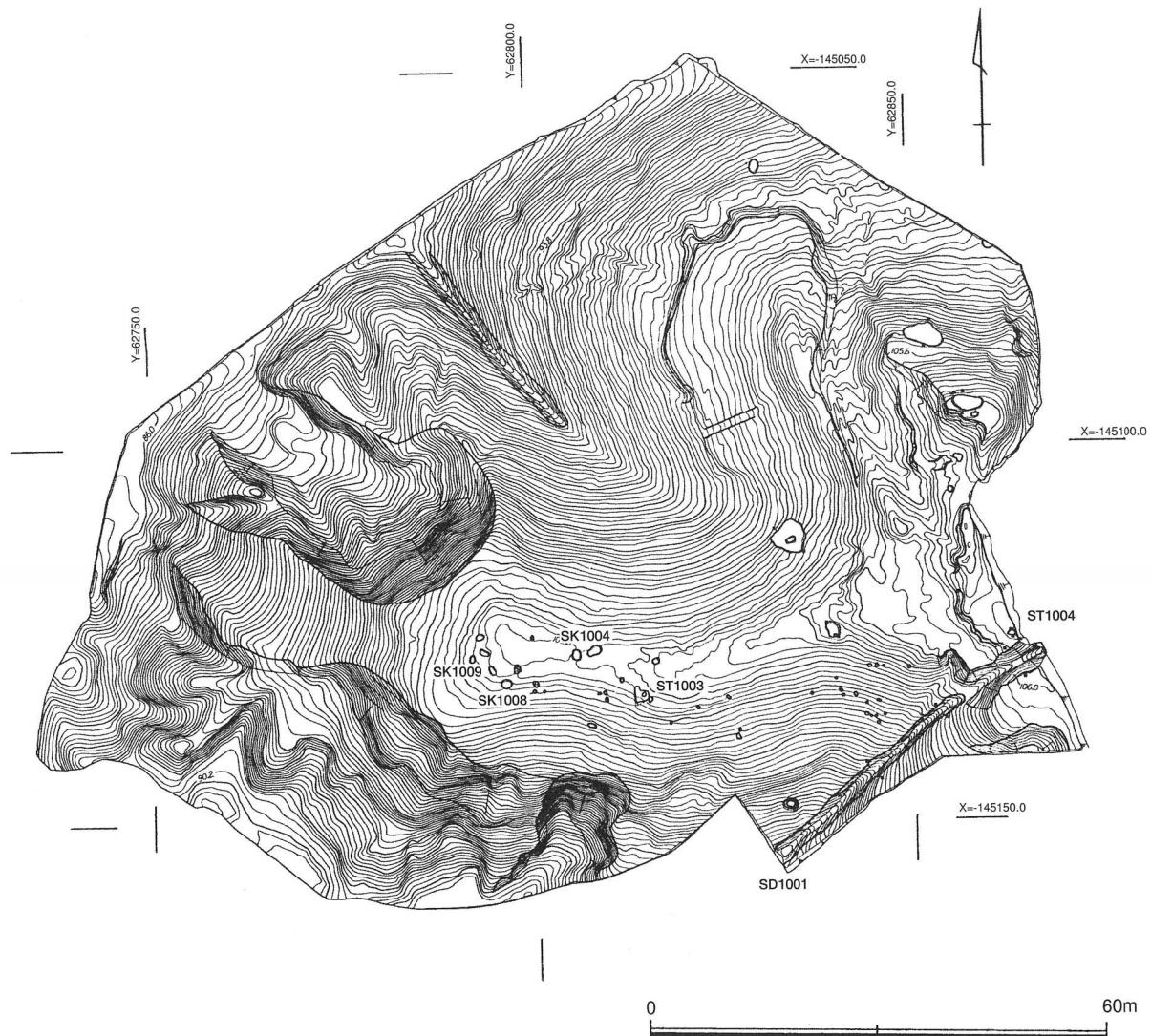


fig. 471 10区 遺構平面図

土 坑 SK1004は、 1.0×1.4 m、深さ22cmの隅円方形の土坑である。埋土下層の炭粒を多く含む黒灰色砂質土から奈良時代の須恵器片が出土している。

SK1008は、直径約1.3m、深さ約40cmの円形の土坑である。埋土下層に炭粒を多く含む淡黒灰色細礫混じり砂質土が堆積するが、遺物は出土していない。

SK1009は、 0.7×1.2 m、深さ25cmの楕円形の土坑である。土坑壁が熱を受け赤変しており、埋土には炭粒と焼土塊を多く含んでいる。遺物は出土していない。

蔵骨器

S T1003は、東西方向の尾根頂上部から南斜面をわずかに下った地点で確認された蔵骨器である。直径25cm、深さ約10cmの楕円形のピット内に火葬骨を充填した土師器甕を横位に据え、須恵器坏蓋で蓋をしたものである。土師器口縁部の下に窯壁片が枕のように据えられている点が特筆できる。

火葬墓

S T1004は、最高所から南東方向へ延びる尾根頂上部で確認された蔵骨器である。0.7×1.0m、深さ20cmの楕円形の土坑に、火葬骨を直葬したものである。火葬骨とともに焼土・炭が出でている他に、遺物は確認できていない。

壕

S D1001は、調査区の南東隅で確認された壕で、9区で確認されたS D01と同様に尾根を切るように開削されている。最大幅3.4m、深さ1.2mで、確認長は13mである。標高99m付近から下位については9区 S D01同様に上位部とは埋土も全く異なり、S D1001から続く方向で谷筋を流れる水みちと化しているようである。

出土遺物

出土遺物は、28ℓ入りのコンテナで約3箱である。流土からは少量の弥生土器とサヌカイト片、奈良時代の須恵器・土師器片がある。

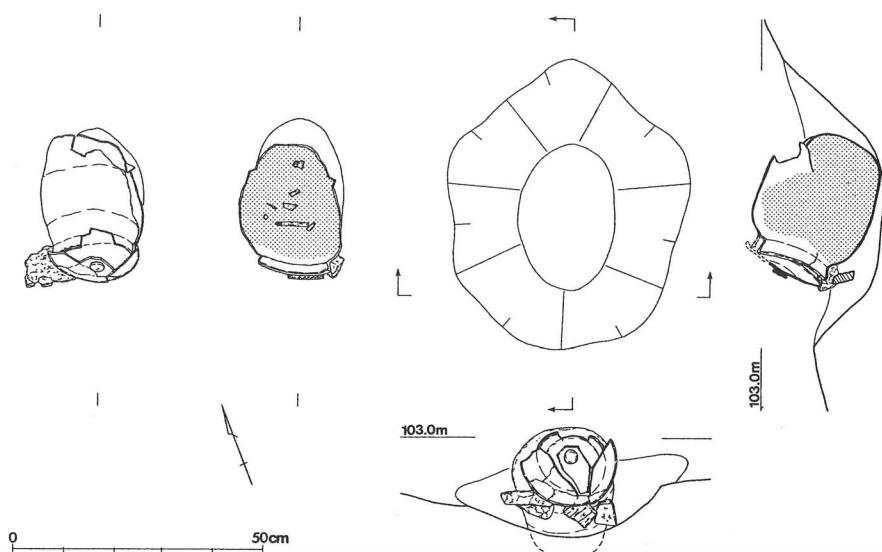


fig. 472 10区 ST1003 平面図・断面図

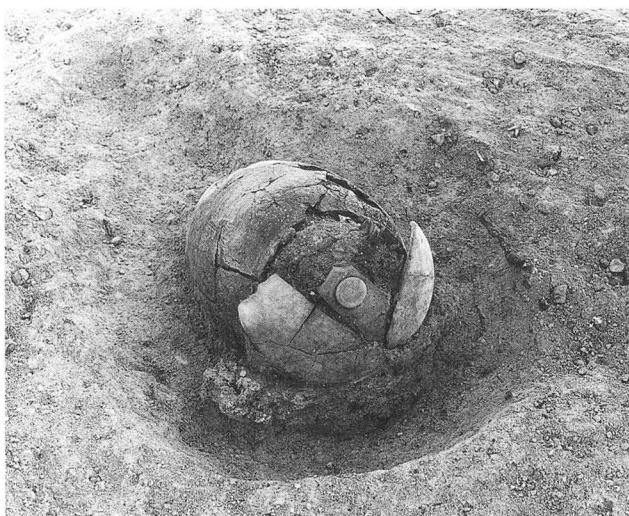


fig. 473 蔵骨器 ST1003



fig. 474 ST1003 土師器甕に充填された火葬骨

3.まとめ

これまで明石川流域で発見されてきたいわゆる高地性集落は、弥生時代中期末で終焉を告げる遺跡がそのほとんどであったが、中期末に集落形成が始まり、明らかに後期前半まで継続する大規模な高地性集落の発見は特筆できるものである。

竪穴住居は昨年度の第1次調査で確認された5棟を含めると、これまでに合計33棟が確認されたこととなる。さらに未調査区（4～8区）があり、今後さらに竪穴住居が確認できる可能性が高く、遺跡全体で50棟を越える住居の存在が予想される。

さらに、今回確認できた壕状遺構（S D01）は、城ヶ谷遺跡の東南限を画するものとして重要な発見であった。今秋調査された表山遺跡（中期末・西区伊川谷町上脇）では、集落を囲む環壕が確認されているが、これとともに近畿地方でも類例の少ない遺跡として数えられる。また、9区の最高所からは、北西方に西神ニュータウン内第65号地点遺跡、同第50号地点遺跡、北東に如意寺裏山遺跡、南方に青谷遺跡の最高所のわずか4地点の弥生時代中期末の高地性集落が眺望できるにすぎず、これらの遺跡からの眺望とは比較できないほど、視野が狭く、沖積地から奥まって立地する点が特徴的である。ましてや同じ中期末～後期の遺跡として知られる谷口川下流一帯に広がる栃木遺跡（櫛谷町栃木）からも、ほとんど城ヶ谷遺跡を望むことはできない。このように、かなり閉鎖的に立地する集落遺跡に尾根を切断する壕状遺構が営まれ、集落を画する意味はどこにあるのか。これまでこうした壕状遺構は外的から集落を防衛する機能をもつものとされたきたが、城ヶ谷遺跡では集落の性格を考えていく上でも示唆に富むものと言える。

一方、10区で確認されたS D1001は、埋土の状況から奈良時代にはほぼ埋没していたようで、現状ではそれ以前の開削として捉えられる。しかし、その性格については不明と言わざるを得ない。

今回確認された3基の蔵骨器と1基の火葬墓（S T1004）は、いずれも櫛谷町栃木から見える丘陵稜線から南斜面をやや下った場所にそれぞれ単独で埋置されている。また、完形に近い須恵器も周囲から出土していることから、さらに数基の墓がもともと存在していた可能性が高い。各地で確認される蔵骨器も同じように、集落が立地する沖積地から直接見えない場所につくられていることが多い。蔵骨器に葬られた主は谷口に立地する奈良時代の集落によって営まれたものと考えられる。また、S T02では焼け歪みの著しい須恵器甕の底部をその容器として使っており、S T03では窓壁片が枕として使われていることから、須恵器生産に携わっていた有力者の墓ではないかとも推測される。

57. 比金山如意寺三重塔

1. はじめに

如意寺は櫛谷川の支流である谷口川により開拓された小谷に存在する。この谷口川の北岸に位置し、丹生山系へと続く丘陵端部に建立された山下の寺院である。位置的には如意寺から谷口川沿いに下ると幹線道路の櫛谷街道であり、また如意寺道を通じて長谷とも結ばれている。その他、伊川谷町井吹、別府とを結ぶルートも存在した。

天台寺院として整備されたのは12世紀らしい。本来は本堂と常行堂で構成される法界寺型の伽藍配置であり、三重塔は中軸線がずれる事実から遅れて整備されたと考えられている。

如意寺の創建については、『播陽明石之保比金山如意寺旧記』に大化元年（645年）法道上人の開基との記事が残り、比金山の堂屋敷洞窟（寺谷に存在）には法道上人が住んだとの記事も残る。播磨に多く認められる法道上人の開基伝説を持つ寺院の一つである。

如意寺の開基について最も古い文献は、貞応三年（1224年）の『延暦寺政所下文』であり、約300年以前に願西聖人が建立したと記されている。文中にある10世紀の開基の誇張だが、より事実に近いものであろう。

如意寺の寺域は、寺院の整備や圃場整備に伴い埋蔵文化財の調査も幾度か実施されている。常行堂（阿弥陀堂）では解体修理に伴う基礎地盤の調査では、現在の基壇の下層に蒲鉾形の焦土層が確認されている。前身建物に伴う基壇だと推定できる。

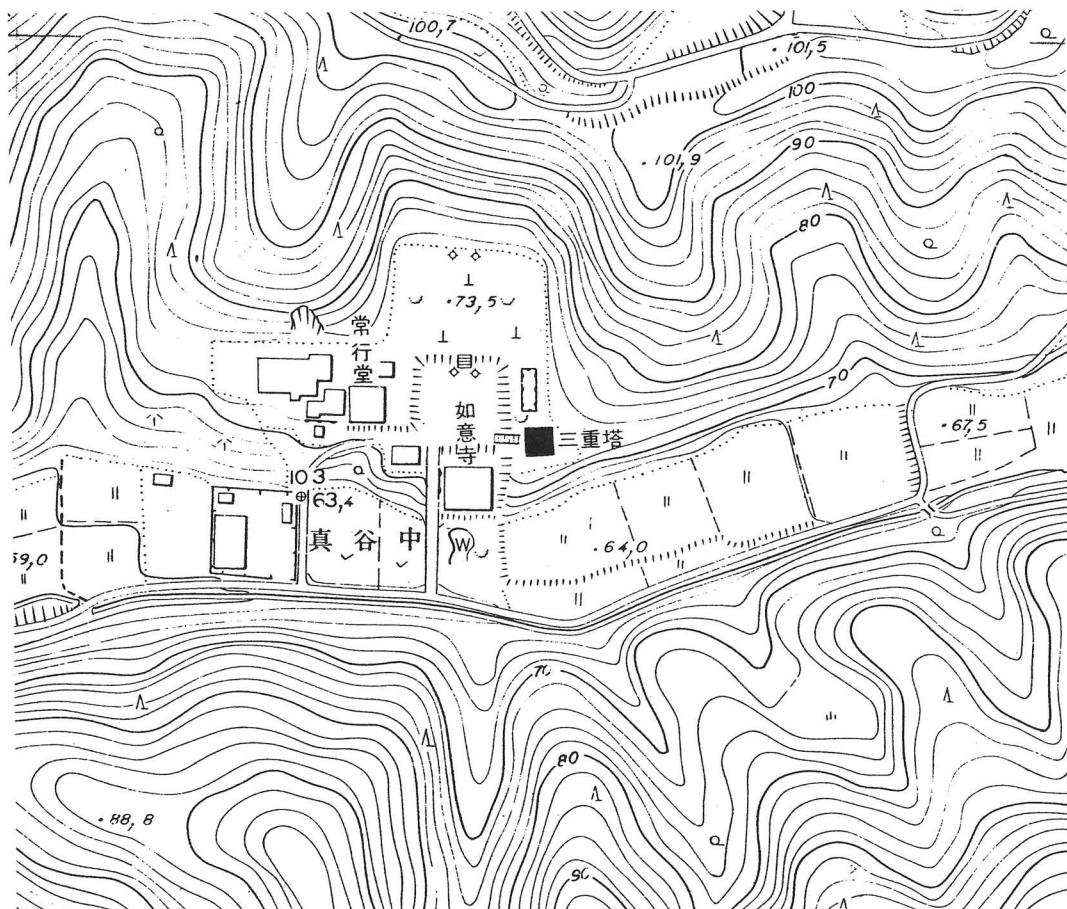


fig. 475
調査地位置図
1:2,500

本堂では基壇の南面にトレーナーを設定して調査を実施したが、調査範囲の関係から中世以前の基壇は確認されなかった。

文殊堂の南西に広がる平坦面の調査では、おそらく15世紀～16世紀頃と推定されている瓦窯跡と14世紀以前に建立された基壇建物が確認されている。

如意寺の南面で東西に延びる谷口川流域の調査では、塔頭の推定位置から13世紀～14世紀の柱穴群、石敷遺構、池上落ち込み、井戸等を含む12世紀末～19世紀に至る遺構が確認されている。元禄5年（1692年）に描かれた如意寺の絵図面では門が現在より外側に存在するが、塔頭に関連する遺構もその推定位置の周囲まで存在することも明らかになった。

2. 調査概要

今回の調査は雨落ち溝と三重塔の西側に存在する階段の整備に伴って、平成6年から始められた三重塔修理事業の一環として実施した。

調査区－1 三重塔の雨落ちに沿って設定された調査区である。

第1遺構面 平成6年度の調査から、近世ではほぼ延べ石縁基壇の築造と前後する時期の遺構面でと理解されている。二成基壇は埋没しているが、部分的に僅かな高まりは残っていた。

S D 104 塔の雨落ちに位置し、幅約36cm、深さ約6cmを測る溝である。浅い小溝であるが、南東角では直角に屈曲した状況で検出しており、人工的に掘削された雨落ち溝である。

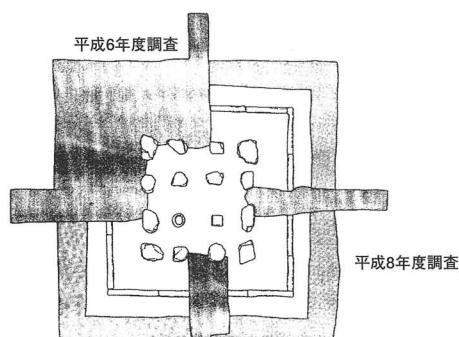


fig. 476 調査区配置図

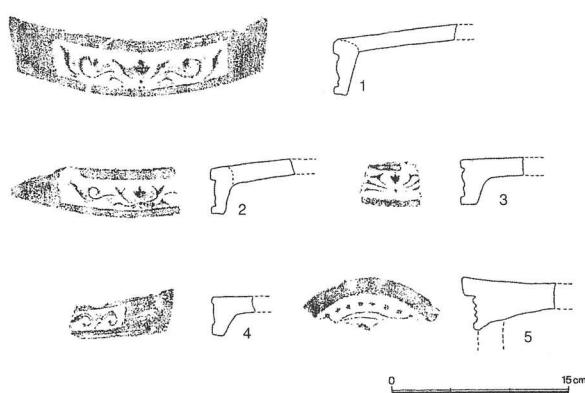


fig. 477 第1遺構面遺物実測図

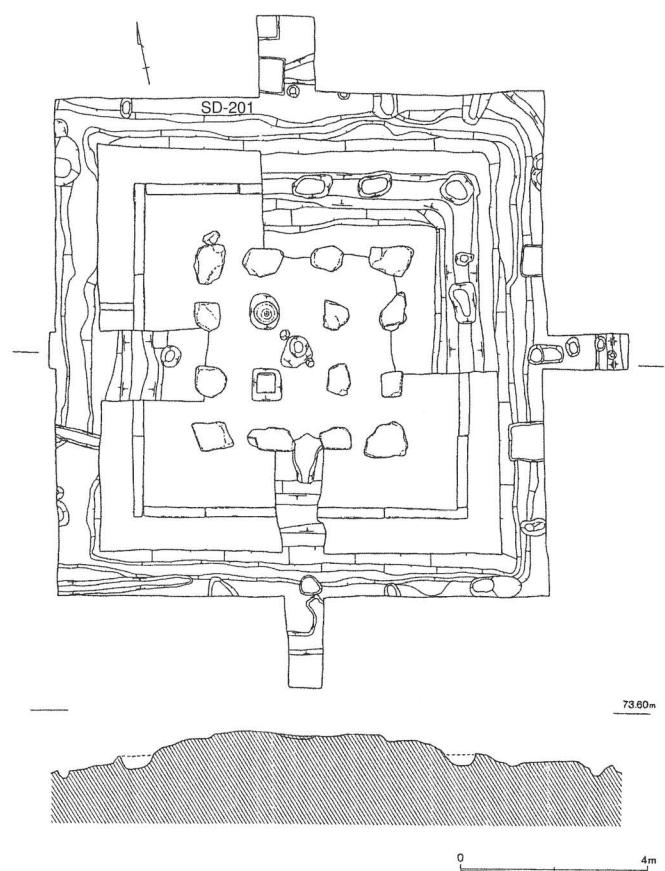


fig. 478 第2遺構面 平面図

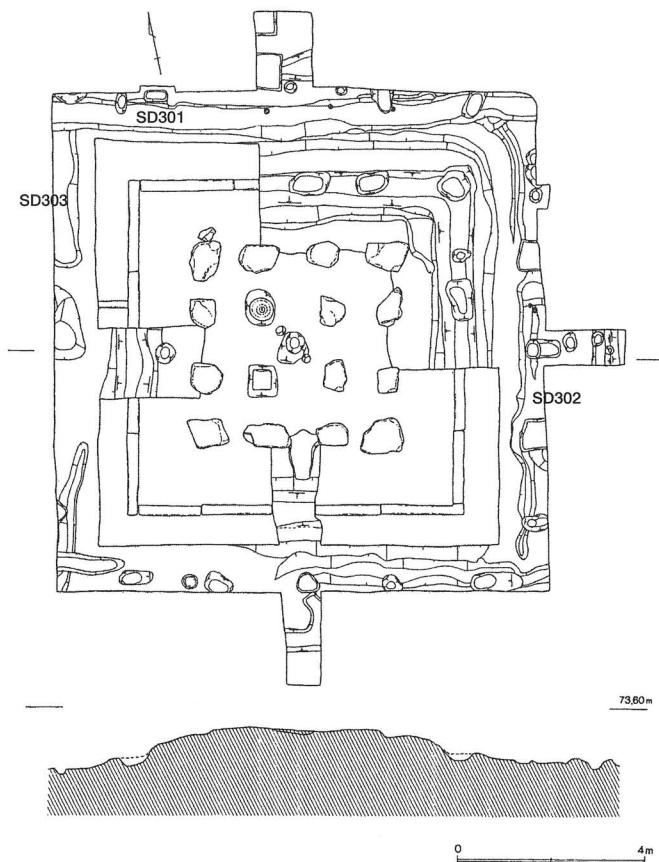


fig. 479 第3遺構面 平面図

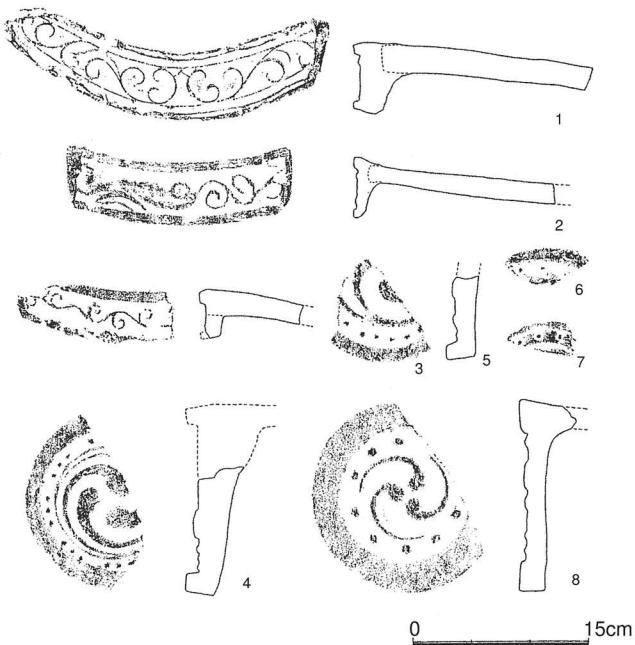


fig. 480 SD301 出土瓦実測図

第2遺構面 平成6年度の調査では近世に築造された上層基壇等が検出された、今年度は雨落ちの推定位置で浅い小溝を確認している。

S D 201 塔の雨落ちに位置し、幅約20cm～30cm、深さ約7cm～15cmを測る溝である。浅い溝であり、人工的に掘削されたか疑問も残る。基壇の西面～南面にかけて近世瓦が多数出土している。

ピット 雨落ち溝の外側からの出土で、近世以降に行われた三重塔の修理に伴う遺構である。

第3遺構面 平成6年度の調査から、二成基壇の築造に始まり17世紀～18世紀頃に至る遺構面だと確認されている。今年度の調査では、下層基壇に伴う雨落ち溝が確認された。

S D 301 北側の雨落ちに位置し、幅約58cm～72cm、深さ約20cm～35cmを測る溝である。北西角でも南北方向に屈曲せず、直線的に西側斜面へと続いている。位置的に雨落ち溝として掘削しているが、東側斜面からの湧水を流す排水溝としても機能している。平成6年度調査で出土した遺物から、溝の廃絶時期は17世紀～18世紀頃だと理解できる。

S D 302 南側と東側の雨落ちに位置し、幅約24cm～41cm、深さ約3cm～8cmを測る溝である。浅い落ち込み状に検出されただけであり、人工的な溝か疑問も残る。

S D 303 西側の雨落ちに位置し、推定幅約60cm、深さ約50cmを測る溝である。S D 301削平されている。中世の瓦の他、須恵器や土師器等の破片が出土している。中世に掘削され埋没した溝であり、三重塔の建立年代にも近い遺構である。

溝は三重塔の中央付近までしか延びていない。地形的にも西側斜面への排水口が必要であるが、調査範囲の関係から明らかにできなかった。

ピット 調査区の北半で S D301 に沿った北側から検出された。幅約24cm×48cmで深さ約 4 cm を測る。底部は焦土化しており、炭化物が堆積している。

調査区－2 参道から続く段階の修理工事に伴い、調査区を三重塔の東側斜面に設定した。工事の影響深度である地表面から約 1 m までを調査している。明らかな遺構は確認していないが、平坦部の造成に伴う整地層を検出した。

この整地層は調査区－2 の東端付近で約70cmの厚みが存在し、13世紀の須恵器等が小片で出土している。

3. まとめ 如意寺の境内は、丘陵端部を造成した平坦部に形成されている。三重塔も北から南へ傾斜する斜面を造成して建立している。この三重塔が建立された平坦部は、東側は斜面を削平しているが西側では整地層が確認され、盛土により造成されていることが明らかになった。

この整地層からは13世紀の遺物が比較的多く出土している。この事実から基壇の築造に先立ち平坦部を造成したのは13世紀以降であり、基壇が築造されたのもそれ以降であると確認できた。

雨落ち溝は S D301・303・104で確認できた。S D301・201も雨落ちに位置で確認したが浅い小溝であり、人工的に掘削されたか疑問が残る。

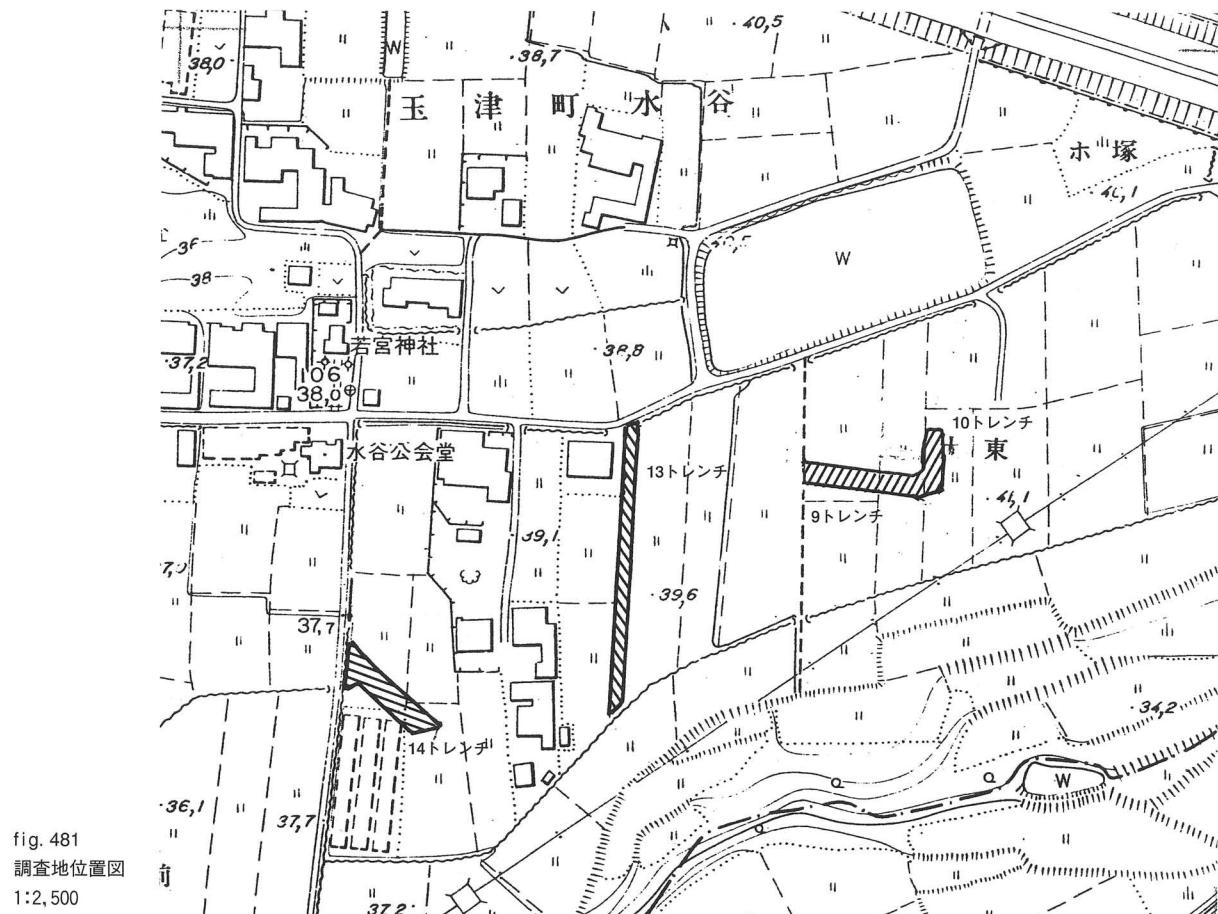
最も古い雨落ち溝は、第3遺構面で下層基壇の西面から確認した S D303である。出土遺物から、中世末までに埋没したことが判る。この S D303は基壇の中央付近で途切れている。基壇の西側には三重塔への参道が造り付けられている。参道の位置は恐らく塔の建立以来あまり移動しておらず、その為に S D303も中央付近で途切れたのであろう。

S D301もほぼ同規模の雨落ち溝である。S D303を削平しており、近世に廃棄され埋没している。この S D301・303は、雨落ちとだけ考えるには深い溝である。地形的に東側斜面からの雨水等の排水が必要であるが、この排水溝としての機能を合わせ持つ為であろう。

58. 水谷遺跡 第5次調査

1. はじめに

今年度の発掘調査は、昨年度に引き続き水谷中央地区の特定土地区画整理事業に伴う区画街路部分予定地について実施した。



2. 調査の概要

約390m²の調査地である。水谷大東古墳が造営された第2遺構面から遺構は確認できなかつたが、第1遺構面から近世の水田と畑作に伴う耕作痕等を検出し、第3遺構面から庄内式～布留式並行期の土坑群を検出した。また、第1遺構面で近世以降の水田土壤から古墳時代の管玉が出土し、第3遺構面を覆う遺物包含層から尖頭器とナイフ形石器が出土している。

第1遺構面

近世以降の遺構面であり、村落の生産域を確認している。

耕作痕迹

南北方向に耕作を区分する畦畔と、その内部で約1mの等間隔に東西方向に伸びる小さな畝状遺構が検出されている。畑作に伴う遺構と考えられる。耕作土層から近世の陶磁器片が出土地している。

9 レンチ西側からは、多数の南北方向にのびる小溝を検出した。時期的に新しく、近世～近代の遺構と考えられる。

この9トレンチ西側で確認できる近世～近代の耕作土壤から、古墳時代の勾玉が1点出土している。水谷大東古墳か、周囲に存在した他の古墳の主体部が削平され、散逸した副葬品である可能性が高い。

第3遺構面 庄内～布留式並行期の遺構面である。遺構面の全域から不定型の土坑と、大きな落ち込み状遺構を検出した。

また、第3遺構面を覆う遺物包含層から、尖頭器とナイフ形石器（共にサヌカイト）が確認されている。旧石器の存在も考慮できるため、トレンチで第3遺構面より下層の確認を行ったが、無遺物である。

土坑群 土坑は最終埋土に暗灰褐色砂質土が堆積するが、その下層は底部まで遺構面と同じ黄褐色系統の砂質土が堆積する。遺構面を掘削し、二次堆積したものであろう。

これらの土坑からは、庄内～布留式並行期の土器片が確認されている。また、一部の土坑では、底部からほぼ完形に復原できる甕が出土している。これらの事実から、土坑が掘削された時期も庄内～布留式並行期と理解できる。

土坑の大部分は、底部が乳白色系統の粘土を掘削した下面で止まっている。壁面はほぼ垂直に落ち込む土坑が多い。一部では、この乳白色粘土層を挟り、壁面がやや袋状になる土坑も認められる。

9トレンチの中央付近は全体に大きく落ち込んでおり、その底面から土坑状に掘削した窪みも検出されている。この大きな落ち込みには、他の土坑と同じく遺構面が攪拌され二次堆積したと考えられる黄褐色系統の砂質土が堆積している。土層断面を確認すると、一部で土坑が切り合う状況も確認できる。遺構面全体を繰り返し掘削しており、平面で切り合いが確認できなかったものもある。他の土坑群と同じく、庄内～布留式並行期の土器が比較的多く出土している。

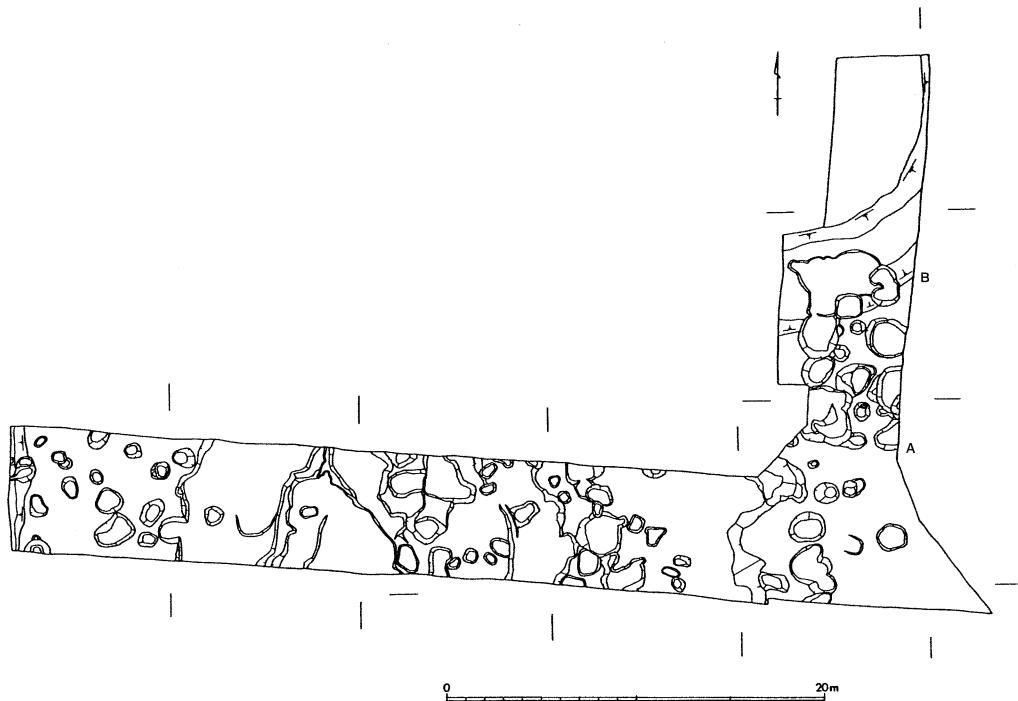


fig. 482 9・10トレンチ 第3遺構面平面図

S K 42 10トレンチ東壁に沿って検出した。幅約1.3m、深さ約0.5mを測る不整形の土坑である。北肩をS K59に削平されている。壁面はほぼ垂直に落ち込み、乳白色粘土を掘削した下面で底部となっている。一部の壁面では肩口から奥へ乳白色粘土を抉り、やや袋状となっている。

S K 59 10トレンチ東壁に沿って検出した。幅約0.9m、深さ約0.3mを測る不整形の土坑であり、S K41、42を削平している。乳白色粘土の上面付近で底部となり、底部上面からほぼ完形の甕が出土している。他の土坑群とは性格が異なり、何らかの祭祀的な意味合いを持つ土坑である可能性も考えられる。

S X 01 黄褐色系統のシルト混じり砂質土が堆積し、幅約5.5m、深さ約0.3~0.6mで南北に続く落ち込みである。基本的に土坑群と同じ性格の遺構であろう。庄内~布留式並行期の完形に近い土器が多く出土している。

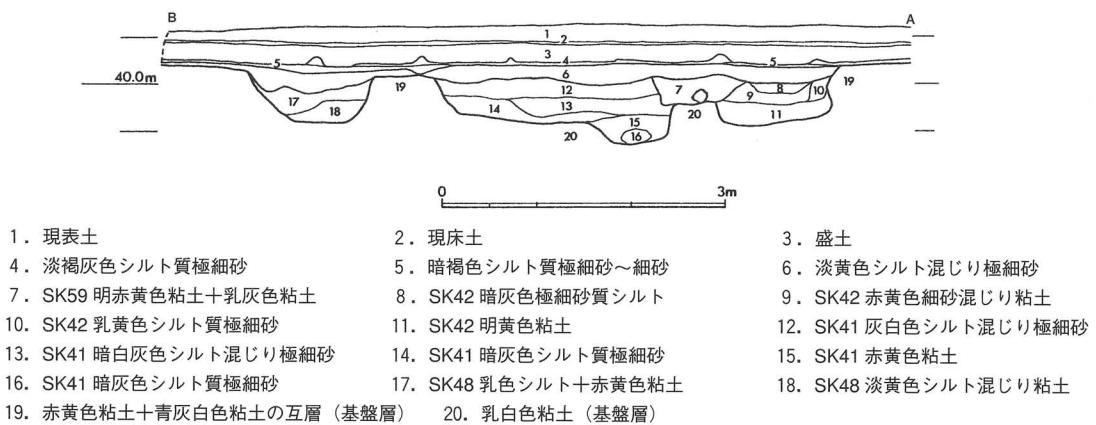


fig. 483 10トレンチ断面図



fig. 484 9トレンチ第3遺構面全景



fig. 485 10トレンチ第3遺構面全景

13トレンチ 幅約2m、長さ約70mのトレンチである。黄色系砂混じり粘土の基盤層で確認できた遺構には、溝状遺構1条、ピット3基、落ち込み2基がある。

出土遺物は少なく、古墳時代後期の須恵器・土師器の小片がある程度である。

14トレンチ 第5次調査では最も西端に位置する、約120m²の調査地である。基本的に耕土・床土の直下で地山（黄褐色シルト）が検出され、遺構は確認していない。

本来の地形は東が高く西へ傾斜しており、現在の水田造成で広範囲に削平されている。トレンチの西側では徐々に堆積層が厚くなり、西端では遺物包含層も存在した。

遺物は中世の須恵器片等が出土している。大部分がトレンチ西側からの出土である。

3.まとめ

こんかいの調査では、9・10トレンチで庄内～布留式並行期の土坑群が確認された。これらの土坑から出土した土器は、すべて庄内～布留式並行期に納まる。SK59では底部直上からほぼ完形の甕の出土した他、SX01でも比較的完形に近い土器が出土している。これらの事実から、土坑を掘削した時期も庄内～布留式平行期と判断できる。

これらの土坑は、攪拌された黄褐色系統の砂質土で埋め戻された可能性が高い。また、基本的に乳白色系統の粘土層を掘削した下面が底部になることでも共通している。

時期的に全く異なるが、神戸市内で類似する形態を持つ土坑は、神出遺跡の粘土採掘坑とされる遺構で確認できる。今回の調査で検出された土坑群の性格も、土器を焼成などを目的とした粘土採掘坑である可能性は考えられる。ただし、同時期の類例等が乏しく、現段階では明らかにできない。

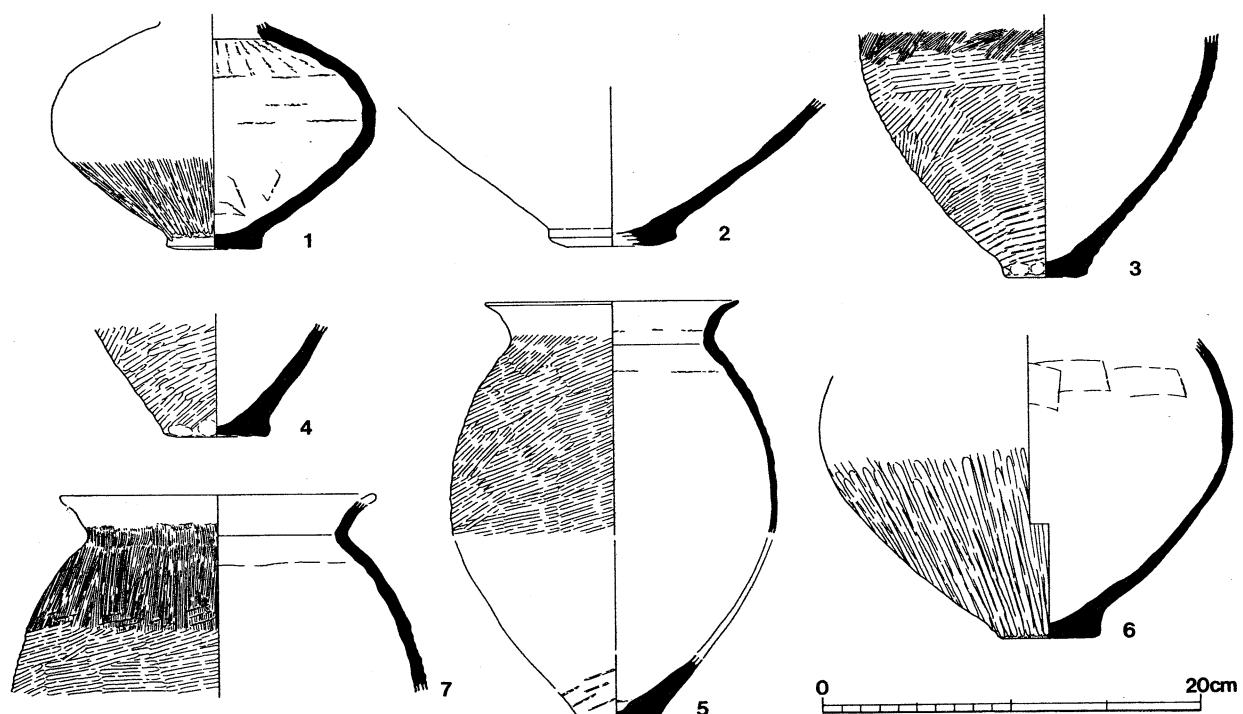


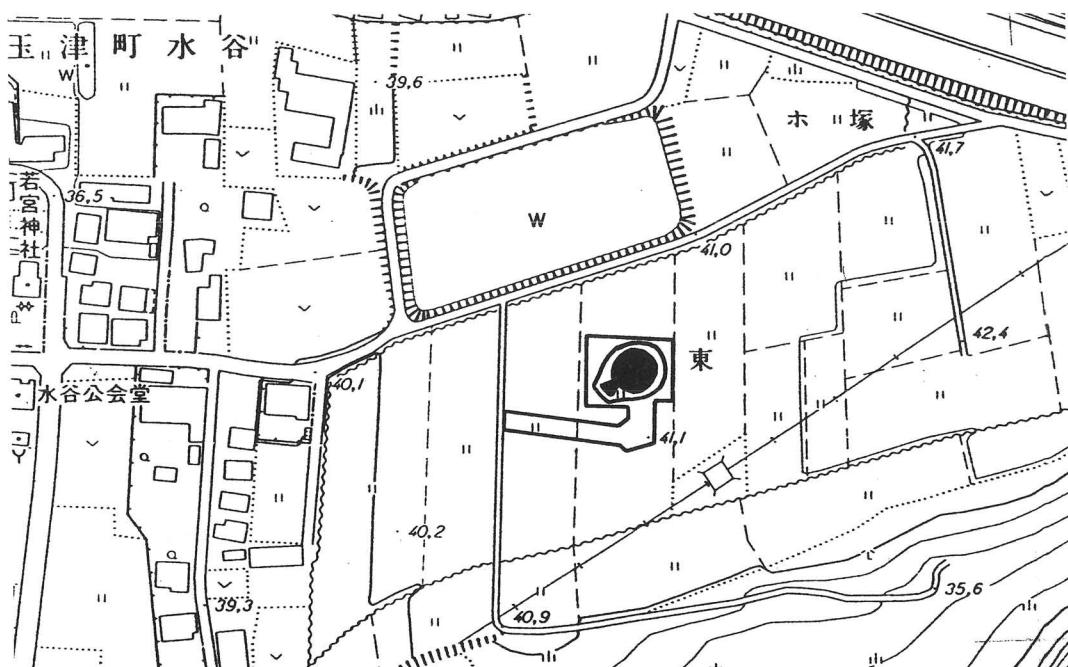
fig. 486 9・10トレンチ 第3遺構面出土土器実測図
(1. SK33 2. SK34 3. SK40 4. SK44
5. SK59 6. SX04 7. SX04-W)

みたにおおひがし 59. 水谷大東古墳

1. はじめに

水谷遺跡は櫛谷川と伊川にはさまれた、標高約40mの南北に延びる段丘上に位置している。水谷中央地区の特定土地区画整理事業に伴って新たに発見された遺跡で、平成3年度に初めて発掘調査が実施された。その後、これまでに4回の調査が行われている。

これまでの調査結果から、弥生時代後期～古墳時代初頭と古墳時代後期の土坑や溝などの遺構・遺物が発見されている。古墳時代の住居跡はいまだ発見されていないが、周囲にこの時期の集落が存在した可能性が考えられる。



周辺の古墳

水谷遺跡が立地している櫛谷川と伊川にはさまれた丘陵上や段丘上には、多くの古墳が分布している。古墳時代前期～中期では、水谷大東古墳から東約900mの丘陵上に天王山古墳群があり、明石川流域では最古の4世紀前半につくられた天王山4号墳・5号墳が含まれる。また、南東約800mの丘陵上には4世紀後半につくられた白水瓢塚古墳（前方後円墳）があり、古墳墳丘の周囲からは埴輪円筒棺も確認されている。

古墳時代後期では、天王山古墳群中に天王山3号墳（帆立貝式古墳）が知られている。また、水谷大東古墳の南約700mに延命寺古墳が、南約900mに高津橋大塚古墳、東約1500mには鬼神山古墳などさまざまな古墳が存在する。

また、古墳時代の集落跡は、付近の段丘から沖積地にかけて白水遺跡、小山遺跡、今津遺跡、潤和遺跡、新方遺跡などの遺跡が数多く知られている。

今回の調査は、土地区画整理事業に伴う区画街路部分の試掘調査（10トレンチ）で確認された埴輪片を出土し、緩やかな円弧を描く溝状遺構の範囲およびその形態の全容を明らかにするためのもので、溝状遺構の確認地点から順次調査区の拡張を重機を使って実施した。周溝内については1～10区までに区画し、遺物の取り上げ等に便宜を図った。最終的な調査面積は570m²となった。

2. 調査の概要

調査の結果、試掘調査で確認されていた溝状遺構は、帆立貝式古墳の周溝の一部であったことが判明した。古墳は字名をとって「水谷大東古墳古墳（みたにおおひがしこふん）」と命名した。水谷大東古墳は、南西に造り出し部をもつ全長約20mの帆立貝式古墳で、円丘部の直径は約15m、造り出し部は長さ約5mで、最大幅は約5.5mである。完周する周溝をもつものの、墳丘はそのほとんどが近世以降の水田造成で削られており、最大で25cmを残す程度で、盛土は全く確認できなかった。このため、埋葬施設についても全く不明であるが、周囲からは全く石材等確認できないことから、木棺直葬と推定される。

fig. 488 周溝内地区割り図 1:500

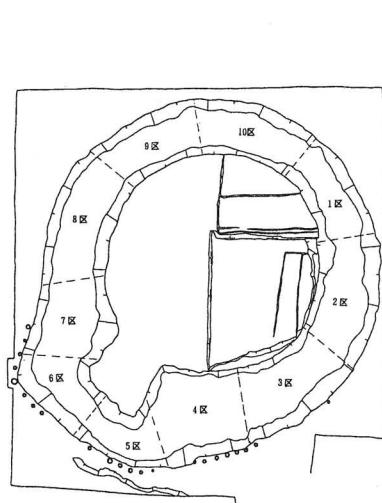


fig. 489 水谷大東古墳 平面実測図



fig. 490 塁輪の樹立状況と周溝内の遺物出土状況



fig. 491 周溝外側肩部の埴輪

墳丘上の外部施設については、周溝内の遺物の出土状態から、円筒埴輪と朝顔形埴輪で構成される全周する埴輪列が存在したものと考えられ、葺石は全く存在しない。

周溝は幅約3～4m、深さ約40～50cmで、平面形は馬蹄形である。埋土の大半が、大量の遺物を含む暗褐色極細砂質シルトである。このシルト層の上面で確認できる耕作面は、周溝より外側のみで確認される近世段階の耕作面で、墳丘部には及んでいないことから、墳丘が削られたのは近代の水田造成に伴うものと考えられる。

周溝3区～7区にかけての外側肩部では円筒埴輪の基部が樹立された状態で21本（掘形のみを含む）確認された。この他の周溝内でも外側から倒れ込んだり、流れ込んだ状態で埴輪片が確認されることから、本来は周溝の外側の肩部にも全周する埴輪列が存在したと考えられる。

造り出し部のくびれ部にあたる周溝の墳丘側斜面からは、円筒埴輪・朝顔形埴輪・須恵器とともに形象埴輪が多く出土している。遺物整理未了の現段階で、形態の判明するものは、鶏形埴輪2個体、人物埴輪2個体、楯形埴輪1個体がある。また、これらの埴輪とともに、須恵器の壺・甕・有蓋高杯・高杯蓋が出土している。

古墳の周溝外からは、近世以降の水田造成による墳丘削平後の覆土から、碧玉製管玉1点と鉄製品数点が出土している。

さらに、下層には弥生時代末の遺構の存在がいくつか確認されていたが、調査は古墳の全容が判明した段階で、真砂土で厚さ約10cmの養生を行った後、埋め戻しを行い、現状復旧している。



fig. 492 水谷大東古墳 全景

3.まとめ

今回の調査では、水田の下に埋もれ、その存在がこれまで判らなかった5世紀末～6世紀初め頃の帆立貝式古墳の全容を明らかにすることができた。

神戸市内での帆立貝式古墳の発掘調査は、天王山3号墳（西区天王山）、出合亀塚古墳（西区中野）、住吉東古墳（東灘区住吉東町）、中村5号墳（西区平野町印路）に次いで5例目となる。

墳丘はほとんどが削られており、埋葬施設は確認できなかったが、周溝はよく保存されており、形象埴輪を含む多くの埴輪が出土している。円筒埴輪・朝顔形埴輪とともに、器壁が薄く、小型である点が特徴的である。

形象埴輪は、そのほとんどがくびれ部から出土している。人物埴輪では同じ個体の破片が東西両側のくびれ部から出土しており、本来は造り出し部のほぼ中央に立ててあったものと推定できる。

また、周溝の外側で埴輪列が確認された古墳も類例がほとんどなく、兵庫県内では御願塚古墳（伊丹市）や打出小槌古墳（芦屋市）で、周溝内の遺物の出土状況から外側にも埴輪列が存在していたと推定されているにすぎない。水谷大東古墳では、周溝の内側と外側に埴輪列が確実に存在することが確認できたと言える。

以上のように、水谷遺跡内のほぼ中央部で今回新たに発見された水谷大東古墳は、周囲にまだ知られていない古墳の存在を示唆するものとして意義深いものである。

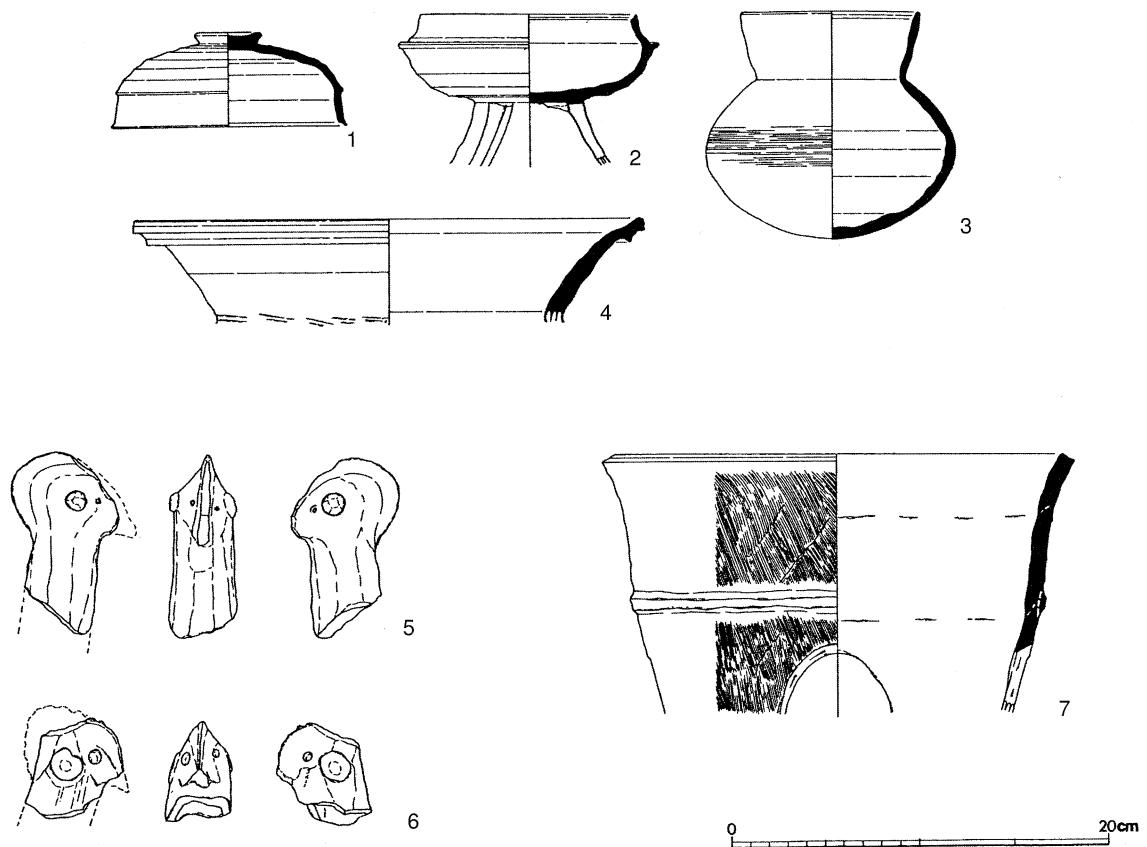


fig. 493 水谷大東古墳周溝出土遺物実測図

(1. 須恵器高壺蓋 2. 須恵器有蓋高壺 3. 須恵器壺
 (4. 須恵器壺 5・6. 鶏形埴輪頭部 7. 円筒埴輪)

こうづばしおおつか
60. 高津橋大塚古墳・高津橋大塚遺跡

1. はじめに

白水地区特定土地区画整理事業に伴い、事業地区内の埋蔵文化財の有無を調べるため、平成7年4月に試掘調査を行った。調査の結果古墳1基（A地区）と遺物を含む層が丘陵上（B・C・D地区）で確認された。事業局側との協議を行い、平成7年12月から調査を開始した。

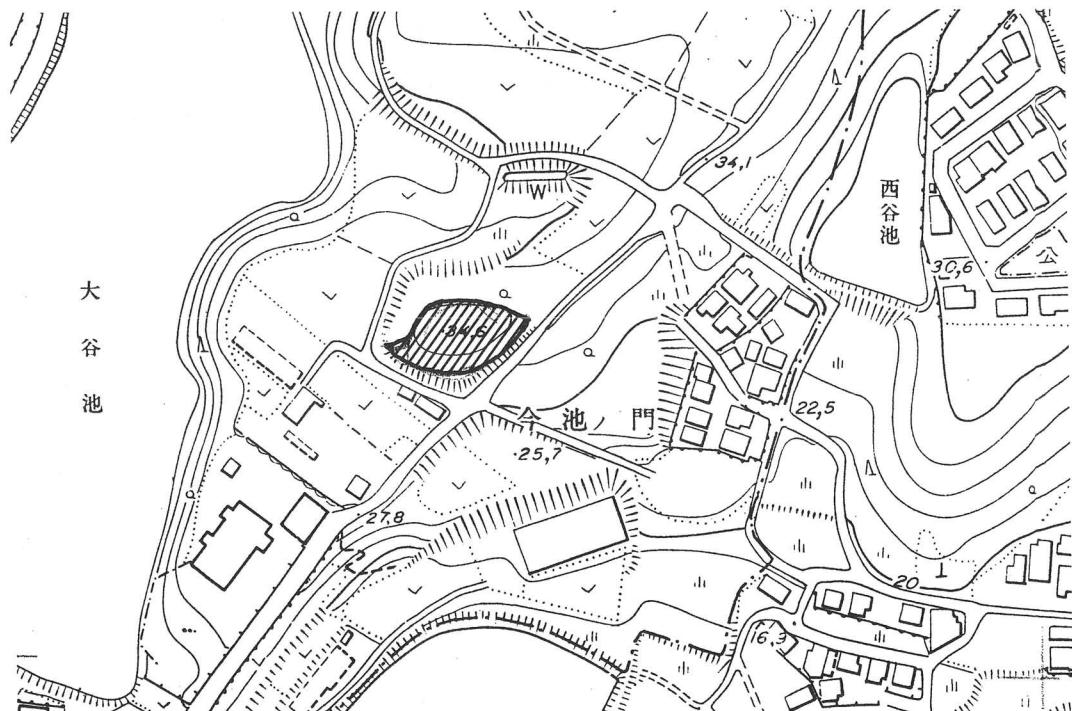
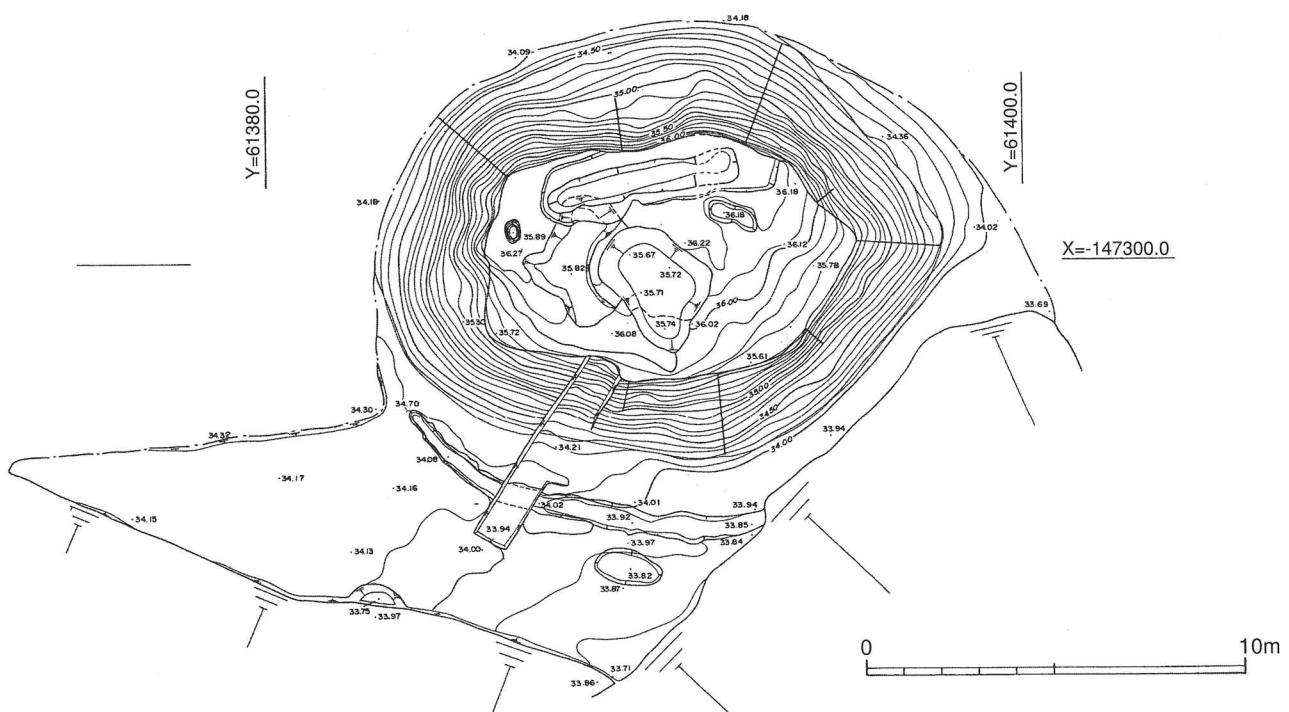


fig. 494
調査地位置図
1:2,500



- 2. 調査の概要**
- A地区** 古墳墳丘は、全て盛土を行い築造されており、墳丘南側には浅いながらも周溝をもつ古墳である。埋葬施設は割竹形木棺で、棺底に粘土が敷かれており、粘土床のほぼ全面に赤色顔料が検出された。粘土床面から捩文鏡1面と勾玉・管玉・臼玉の3種の玉類が出土した。玉の内訳は、勾玉2個・管玉31個・臼玉282個以上である。
- 墳丘の盛土** 墳丘はすべて盛土によって築造されている。地山直上に、まず粘質な礫混じりの砂泥を0.1~0.2mを全面に突き固め、さらに墳丘裾より約2m内側に少量の礫が混じる白色粘土を中心では0.3~0.4m、周辺部で0.1m積んでいる。この白色粘土は、顕微鏡観察では比較的均一な粒子であることが分かった。恐らく自然に淘汰された粘土を持ち込んだものと思われる。
- 次の段階として、墳丘周縁部に土堤状に土を盛り、内側へ土を盛ってゆき、これを繰り返し行うことによって、墳丘を高くしていっているようである。
- 最後に墳丘を覆うように礫の少ない土をのせている状況が観察された。これは表土直下の断面に残された部分的な土層からの類推であるが、墳丘表面を覆う工程があったと考えられる。また土層観察から土盛りの最小単位として、厚さ0.1m・長さ0.5mのブロックが部分的に観察された。
- 周溝** 墳丘に沿って円弧状に検出された。幅0.6m、深さ0.1mの浅い溝で、約10m程検出された。S D01 東側は後世の掘削による崖状地となり消失し、西端は墳丘西側で浅くなり終わっている。S D01の描く円弧から図上復元すると半径10mの規模の円墳が想定される。
- 墳丘南側** 古墳の南側はほぼ平坦で、層序は表土、間層、地山となる。間層は薄くほとんど遺物は出土しなかった。地山は礫を多く含む赤褐色泥砂層である。表土層から少量の土師器片と近現代の陶磁器類が出土した。ここでは溝状遺構と土坑が検出された。
- S D02は、調査区南西隅で検出された幅0.5m・深さ0.1mの溝状遺構である。遺物は出土はない。S K03は、調査区の南東部で検出された幅0.6m・深さ0.1mの溝状の土坑である。土師器片が少量出土した。

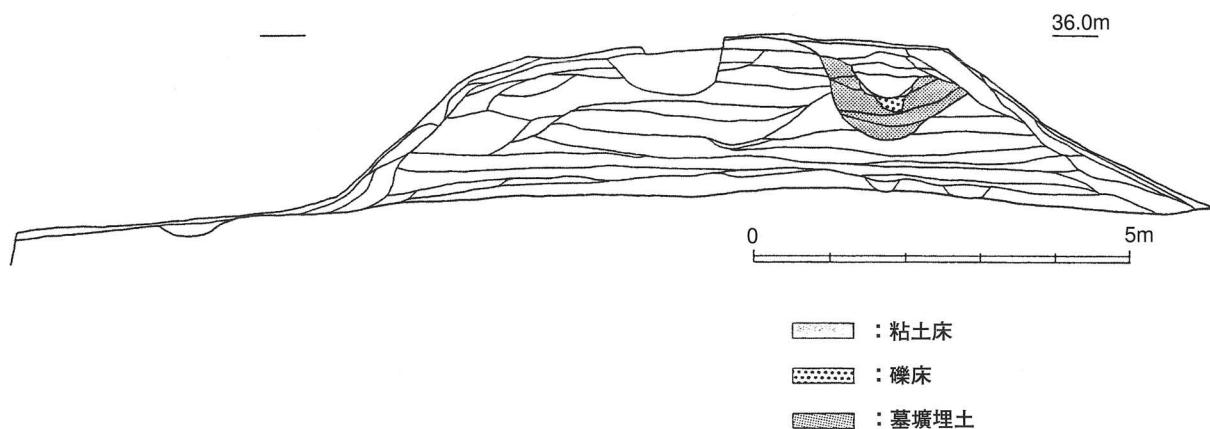


fig. 496 墳丘断面図

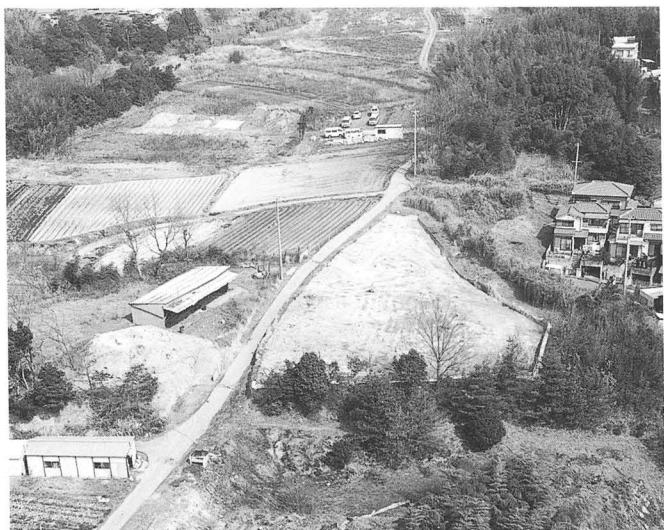


fig. 497 高津橋大塚古墳 遠景



fig. 498 高津橋大塚古墳 墓丘全景

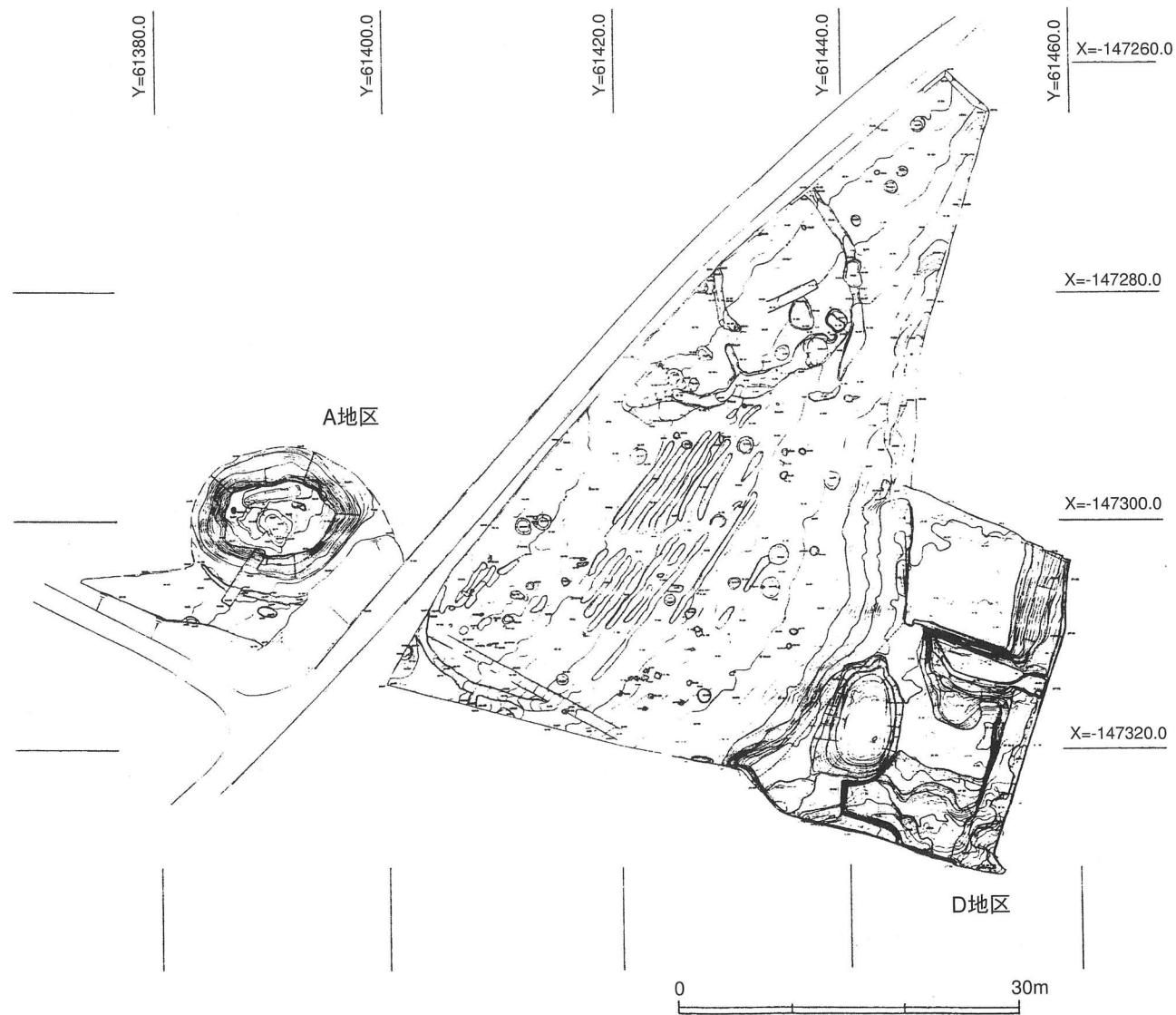


fig. 499 高津橋大塚1号墳と周辺の調査区 測量図

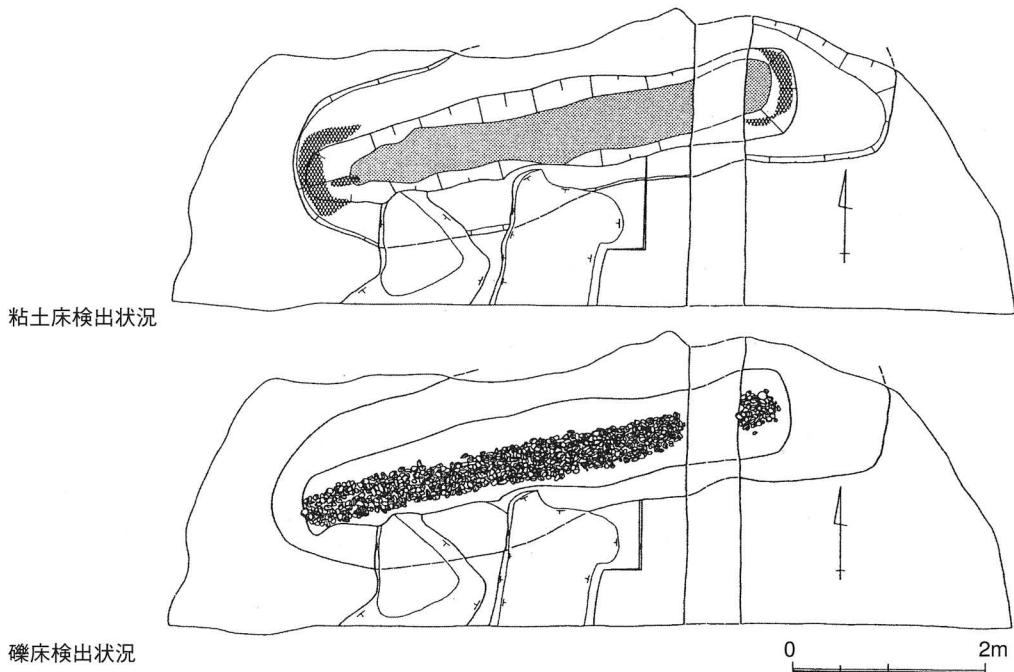


fig. 500 主体部平面図

埋葬施設

平面的には、東西約5.3m・南北約0.8mの規模で棺床となるように黄白色の粘土が敷かれている。棺底となる粘土は、東西端部は棺底より約0.15mの立ち上がりがあり、厚さも約0.1mある。棺小口を安定させる為かと考えられる。これに対し棺底部の粘土の厚さは厚いところでも約0.03mと薄く、棺西半部では礫敷の礫の頭が表れる。粘土は東西小口はやや厚いものの、中央部分は薄い。また粘土は中央部分はやや高く、東西両端が低く、弓形に反ったように検出された。

粘土の掘削の過程で白玉が約10個出土した。1カ所に偏るというものではなく粘土部分にはほぼ全体に不規則に検出されたが、管玉は多少連鎖する様子が捉えられた。また、粘土床西端部で、東西約1m・南北約0.2m程度の範囲で赤色顔料が検出された。

粘土床と墓壙掘形の東西辺と粘土床東小口と東側掘形の間隙には、鉄器類の出土が予測されたが、遺物は全く出土しなかった。



fig. 501 木棺粘土床



fig. 502 同左の礫敷

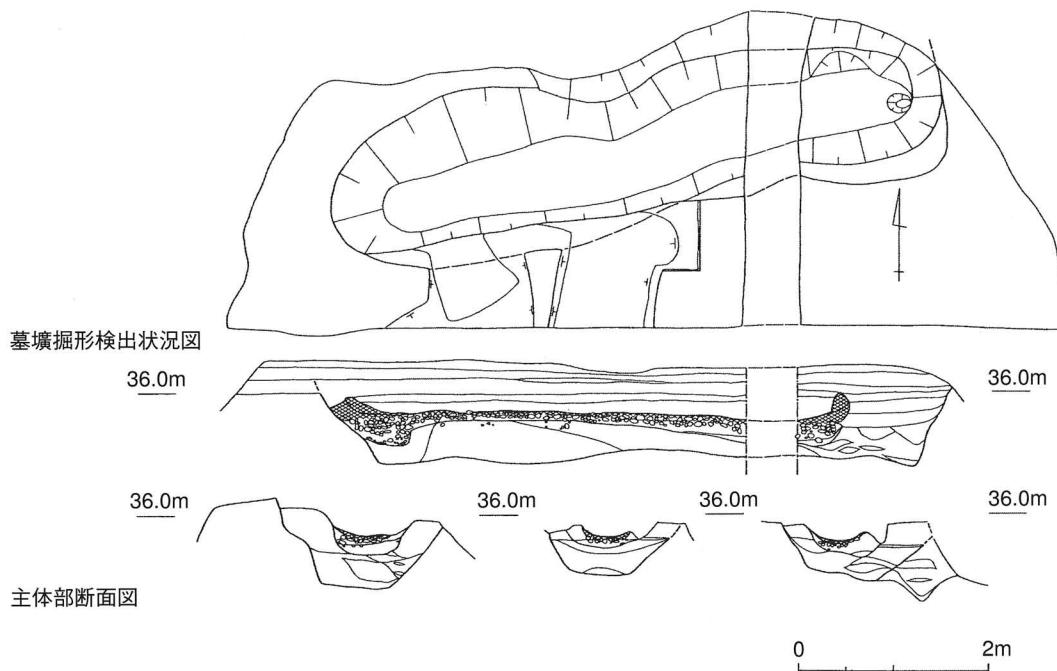


fig. 503 主体部平面図・断面図

不規則な白玉の出土状況と面的な広がりをもつ赤色顔料気の塗布から、粘土床を築造時に一気に粘土床を築造せずに、埋葬施設を築造するにひつような過程（何らかの祭祀）を踏んで築造されたのではないかと推測される。

粘土を除去すると東西約 5.2m・南北約 0.4m の細長い範囲で礫敷が検出される。敷かれた礫は、付近の地山の露頭面に見られるチャートの円礫と同じもので、径 0.05~0.1m の大きさの礫を用いている。礫敷の断面は、東西端がピット状にやや深く、（東端深さ 0.1m・西端 0.3m）中央部は浅く、浅いところでは 0.1m である。敷かれた礫は、周縁部や上面を面的に特に揃えているということはない。

礫敷の東西方向の断面観察より、棺底部粘土のところでも触れたが、礫敷の上面も中央部分はやや高く、東西両端が低く、弓形に反ったように検出された。

墓壙掘形の完掘後の規模は、東西 6.7m・南北 1.7m・深さ 0.8m である。少量の土師器小片が出土した。



fig. 504 磕敷（部分）



fig. 505 墓壙完掘状況

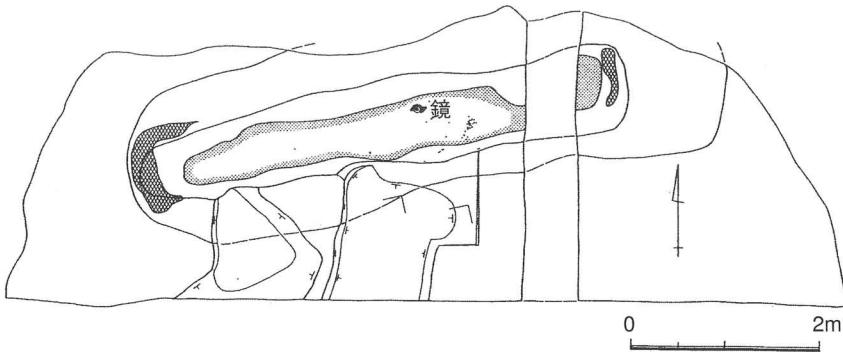


fig. 506 遺物出土状況図

棺内出土遺物 棺東端より2.0m北界でやや東南に傾斜して棺底より鏡が1面出土した。直径78mmの捩文鏡である。外区は素文、内区は外側より外向鋸歯文・櫛歯文となり、次に四乳を配している。乳間には各3個づつの捩文がある。捩文は半肉彫で三日月状に観察され、乳を挟むごとにその方向を変える。一般的には捩文が風車状に同一方向を向くが当例では、この点が特徴的である。捩文の組紐状の表現は簡略化されており、捩文の周囲には細線による獸毛文がみられる。鉢座は圈線と櫛歯文が配されているようであるが、判然としない。

玉類は、勾玉・管玉・臼玉の3種が出土した。その大部分は、鏡から東約0.5mの辺りに集中して検出された。

勾玉は、2個出土した。大きさは、長さ24mm・幅9mm・厚さ7mmと長さ22mm・幅9mm・厚さ6mmである。2個とも濃緑色で滑石製と思われる。

管玉は、31個（欠損片2個を含む）出土した。鏡から東約0.5mの辺りに集中して検出された。2個続いたかのように検出されたものもあるが、規則性は見いだし難い。大きさは、長さ11~25mm・直径4~5mmで長さにばらつきがあり、長・中・短に分類すると長（22~25mm）7個・中（21~17mm）5個・短（16~11mm）17個と中間のものがやや少ない傾向がある。

臼玉は、282個以上出土した。棺底の赤色顔料を敷いた粘土上面もしくは粘土内から検出された。検出状況からは、規則性は判断しがたい。鏡の東約0.5mの辺りに集中して検出されているが、棺西端などからも検出されている。

臼玉の大きさは、直径4~5mm・高さ1.5~4mmで、形態は、扁平なもの・断面形が臼形・算盤玉などである。また、材質は滑石製で、濃緑色・淡緑色・緑灰色・灰白色などの色調を呈する。丁寧に整形し仕上げられたものから未製品と思われるものまで、大きさ・形態・色調は、様々なものが混在している。

古墳の築造時期 古墳の築造時期については、時期を決定付ける遺物がなく判断に苦しむところである。

墳丘表土層から土師器片・須恵器片が少量出土した。土師器片は古墳時代前期頃の高坏で、須恵器片は6世紀以降の甕である。墳丘盛土内からの出土遺物も微量で時期は不明である。墳頂部の遺構内から少量の埴輪片が出土しているが、これも小破片である。

埋葬施設の遺物で、鏡の編年観から言えば5世紀後半と考えられる。これに玉類の組み合わせを考慮すれば、5世紀後半のなかでも6世紀により近い時期を当てるのが妥当であろう。いずれにせよ時期を決定付ける要素に欠ける状況である。

高津橋大塚遺跡

D地区

D地区に隣接するB・C地区での前年度の調査内容について簡略にまとめる。古墳が後世に削平を受けた周溝や6世紀頃の溝などが検出された。今年度調査対象地はB・C地区の東に隣接する箇所である。B・C地区の東端部では埴輪が多く出土する箇所があり、D地区は現況が墳丘状に観察されるため、古墳としての調査を行うこととした。東西と南北方向にトレンチを設定し試掘調査をおこなった。その結果、特に北側・東側については現代の盛土が厚く存在することが判明した。

墳丘の上面での調査では、精査を繰り返し行ったが埋葬施設などの痕跡は判明しなかつた。墳丘西側は前年度調査で埴輪片が多数出土したSD16の延長線上にあり、溝状遺構として調査を行った。しかしながら東西約6.5m・南北約10.3m・深さ1.7mの落ち込み状遺構(SD20)となった。埴輪片・須恵器片などが出土した。この落ち込み状遺構の最下層に当たる層で近世陶磁器が出土し、さらに古墳の墳丘と考えられた盛土の下へ入り込んでいることが判明した。

墳丘南側では、現代の盛土があり、さらに流土が厚く堆積していた。流土を除去すると東西約5m・南北約4m・深さ0.3mの落ち込み状遺構(SX06)が検出された。埴輪片・須恵器片が投棄されたように多量に出土した。埴輪は円筒埴輪が大部分を占めるが、人物・家型・盾型埴輪等も出土した。須恵器はその多くは甕であるが、壺・高杯等が出土している。しかしながら同一のSX06の堆積層よりSD20と同様の近世陶磁器が出土した。以上のことから墳丘と考えられた箇所は近世以降の盛土であることが判明した。この盛土を削除すると地山面となる。この面からは北側へ落ち込むSX07以外には遺構は検出されなかつた。

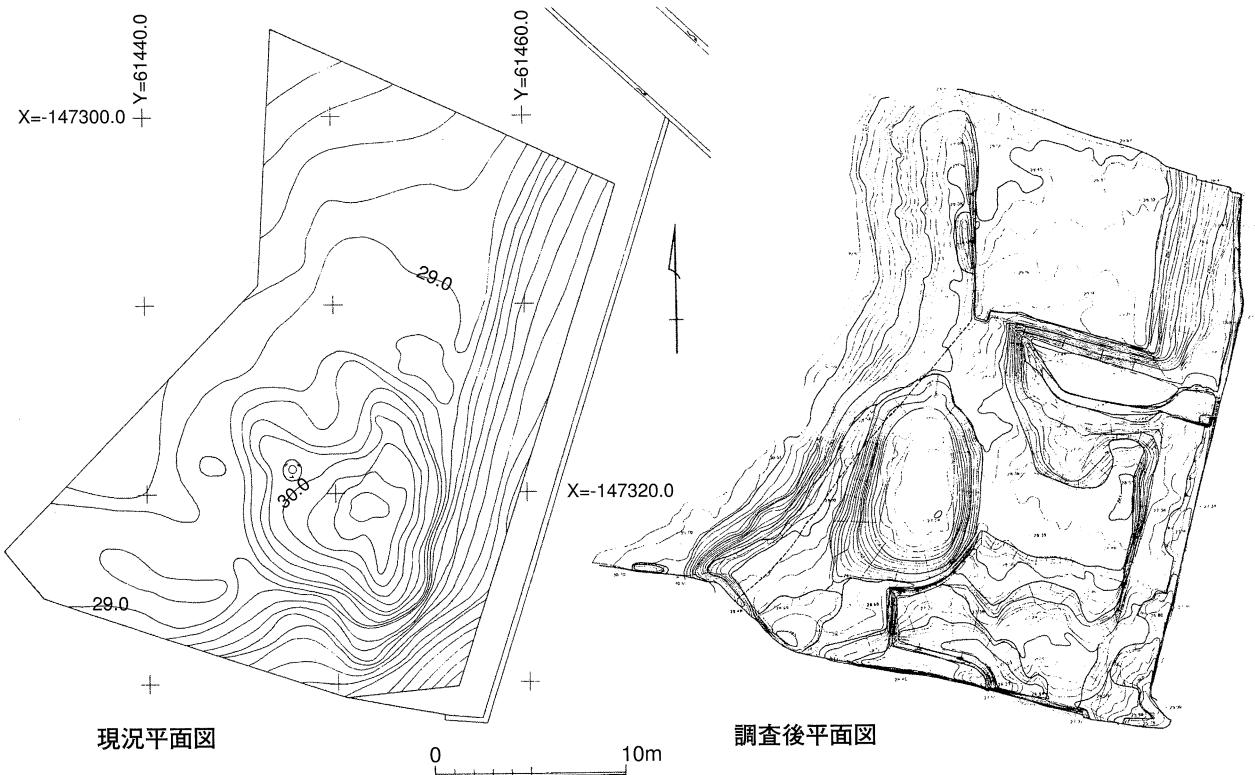


fig. 507 D地区 平面図

3. まとめ

『明石史資料』(明石史談會1925)に「伊川谷村潤和方面踏査の記」があり、「.. 大谷村の大塚山に向ふ、大塚山には大圓墳一個あり..」とあり前後の記述から当古墳の記事と考えられる。少なくとも大正年間には、A地区が古墳として認識されていたことが判る。

当調査区東約200mの延命寺古墳、さらに瓢塚古墳・天王山古墳群へ約1kmの範囲に15基前後の古墳が連なる。古墳が連なる丘陵からは、伊川・永井谷川が形成した段丘地を見下ろす事ができ、谷奥から順次当地域の権力者が古墳を築造していくと言えよう。詳細な検討は今後に委ねるが、以上のことから今回の調査は重要な意義をもつと言えよう。

D地区では、当初古墳としての調査を行っていたが、SD20の調査結果などから近世以降の盛土であることが判明した。出土遺物と調査状況から付近に埴輪を持つ古墳が存在したことが言えよう。しかしながら別の可能性として埴輪を用いた何らかの祭祀が行われた可能性も今後検討すべき課題と言えよう。

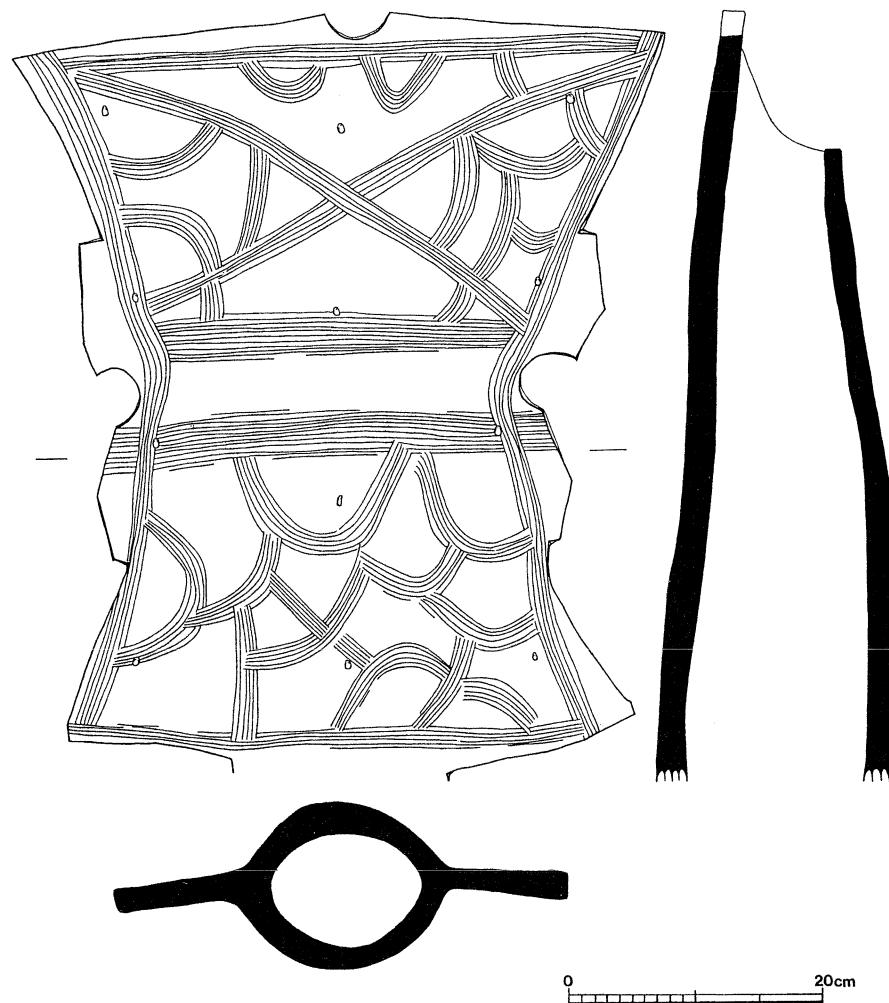


fig. 508
D地区 SX06 出土盾形埴輪復元図

こうづばしおおつか 61. 高津橋大塚遺跡 第2次調査

1. はじめに

高津橋大塚遺跡は、平成7年度の試掘調査によって存在が明らかになった遺跡である。伊川と櫛谷川に挟まれた丘陵に立地し、明石海峡を望む南斜面に立地している。この段丘上には、今年度の調査で帆立貝式古墳が発見された水谷遺跡があり、段丘下には今津遺跡、新方遺跡、潤和遺跡等、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が存在する。

高津橋大塚遺跡のこれまでの調査で、木棺直葬の埋葬施設を持つ上津橋大塚1号墳や同時期の遺構が検出されている。

E地区は谷部の起点に位置し、現況では畠地である。調査区の中央部に谷の痕跡が認められるが、ほぼ平坦である。現在の耕作層の下に、中世から近世の耕作層が数層あり、谷地形を徐々に埋めていた様子が窺える。

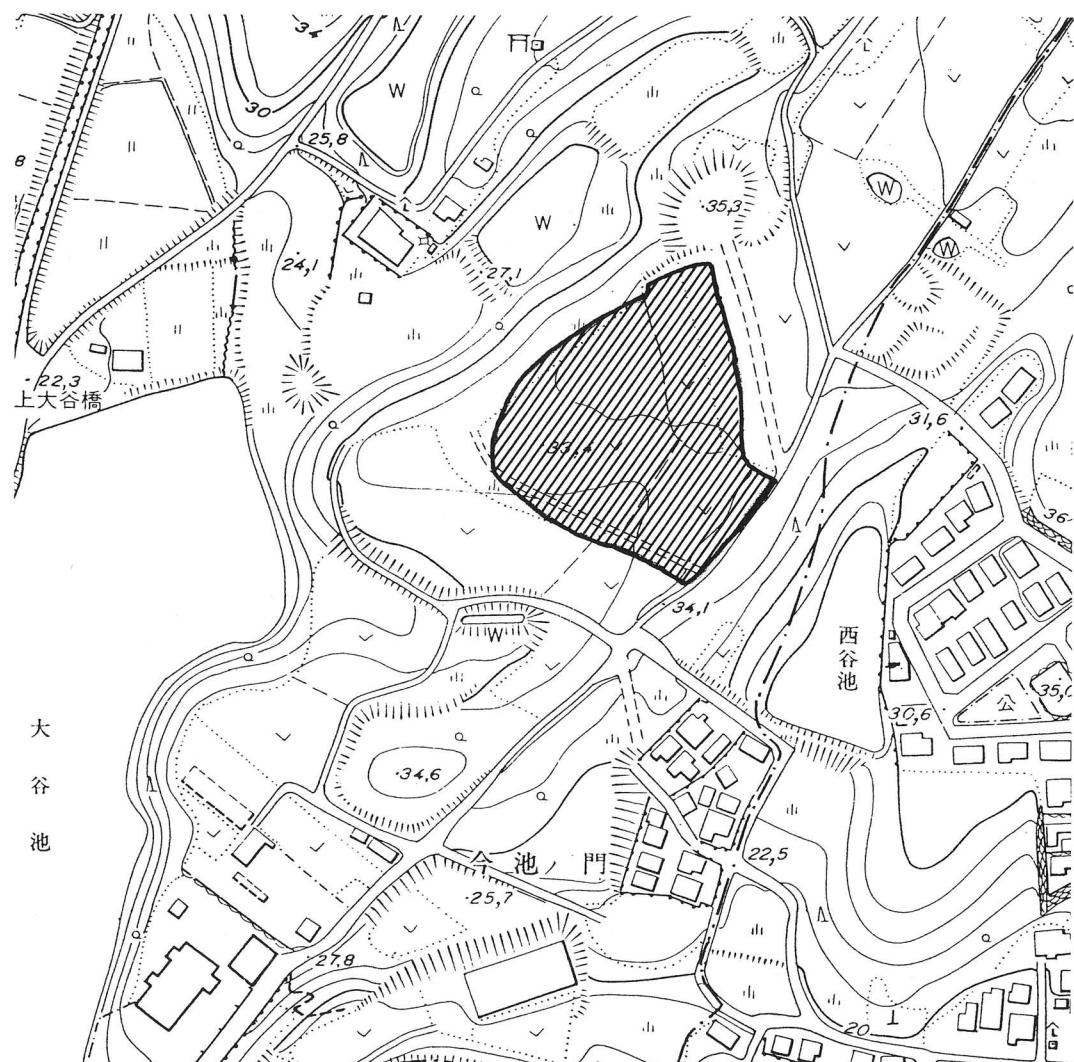


fig. 509
調査地位置図
1:12,500

2. 調査の概要

近・現代

現在の耕作土直下に多数の柱穴が検出された。付近の鶏舎とプランが近似しており、同様の施設が存在した可能性が高い。谷部以外は、耕作及び整地により大きく削平を受けしており、現耕土直下が地山である。そのため、遺構の残存状況は悪く、東半部では遺構は確認できなかった。